小羊漫言

坪内逍遙著

卷中目次

●「讀賣叢譚」
●羽檄
●我國竟ようシエクスピヤ無からんや
●擬投書
●明治二十二年文學上の出來事月表
●明治二十二年文學界の風潮
●明治二十二年の著作家
●新聞紙の小說
●博覽會餘所見記
●兄弟文學（其一、其二、其三、其四）
●「天路歷程」
●明治二十三年上半期文學界の風潮
●小說三派
●「勝關」と「桂姬」と
●「此のぬし」と「教師三昧」と
●三上、高津岡「日本文學史」
●兩學士合著
●忘想錄
●奴
●苞幕時代の學者
●結構的批評
●「眞善美日本人」
●讀法を與さんとする趣意
●「女殺油地獄」を讀みて所感を記す
●近松が時代物
●「戀飛脚」を讀みて梅川を評す

KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

小羊漫言はしがき

春舍漫筆といふ冊子に我が叙事の反古を集めて廿三四年の夢をうつしたれど、あは同じころに書きすてしが若干あるうちより、有斐閣のあるじ評論の反古を集めて一冊とし、世に出ださんとせり、人のごと立ちて言ふ小ひつじのそゞろごとゝ名けつ

讀賣叢譚より日本文學史の評までは讀賣新聞に載せし廿三年中の作、其の餘は廿四年の作なり新聞紙雜誌等に掲けき梅川の評と近松が時代物の署評とは廿五年にいたりて公にしつれど起稿せしは廿三年の末なり

酷しき語格の誤と際立ちて拙きと明ある間違とは此のたび訂正を加へたれどすべて根本の思想は今の意見と殊あれるをすら態と元のまゝに存したり

明治廿六年六月初旬

著者識

小羊漫言

目次

●「讀賣叢譚」 一
●羽檄 六
○我國竟にシエークスピヤ無からんや 十
○擬投書 十七
○明治二十二年文學上の出來事月表 十八
○明治二十二年文學界の風潮 二十二
○明治二十二年の著作家 二十八
○新聞紙の小說 三十二
○博覽會餘所見記 三十九
○兄弟文學（其一、其二、其三、其四） 四十五
○『天路歷程』 五十九
●明治二十三年上半期文學界の風潮 六十三

目　次

◉小說三派　七十一
○『勝圍』と『桂姬』と　八十六
○『此のぬし』と『敎師三昧』と　九十二
○三上高津兩學士合著『日本文學史』　百五
○妄想錄　百十二
○奴　百十二
○舊幕時代の學者　百十三
○結構的批評　百十五
○『眞善美日本人』　百十七
○讀法を與さんとする趣意　百二十二
◉『女殺油地獄』を讀みて所感を記す　百五十一
◉近松が時代物　百八十八
◉『めいどの飛脚』を讀みて梅川を評す　百九十五

小羊漫言

坪內雄藏著

「讀賣叢譚」

大人となれバ年波の返る毎に人さまざまの感慨ありて樂しき年賀の聲もさすがに樂しとは聞かざれど一年を重ぬる毎に行末の見にて賴母しきは小兒の齡と國の齡と雜誌新聞紙の齡となりそは彼等の年とる毎に其だけにおとなび、それだけに智惠まさり又其だけに貫目もつき個人としては國の益となり一國としては世界の益となり新聞雜誌としては世人の益となれバなり扨も我『讀賣新聞』が其たぐひに漏れぬこそ嬉しけれ吾人むかしは小新聞と賤しめられいがめしき向には小供あつかひにせられ心外の年月を經しこともありしがそは已に忘らるゝ噂となり雜譚は生ひたちて大人びたる論說となり今年はまた初子を生り名けて叢譚といふは親の幼名に因るなり

叢譚何の爲に生れたるか親、論說の手助して社會の評判をせんとてなり思ふに今年廿三年は國を人に喩れば國の爲の一月一日なるべし人の上にては一年の

計此日にありといへば國の爲には千歳のはかりごと或は今年の用心と準備とにあるならんされば頼母しき望多きにつれて心じらひも亦多けれバ忙しきこと一ッ二ッにして足らず政事上の事も社會上の事も教育經濟文學等の事もこゝとしよりは一層力を入れて誠實熱心に企圖せざるべからず破壞の世已に過ぎて建前の時に達したりとは識者の繰返して言ひし事なれどまこと去年までの經歴を見れバ材木の選好み何事の上にもかしましく土臺の石すらも置きあへずしてこゝに棟梁のいさかふあれバかしこに職人の一時に泥みて其日の手間賃を貪るも見にしが今年は最早ムダをすべき年にあらず小異同は餘所にして諸共に國益となるべきを圖らざるべからず其中政事上、社會上の事は心ある人の夙に心づきてあれバ今更に新しくいふ迄もあけれど心掛りあるは文學の上なり吾人今の文學を譏りて拙し卑しとは言はずされども公平にいへバ濫りがはしきこと比なし色々の材木散バりて山をなせども未だ棟梁の出るを見ずまた明治新文學のたしかある礎の置かれたるを見ず偶々こゝかしこに門戸の建てらるゝを見ぬにあらねどそは個人の住居にて日本文學氏の公宅とはいふべからず所詮今の文學は一個人の文學にて日本を代表すべき眞の文學とは思はれず斯ても言魂の幸ほふ國と云ふ實あるか併ながら明治の歴史上より言へバ新文學の發達は社會政事よりも後れて始まれりさすれバ斯うあるも自然の順序なり怪訝するに及バず舊文學の破壞されしはやう〳〵きのふけふの事あり否舊文學の礎まだ悉皆は除かれぬなりさすれば建前の遲々たるも今更のやうに驚くには及バぬものから斯う諦めて傍觀せんは隱者仙人の所爲にて人たる行ひに近からず吾人こゝに感ずること深ければこそ自ら揣るに遑あらで今年叢譚の一欄を設けて專ら此筋の事若しくは社説に漏たる社交上の事を評判し遍く有識家に質さんとす夫新聞紙は文學の分家にして文學は吾人の親分あるに子分たる吾人が嗚呼がましく親分の擧動を評判せんとするは冠履顚倒の沙汰に似たれど負ふた子に淺瀬の喩もあり且はみだりがはしき當代の習ひとて是非もなしいふまでもなけれど吾人もとより文學長屋の職人あがり左甚五郎の腕あけれバ飛彈の匠の經驗あるにあらず向後吾人の論ずる所何として千古不拔の確言ならんや墨繩の引ちがひ定めし多からん規矩の間違もまた莫大あるべし但吾人水天宮不動尊に誓をたて知りつゝ墨繩を横さまには引かじおのれが一時の榮利の爲めに決して受負めく仕事はせじと一念文學氏の註文を重ん

し慾を離れ利を忘れおはれ未來の棟梁の爲に大伽藍建立の下圖を作らんと斯
誓つてのけふの首途若し志しの嘉みすべきを識者大家の酌むあらバ吾人の說
の非なる時には一言の教を吝まるゝことなく吾人の議論の足らざる時には數
句の補ひを賜へかし吾人君子の度量なきも過ッては露悋むるを憚らじ吾人の
本願は斯文の爲に犬馬とありて九牛の一毛を裨益せんと欲するのみ豈他念あ
らんや

さりながら退いて思ふに凡そ言ふ所を聞かれんとするには最初に信用を得る
事肝要なり扨信用を得んとするには自ら價値を披露するが佳し是れ賣藥を弘
めんとて能書を配ると同じ手段あれど國の爲にすることなれバ君子も強ちに
咎めざるべし且は彼れ自慢といふもの一應は甚だ面憎きものなれど自惚のあ
りたけを打明けたりと見ばあかゝに可愛き所ありて彼の人聞のよき僞謙遜
が內に大自慢を包めるより遙にうつくしき所あるべし以上手前味噌をいふ前
置として、そもや我『讀賣新聞』は主筆大天狗高田早苗坊が專ら論說の起草に從事
し竹のや仙人が小說を擔當し並んで脫俗の仙筆をふるはれし頃より一種出色
の譽ありて夙に大雅の賞翫を得しがことしより仙人我社を去り餘所の大峯に

籠られたること我社にとりては殘念なれど仙人筆を收められぬからは我文學
にとりては何の損あらむしろ仙人が此等の峯かしこの峯に移り文壇の前鬼後
鬼を取鎭められんと我國の爲に願はしきことなり且將我社も損は受けず何と
なれば其後の文運幸に拙からで仙人飛行し去たる後忽ち許多の將星ありて我
社の屋背に降止まりたかもおの〳〵光を分ッて我新聞の紙面を照せり先づ小
說の欄間の上には舶來藥研にて西丹を錬らんとする紅葉山人といふ將星あり禪學より出て和漢洋に入り和漢洋
をぬけて西鶴に藏れ西鶴の美醜を看破ッて豁然大悟し更に俗人に戻らんとす
る幸田露伴といふ將星あり花實繁簡剛柔濃淡の八行を具足せる落花漂絮とい
ふ將星あり又西洋書いろ〳〵讀み下は讀本の薄きより上はウェブスタル大字
典の厚きまで常に其座右に置き剩へ和漢の書を見るといふ博學坪內逍遙とい
ふ小生あり又不斷の投書家には洒落本其者といふべき幸堂得知といふ通仙あ
ッて芝居道の不動明王、饗庭妙翁の後を承けて時に逝多伽童子とあり羚羊羅童
子の只好子と共に逼く劇界のモヽンガァを悲引す扨同盟の列國には文壇の梁
山泊硯友社の諸文豪思案、眉山、漣、柳浪、漁山、九華をはじめとして一百有餘人の豪

傑あり並に文壇のチリムピヤ山、新聲社の諸神祇、鴎外、越智東風、三木なぞいふ都合十二柱の尊達あり加ふるに折々の寄書家には綠雨醒客といふ文學通兼東京通あッて或時は『ダンシヤッド』の如き諷刺文を草し或時は『書藉の戰』の如き剛諧譚を作り我社の光榮を補くるあり況んや兼好法師に似たる桂のや主人、ゴールド、スミスに似たる四莫亭主人、ラムに似たる市隱子、アヂソンに似たる斯病逸史、スチールに似たるＹＹ生皆將來の寄書家たらんことを約せられたるをやわぞけなく有たけの自慢を言はゞ吾人なか〳〵の文學通にあらざらんや我人が文學の評判をすることの不當ならざるは尚儒者が仁義を講じ浮屠氏が慈悲を說き、玉が鼠を捕り、晝頃に空腹を感じ、德が妖に克ち水の低きにつき、鼠忡と鳴くの不當あらざるがごとしと信ず此を以ての故に明日より折々叢譚を書くべし

羽檄

胸算よりも忙しきものは大晦日とかやことし廿三年は吾人日本人の政事上の大晦日ともいふべし上下の負債山の如し油斷せバ難義立どころに至らん覺者、仙人、道樂者、當世學者、愚人、小供、無慾者の外は手を束ねて難義を待つべしや忙しさ推して知るべし此時吾人ヤッキとあり文學の議論もの〳〵しく書くとも誰か讀まん誰かうなづかん思ふに二の膳三の膳の品數多くておッくうあるは泰平の饗應に宜しといへど矢叫の修羅場には恰好あらず、かゝる時何物か掬飯の手どりバやくて立ながらしたゝめ易きに優るものあらん吾人此理を思ふ故に所論毎に短くはしより成らばさんしよの小粒にしてヒリゝとせんことを期す素新聞紙の用は廣く讀まれて廣く益するにあり徒に道樂者の間食の料とならんこと何ぼう口惜き限なり夫太平のかたちは下戶の穩當に食事せる姿の如く革命の紛亂は上戶の爛醉して暴出たるに似たり儀狄一たび製りてより帝王の天下を養ひ以て百禮を治むといふ此物、世の中太古に戻らバ知らず今更禁ずることゝ出來がたし但願はくは節したし然るに世の不埒者飯を棄てゝ酒を選ぶ是亂を喜ぶものか酒界には之をヂマゴーグといふ酒はまことに天の美祿、飮むは佳したゞ飮まバ人をしてユートピヤに遊ばしめまた混元の世に返らしめよ煦々たること春の腸を貫くが如く喧かあること日の背を炙るが如くあらしめよ文武兼備之を良將と言ひ酒飯左右之を上下戶といふ上下一致之を君民共治といふ惟るに文學の政事に於ける點心の酒家に於

けるが如し點心のみを好む者は下戸中の下ありさりとて膳外に退くるもの未だまことの上戸にあらず竹のやや仙人酒を好めど好んで點心に口を觸る議事堂へ驅る車の上にも長くても一欄半「叢譚」を讀むの餘地なからんや一袋の密柑も時に胸を爽にして惡醉を救ふ吾人のおさなき文も或は政事家の一笑を得ん歟美人の一笑には國を傾くるの憂あれど丈夫の一笑にはたま〳〵其度量の濶きを見る、聞く昔ピユーリタンの一黨笑を忌み點心を忌み只管酒精の苛強きを重んじ悉く下戸を政事外に逐ひ去かバ因果わやまたず王政復古してヤヤールスニ世酒を好むや上下靡然として酒に溺れ全國ヨイ〳〵の巢となりきとかや又佛蘭西に於てはダントン、ロベスピエルの徒一時法外に爛醉して下戸を盛殺すこと万を以て數へしかば國人酒あるを知て飯あるを知らず終に蛇丸の如きナポレオンを崇拜し剩へ歐羅巴一面を酒の海としつとぞぺッ〳〵話を聽くさへも酒くさし思ふにことし廿三年は新年會、懇親會、黨員會、饗應會、說得會、慰撫會、籠絡會、すびき會、賄賂會、成口の同胞は酒に維日も足らざらん吾人深く先繰して渠等の胃を痛め酒亂をはじめ酒に身を果さんことを恐る此際温州の爽かなるか若くは密柑の清々しきありて其醉腸を洗ふを得バ點心の功も亦大ならずやよしさほどに至らぬも濁醪糟中一點の紅梅餅、また以て酒腹の力なきを救ふに足らん併しながら吾人元來山の手に適はん願ふは八方の大雅たちの實果を投せよ敢て西洋果と日人の本意下戸に食はせんの心にあらず下戸にのみ食はせんとならバ別に菓子店を開くもよし日就社は菓子店にあらず廣く世人をもてなすと共に殊に上戸にすゝめんとす今の上戸多くは點心を屑とせず況して忙しき最中能く點心に及ぶ上戸幾人かある投果家願くは此意を酌みて唯一顆若しは一きれ、少きほど更によし願くは投せよ

幸ひに社友より已に寄せられたる點心二三盆あり分量此のくらゐが可し見本として左に掲ぐ

大家取調委員——我國人シエークスピヤ、スヰフト、バイロン、スコット、リットンの輩貴國人の最負にあづかり毎々引合に出さるゝ段名譽の至なり然る處往々筋違の比較履歷等これあり我輩の迷惑勘からず向後は取調委員を設け確なる報道を得て後渠等の名御採用下されたし敬具　築地　英國人　K. K.

近松社の設立を望む――吾人の近松に於けるとは英人の沙翁に於けるとは品こそかはれ崇拝の度頗る似たり只彼は批評的に沙翁を研究し我は多く近松に心酔す沙翁の作も悉く美ならず況んや近松をや名に惚れて實を見わけぬは至愚の業也若し眞に近松を愛せバ其作中何々が最美なるか又何故に最美なるか又年代よりいへバ何々が壯年の作にて何々が晩年の作か又其間に作者の技倆、観念、見識等が如何に發達し變遷せしかを調ぶべし壯年の作には活力あれど老後の作は生氣なしといふは詩文の妙を以て放逸なる想像にのみ歸するものゝ言なり沙翁の壯年の作を讀みて晩年の作を讀めバ殆ど別人の如し蓋し沙翁と雖も人及び人の運命を知りしは晩年の結果なり吾人は年代的兼批評的に取調べたる近松院本論を得んを望む又之を研究する近松社の成らんことを望む

淨瑠璃生

我國終にシエークスピヤ無からんや

蒔かぬ種は生へず習はぬ經は讀まれずと知りながら兎もすれバ浩歎して我國俗は意地無きか今の政治界にグラッドストンを出さず又文壇にシエークスピヤを出さずと罵しること傍人の無理といふべし我新文學はまだ漸く十何歳にも足るまじきを物にならぬとて咎むるは酷し鳶の鷹を生むといふ諺あれど天下何の處にてか鷹に嬭はぬ鳶が鷹を生みしグリーン、マアロウの次にシエークスピヤの出たるフト見れバ不審なれどグリーン、マアロウの徒素より唯の鳶にあらず又當時の英吉利は鳥の居ぬ鄉にあらず燕雀ならぬ許多の大鳥已に大空に舞ひつゝありしなり現にモーア、ワイヤト、サルレー、サッサル、リヽ、の輩前後相ついで新思想を啄み新詞文の巢をこしらへたりきされバ徳孤ならずシエークスピヤに隣ッてスペンサル、ベーコン、ロウレー等の出しを見てもエリザベス文學の偶然ならぬは知らるべし又近世のはじめには何の文名も無かりし獨逸國にギヨオテ、シルレルの生れたるは是も不審の一ッとすれど由來を究むれば何の不思議もなし蓋し彼等に先だちしウサンケルマン、グロプストク、レッシング、ウサーランド、ヘルデルのともがら豈唯の文人ならんや我國俗は兎角に短氣にて物の因果を追ふことをせず彈を見ては鳥を炙らんことを思ひ俗にいふ生れぬ前のむつき定めす扨こそレッシング、グロプストクの出ぬうちにギヨオテを望みサルレー、マアロウを得ぬうちにシエークスピヤを待つ、望の成る難いかな且

や人は自由の勢力といへどそれは社會を船に比せば船を遲速するの力あるをいへるか、全く自然の潮流に逆つて舟を行らんこと思ひもよらず、シエークスピヤも一個人として見れば天然の詩人の如くなれど社會の上より見れば時勢の生みし子なり彼の女王の世にあらずば彼を生む懷のあらんやうなし其他ソルバンテス、ローペ、カルデロンの西班牙に出しも時勢の力與ッて多きに居る識者の耳にはかゝる事入るも管なれど忙しさに忘れたる人の爲に言はんそも第十六世紀の末に英吉利文運の盛にしは其由緣一にして足らずまづは天下の大勢なり彼の學藝復興（リヲーサンス）といふことが伊太利にはじまりて全歐に及び次第に中古の暗を破り新思想と新想像とを此國に齎し人の心を富せしが一ッ又ルーサルが唱へ始めし宗教改革の餘波こゝにもあふれ宗門の觀念の一新せしが一ッ又女皇を失はんとせる謀叛人續々滅び遂に女皇の大敵たりし蘇國女王メレーが難なく刑臺に落命し加之舊教の棟梁西班牙王の大艦隊が元冠の如くに攻寄せしを神風に吹覆へし悉く破り退け國土平隱新教安固となり英人の志氣振ひしが一ッ又冒險者輩出して屢々萬里の遠洋に旅し若くは不毛の異鄉を踏み國の智惠と富とを增し國自慢の氣盛なりしと共に女皇を國の本尊として崇め重んずるの念厚く上下自づから一致せしなどゝ（〳〵）の因ありて扨人の心に餘裕を生じはじめてまことの文學に心を潛め人生の批評に從ひしなり夫の中古時代には人々天國の尊きに比べて人生の墓なきを卑み人を研究するの趣味を認めざりしが當時の英人は然らず又夫のアン女皇の朝には人々首府にのみ意を注ぎてさながら人生に限界を立てしが當時の英人は然らず蓋し彼等の留意せし所は人間全体なり人間の善惡、人間の短所長所、人間の笑及び涙なりき扨人々が斯くの如く人生の留意せる時代となれば人の想像はれのづから人生に向ひ人生の活畫を得んことを樂ひとり〳〵の境遇中に喜怒哀樂の描きいだされたるを見んと欲す此に於てか希臘人が悅びし單樸沈靜の彫像又は單純なる情懷のみを表する抒情詩又音樂も當時の人間の心には充たずされば人の性格を緯としの運命を經とせる脚本（ドラマ）といふもの自然に此時に生れいで國自慢の氣が國人を鼓舞せる時に當り鬱勃たる新想像を驅ッてシエークスピヤ、フレッチエル又マッシンゼルを生むに至れりさすれば當時の文運の興隆を國家の餘融と國自慢の舊發とに歸するも誣言あらずかゝる例尙あり西班牙の文學もまた之によりて發暢しきといふべしソルバンテス、ローペ、カルデロンの輩出せしは實に

チヤールス五世帝が歐洲大半に君臨して剩へ且亞米利加新陸をも統御せし時代なりき西班牙王國の威光の赫々としてかゞやき列國懾服せし時代ありきされバこそそのころ中古文學の陳套を打破して奮然新文學を開きし者は時に干戈を操つて武功をあらはせし勇士ありき然り當時の文人大かたは武人にあらざりしはなし必竟西班牙の文學は士氣奮發の自然の餘波ありつら〳〵我國を見るに君子國日本等の名已に尊し國自慢の念の吾人同胞の胸に鬱勃たるは必然なり左かも維新以來歐米の列國と競爭して未だ曾て追つかず辛く追すがりて後れざらんとするのみ息きれ口渇き殆ど息ふにいとまなし已に息はん遑あらし何の餘融かあるべき已に追つくに及バず何の國自慢、士氣の奮はざる自然の果のみ然るにこゝとし國會成り我が局面一變し少くも外象は歐米の列國に匹敵し内質も隨つて進まんとす士氣奮はざらんとするも得んや況んや明治廿三年以前に許多の文人輩出し新文學の種を蒔きおけるをやエリサベス時代の第二期、大翻譯、大論文、大著述の時代將に咫尺に逼らんとす英人ブルツク、エリサベス文學の第二期を評して曰く千五百八十年以後の英國は喩へば血氣の青年の如し當時の文字には少壯の原素充滿し殊に詩は戀愛荒唐を旨とし想像をほしいまゝにせざるあらし然れども其次の程度に至れば英國の氣格稍々老成し從前は題目の奇を求めこゝかしこにさまよひし心も漸く專に國家に注射し愛國の詩歌盛に興り歷史院本こもごも出づ是れ英國文學の丁年時代也扨其次に至り國人の思想更に内に向ひ深く人生の批評に留意し主觀的の著作盛んに出づシエークスピヤの晩年の作（悲劇）は此大勢に伴へるものなり云云と今我文學を見るに此評に中る事遠らんや但丁年の時代の今漸く來りつゝあるのもぞかしきを奈何せん今の物識の務はみづからシエークスピヤとならんとせずして世をして早く丁年とならしむるにあり吾人今の文壇に未だシエークスピヤ其人を見ず云かれども國を挙て丁年たらしむる力ある人の未だおのれを知らずしてみづから大詩人たらんとして空しく名聞に驅らるゝを見る嗚呼渠等何ぞ奮ッてシエークスピヤを作るの道を開かざる全國人を老成あらしむることを力めざる

若し我國の大勢が大に文學の興隆に適せば吾人豈辯を好んで知れたる事をかしましくいはんや明言すれバ吾人尚心の底に幾分か將來に恐あり何ぞや國會の開設は未だ以て我國俗の國自慢を皷舞し士氣を奮發せしむるに足らざるべ

しと恐れたり彼獨逸國の文學の如きは全國が外國に凌辱せられ挫折分離せる時に起りしが、そは國自慢の裏ともいふべき國辱を恥づるの念に由來す現にシルレルの如きは毎篇自由獨立を歌ひて暗に統一を唱へしにあらずや我國の有樣を見るに條約の改正未だ成らず國辱はた雪がれたりといふ可らず玆かも我國の受くる所のものと日を同じうして語りがたし故に之を慨くの念割合に柔弱にして或少數の人の外は口には之をいふも念底には掛けず優悠として自駒を往かしむ吾人ひそかに恐る此体にして續かば當時に慷慨して自由を歌ふシルレル、未來を看破して人生を語るギヨオテは更あり當時に失望して前人に戻らんとする懷内回顧の詩文人すらなほ終に出でざるべしと嗚呼國自慢の念いまだ十分に高からず國辱を怒る心も亦未だ大ならず我國終に大詩人を出さゝるか

何ぞ然らん國粹保存の析木の響は愛國心のしのゝめを告ぐる聲あり平民主義の鐘の聲は自由獨立の曙光を報ず條約改正論の沸騰廢娼論の湧出其の何れが是なるかは扨措く其由來せる源を問はゞ何れか國自慢の礎を置く者にあらざらん國會の開設には吾人未だ文學上よりして大に重きを置く能はず頼む所は先覺先進の利他精進の行ひなり願はくは渠等をして己を棄て榮利を離れ國の老成を圖らしめよ國まづ丁年たらんか我國終にシエークスピヤ無からんや

擬投書

女の髪と文章――式部の垂髪一丈あまり、らうたげなれど今に向かず物語の文章みやびやかなれど當世には用ふる所あし鍋町形馬琴調と共に廢れて束髪の和洋折衷これもまだ氣に入らずガッツリ島田爲永形と臭まれイチヤウガヘシ新聞の續物と輕んぜらる何時の間にか流行る倉前風これ元祿に戻る前驅か此ところ女の髪文章にのッこされしが今に見よ岩佐又平の女繪目の前に躍るべし女の髪と文章の道行これを退歩といふか何の……女房娘の心經は文人の心經と五分〳〵の忙しさ斯でも無しあゝでも無し釣た曲ッた下ッたと鏡と睨くら工風盡て錦繪と相談卿雙紙を參考書これかあれかと新形狩皆美形を作らうといふ心也誰は誰にかぶれた又まねたとそしるは不了見なりまねる人なくかぶれる人無くバ銘々の丹精そのところ採りあうて扨好いた格好のお髪が出來ます落れバ同じ谷川の水也文章と

擬　投　書

てもその如し元祿文をかく人言文一致を書く人翻譯体をかく人、折衷体をかく人皆是素絹を作る人あり古人繪は素よりすといはれたり素を作る丹精結搆至極あり束髪流行ッて衛生に心づき鍋町廢ッて上品を旨とする如く代謝するさま〴〵の文体いくらか好き跡を殘さゞるべき只一言の注意は後から見て美形前から見てのびッくりはまだよし女房にしてから去狀はかきたくなし

尾花屋生

明治廿二年文學上の出來事月表

こゝに文學といふは重に小說をいふ也小說に文學の全稱を冠らすこと不當なるに似たれど今の小說は新文學の骨髓にして大に在來の和漢文に異なる所あり吾人は未來の日本文學の要素が多く此部門より作らるべきを信ず故に此杜撰あり

一　月　『國民の友』の初刷に端物小說三種を附錄とす美妙齋主人の『蝴蝶』、春のや主人の『細君』、思軒居士の『探偵ユーベル』（飜譯）皆悲哀的なり讀者或は是を奇とすされども譯ありしにあらず『國民の友』に小說の附錄を添ふる事これが始なり○『新小說』といふ小說雜誌思軒居士、竹のや主人、南翠外史等を主筆として發兌せられ『都の花』と並び行はる彼には素性の明かならぬ若年の上手多く此には有名の老成家多し○此頃より冊子小說減り端物小說殖に大概は雜誌を舞臺とす○文章膨脹の必要人も言ひ當人も感ず隨ッて糊口の爲に書く人減り名の爲に書く人殖ゆ

二　月　前年美妙齋主人、思軒居士、なぞが論せし韻文論またチョト波だつ忍月居士、鷗外漁史、池袋清風其他二三の新聞紙これにあづかる鷗外漁史の論を讀みて「〳〵それでは西洋の詩にも平仄のやうなものがありますか」とはじめて驚くもの澤山あり

三　月　『我樂多文庫』改良して『文庫』となる文壇の梁山泊惣出、西鶴の羽バたきッロ〳〵世間にひびく

四　月　向島に小說家の小集あり老成家（新聞に關係したる）二三十人集る曙女史万綠中に一點紅を現ず○『國民の友』大家玩讀書目十種といふものを掲ぐ當代名家の署傳として價値あり

五　月　此頃『女學雜誌』頻りに文學を論じて「美即ち善」の說を主張す極實派の反

動漸く起らんとす

六月　之より先『新著百種』といふ一冊讀切の端物小説毎月のやうに出づ紅葉山人の『色懺悔』つづいて竹のや主人の『堀出しもの』出づ○學海居士の作『文覺勸進帳』といふ脚本多少の改刪を經て梨園に上る居士の脚本今までにいくらもありしが公に首府の檜舞臺に登りしはこれが始めなり學者の作が芝居となりしもこれが始めなり

七月　竹のや主人が前かど新聞紙へ掲げし小説及び續き物『むら竹』といふ題號にて此月より陸續出づ南翠外史の『こぼれ松葉』出づ同じ由來の物也これより竹のや主人の妙廣く知らる

八月　『國民の友』の夏期附錄にS.S.S.社中作の『おもかげ』といふ韻文(飜譯竹のや主人の『艮夜』(小説)思軒居士の『消夏漫筆』北邨散士の『流轉』(小説)掲げらる○時に政事上に於ては條約改正論の熱度極點に近づく文學界には何の影響も無し

九月　『女學雜誌』大に小説及び小説家を論ず○西鶴文次第に流行し言文一致少しく下火とある

十月　和漢洋三体の文を調和するの必要衆の感ずる所となる又時の文學の花多くして實の少おきに心づく○高田早苗、岡倉覺三、森田思軒等盡力して演劇協會を再興す土方宮内大臣會長たり其の發會に學者の作はじめて公に講談師落語家の口に上る○是より先裸美人の畫坊間の繪草紙屋に一ッさがり二ッさがり遂に澤山さがる道德家慨き美術家呆れ兵士喜んで買ひ書生ソット買ふ而して其由來を『國民の友』の初刷に歸する者あり吾人嘗てヴラの佛國に出たるをバ佛國の腐敗に歸せしものあるを聞けり未だ佛國の腐敗のヴラに由來するを説くものを聞かず○『文學評論しがらみ草紙』といふ新誌S.S.S.(新聲社)より出づ鷗外漁史落合直文等これにあづかる

十一月　此頃元祿文、殊に西鶴熱頂上に達す隨て文章の巧拙を評する者四方にあらはれ文派の分類をなす文章の宗門を作る篁村宗思軒宗德富宗等の名此間に定まる

十二月　之より先三昧道人飄然關西に去りてかしこの文學を御せしが此月『新著百種』中へ『松花錄』の作あり曩に出たる露伴子の『風流佛』と共に古風

にして嶄新雙つながら文章の珠を聯ぬ○北邨散士『しがらみ草紙』中に

は慨然小説家の責任を説く

以上洩れたる事定めし多かるべし爰には只思ひ出づるまゝを掲ぐ若し文學界全体に影響せる事又は全體に影響せざるも其反動と思はるゝことあらば願はくは記して寄せたまへ

明治廿二年文學界(重に小説界)の風潮

昨日の叢譚に二十二年に於ける小説界出來事の月表を掲げしが漏れたる事多ければ爰に思ひつくまゝの評論を加ふべし先づ言ふべきは昨年の文學論の傾きなり他の振を見て我を直うし史傳を讀みて身にひきくらぶるは皆人のする事なれど社會全体に係る事となれバ兎角他事として回顧ぬ向もあり斯くして進まば一個人は過まちを再びせねど社會は過まちを繰返すこと無しとせず我人身の程を思はずしてこゝに昨年を回顧るは聊かさる向の注意を喚バんとてなり扨昨年中の文學界(小説界)の經歷を見るに理想上より言へバ不滿足の事多けれど比較的に言へバ喜バしき進歩を見たりといふべし實際上其上の進歩を

望むことは叶はざりしなり當年文學の木鐸となり意識して又は意識せずに輿論を導かんと力めしは重に『國民の友』『新小説』『都の花』『文庫』『女學雜誌』等なるべし就中『國民の友』の初刷に三種の端物小説を載せたるは一時の談柄となりぬ「裸蝴蝶」の噂高かりしを見ても世の注意を惹きしは知らる且件の端物以來世間の小説が總て端物形となり前年の如く冊子の小説を出すこと稀になりぬるかれバ斯短くなりしは『國民の友』の影響かといふに是には自ら別の理由あり他なし此以前より文章推敲の必要を感ずる者又之を説く者交々出で喧に糊口の爲に書く俄文客を抑たり『國民の友』の推敲論築水漁夫の如きは其殿なりきるに大手腕あるにあらずバ長篇を推敲せんこと難けれバ漸く名を重んずるの餘り小説次第に短くなれりさりながら此現象には尚外に理由あり一ッは社會が骨の無き長物にあきたると一ッは小説雜誌流行して作の短かきを貴びしが故なり此點に於ては『都の花』及び『新小説』が摸範を與へたりといふべし以上理由はさま〴〵なれど統括していふ時は世人の目漸く肥えて文章の妍醜に心附きしと著者が其名を大切に思ひはじめとしに因る、これより文章の彫琢盛なり此年中に出し高田早苗の『美辭學』今村長善の『文章哲學』は恰も時に適ひたる著作

あり

文章の彫琢盛なると共に浮華虚飾の弊相伴ひて來れり心ある人は早くも看破して眉を顰め民友記者が「文學の目的は人を樂ましむるにあるか」と論じて文學の定義に主觀客觀の別あるを述て文士の任ずる所更に高かるべきありと言ひしは明言なり讀者に悦ばるゝは文學の受性をいへるのみ玩ばるゝが文客の本意にはあらずされど民友記者の言も何等の反響を文學界に聞かざりき斯くて四月に至り長谷川辰之助が『文學の本色及び平民と文學の關係』といふドブロリウボフの論を譯して浮文を誡めしも同じ着眼より出しならん是また何の反響をも聞かざりき六月に及び内田不知庵『詩文の感應』と題して詩文の妙は風姿にあらずして風情にあり徒に彫琢を事とせば六朝の浮華とあり明代の輕佻とあらんと論じ後又『文學の粉飾』と題して其漏れたるを補へり是亦時弊を痛むの文あり其他民友記者の『愛の特質を説いて我邦の小説家に望む』といふ論文も源は同じ不滿足の泉なるべし扨年末に至り北邨散士の『小説家責任論』いで眞理の發揮人生の説明及び社會の説明をせぬは小説にあらずと説き宇宙主義を唱へたる是また時弊を哀むの餘か扨此間女學雜誌が嚴然『善美唯一主義』を主張し屢〻小

説家を誡めたる其の論の道行こそ異あれこれも時弊の反動あり夫れ傳導師は斯くの如く多かりしが昨年の暮果つるまでは廣く當局者に向つて感銘を與へたりとは思はれず

兎角する間に文章術の進歩驚く可きものあり言文一致は次第に成長して家を成し且自づから數派を作れり一ハ山田美妙齋を祖として歐文の原素多く一は尋常の談話を体として俗に近し思案、柳浪、漣などの文体は是なり二葉亭と鷗外とは前の二派とも異ありて又相同じからず而して其門徒に乏し其外二葉亭の体より出て更に一派をおせるが如き嵯峨のやの一体あり細別せば限あしされど去年中最も盛ありし言文一致派は第二派即ち文庫派のものなり扨言文一致の技倆右の如く上達せしと共に他の文体の技倆も上達し森田派の飜譯体紅葉派の折衷文ますゝ精致に近づき加ふるに淡島に西鶴を噴出する等の事ありしかバ文章を重んずるの傾きと文學界の反動とが相合して言文一致熱大に弛み『讀賣』の竹のやが文章の小道具を喇倒するや輿論大に在來文に向ひ冬季に及び蝸牛露伴天外より飄落して『風流佛』を出すや西鶴熱白熱度に達せり隨つて『むら竹』の陸續出づるや竹のやの信仰者俄に八方に湧出し篁村宗の名嘖々

たり蓋し輿論の目大に文章に肥にたりしなり併ながら此間礒譯文の本家及び言文一致の本家は敢て衰へたりしにあらず又其信仰者を失へりしにあらず思軒の『探偵ユーベル』『伊太利の四人』若くは湖處子の『故郷』『此家』及び『行樂』の如き又は美妙齋の『いちご姫』の如きは文を好む者尚其技を賞して讀めり只當時の輿望に合はざりしのみ之と同時に新体詩韻語に關する議論文海にさゝ波を起しきを惹きしが當年一月に至り池袋清風の『新体詩批評』といふ長文出たり彼れは所謂『博士派の新体詩』を剌り且和歌に押韻の難かるべきを說けり三月に至り忍月居士の譯詩ならば〳〵出づそは無韻にして無調なりしかゞ論者多くは之を非とし『日本』『讀賣』等の新聞に非難の聲きこに遂に國外漁史の『獨逸文學の隆運』と題する短編の詩論出たり西詩に平仄あるを公示せるもの恐らく漁史がはじめなるべし扨六月に及び森三溪の『日本詩文論』出で支考、許六、芭蕉等の和詩を引き押韻の難からざるを說く八月『國民の友』の夏期附錄にΩΩΩの新体譯詩あり譯詩の法丹精を盡せりといふべし然れども褒貶双つながら高くは聞にざりき思ふに多數の人は精讀せざりしならん此のほかにも二三の先覺が工風を凝らせし跡見にたれども總て世の中を搖かすに及ばざりき要するに新体韻語に關する意見は小數の肺肝に蟠まれるのみにて未だ大方の同感を得ざりき喩へゞ水を盛れる藥鑵の火にかざされて久しからざるが如し沸々の音尚微なりと雖も程なく騰昇する時あるべし但し此熱騰せる水によりて靈妙の詩想を融化するの日は未だ豫め期する能はず素絹未だ成らざるの日は繪の巧拙を語る可きにあらず嗚呼我新詩人は二重の困難に當る者なり「詩式（フオーム）」を定むる」と「妙想を生む」との二ッあり吾人は本年に於ける韻語の前途を刮目して看んとす

以上言へる如く文學に對する輿論の傾きは文學と文章とを同視するにありき其證の一二を言へゞ多季に及び『女學雜誌』に近体文章三家として德富、森田、饗庭の三氏を擧げ後又近体文十家を擧ぐ『東西新聞』に小說八宗として重に文章を論じたる若くは『小文學』『文庫』等の雜誌に見はれたる批評の專ら文章を褒貶したるなど何れも文章を主とせるあり扨又元祿文の行はるゝと同時に元祿物の價高まり貸本屋、古本屋、利益を得、飜刻熱また少しきざせしが甚だしきには至らざりき

明治廿二年の著作家

昨年中の小説家は從來の作家に比して數十歩を進めたりしや明かなりされど所謂進歩とは文章の上にして觀念の上にあらず觀念の上より言へば當年の小説は依然として「局部小説」なり即ち或社會の人物、或社會の事件或る一種の情操等を描くに力を盡して全局(即ち人間の運命)に留意せしもの殆ど無かりき然るも一体に文學の理想は技量と共に高上となり四五年以前には專ら脚色に泥み し向も今は人間の性情に留意し人柄を描くを大切とせり是實に著明ある進歩あり併しながら偖ら當年の悲哀小説を見るに先づ泣いて後に立案せしものは殆ど無く立案して後に泣きしもの多きが如し作家の目に涙あつて後に悲哀の人物の成りしにあらで悲哀の人物を作りて後に作家強ひて涙を絞りしかと思はる春のやの『細君』の如き其一例なり美妙齋の「蝴蝶」も巧なる丈に同じ非難をまぬがれず

當年春のやは筆を絶つて退隠し年の暮まで何事をもせず又二葉亭は『浮雲』を中斷して雲間に隠れたりされば此二人は當年の小説界に殆ど關係する所あかりき此間雄飛せるは美妙齋を筆頭とせる『都の花』の諸家、思軒、竹のや、南翠を主筆とせる『新小説』の諸家、紅葉山人を筆頭とせる『文庫』兼『新著百種』の諸家『お八重』及び『露子姫』を著はし且常に批評に從事せし忍月居士『風流佛』を著して忽ち英名を知られたる露伴子、關西を席巻せし三昧道人、獨り脚本壇を占領して優然たりし學海居士、專ら小説の飜譯に從事し時に文學を評論せし鴎外漁史等其尤なるものなり其他そこばくあれども一として特別の社會(新聞社等)にのみ力ありしは除くさて以上の諸家何れも特質あり長所ありて素より優劣を定めがたく將た巧拙を論ずるの要なし只一言公平に言へば前にいふ欠點は多少諸家(飜譯文は除く)共にまぬがれざりし所かと覺ゆ蓋し昨日の叢談中に言ひし文章彫琢熱の八方にひろがるや勢の至るところ安然たる大家と雖もいくらか傳染せし所無きを保せず一呵して十編立どころに成るといふ竹のや主人だに彼の『良夜』と『堀出しもの』とには稿を更へしかと思はるゝ節あり吾人はド、クサンシーが六十度下書せしこと又はマコーレーが一句半章を綴るに數十卷を參考せしことを知るものあり決して彫琢を非ずとは言はず只彫琢の重に文章体裁等の上にのみ用ひられしを憾むのみされば こそ當年程題號、文体、趣向、人物、(編中の)表裝及び体裁に工風の費されしこと近頃に稀なり尤も作家自身は或は心附かずにせしもあ

らんされど傍より見ればさか見ゆるなり喩へば『色懺悔』の題號已に奇にして文体、趣向、人物(二人尼)亦大に奇なり又竹のや主人の自傳体已に奇にして例に似ぬ異地目更に奇あり其他『いちご姫』の着想頗る奇にして『風流佛』また眞に奇想なり或は題號の奇あるあり或は体裁の奇あるありおしなべて皆珍らし吾人素より珍らしきものに飢たり豈文學の嶄新を喜ばしく思はざらん只其珍らしかり し割合に讀者を感銘する所深からざりしを憾むのみ案ずるに趣向文体等は小説の肉なり肉に入る力六分あらば魂に入る力四分となるべし慾には魂に七分と思ふのみ只それだけの事なり併し斯くあること一方より見れば文學製造時代(過日我國遂にシェークスピヤ無からんやといふ叢譚にていひし)の自然あり作家の庸劣あるが故にはあらじ

必竟昨年の小説は概して小感情的(センチメンタル)のものにて廿五六才以下の心に面白かりしものあり然らざれば "Not inspired, but made" なりされば『風流佛』に於て一種の光明を認めたるの外人間の運命を語れるが如き作殆んど嘗て見當らざりき是或ひは讀む者の目の至らざるが故か其が中に北邨散士の『流轉』は流俗を脱したる高潔の観念を包みしや明けし只想像の火よく此の観念を燃やして炎々たらしめしや否やを疑ふ扨小説家のみならずおしなべて言はんに昨年は一個人競爭の時代なりき岡目より見る時は互に奇巧を闘はせし跡掩ふ可らずされば人々の批評を試みるや言ひ合せたらんやうに文壇を戰國に譬へけるも故あり但し當時の戰は南北朝の戰にもあらず朝敵征伐にもあらずむしろ生存競爭の戰ひありき作家皆思ひ〳〵に據り守る所ありしならんさかも斯文の爲に是非せずしてれのが嗜好によりて是非せるもの多かりしに似たり批評家の中にも此傾き多少見にき批評が主か、文章が主か、奇論が主か、將た戲るゝが主か分別しがたきもありき併しながら此等みな文學製造時代(i. e. 新案提出時代、材料採集時代、美醜ふきわけ時代、素絹製作時代、筆ならし時代)の止むを得ざる勢なり只願くは今年は素絹の製造を止めて徐ろに繪の事に取かゝり作家は造化の観察に入念し批評家は過日言ひし如く大詩人を作る下ごしらへに社會を老成とならしむべし今の諸家の伎倆は已にラム、フホンテイン、だるに恥しからじ此上は『ハムレット』『失樂園』又は『ファウスト』の如き大観念を入るゝ頭腦こそほしけれ

新聞紙の小説

友を擇ぶに初見參の判斷は先入主となるといふ恐れなけれバれのづから見違ひ勘しとは古人の言なるが是一理にして純理ならず直覺の効能は人にこそよるべけれ無經驗の少年が始めて僞君子に見えんに爭でか僞德を看破し得べきされバとて親み交はること深けれバ魚肆に寄宿して腥きを忘れ藥種屋に奉公して藥臭きに氣づかぬが如く醜きをも妍しと見るに至らん只夫の粗忽ならずしてかたよらぬ目にこそ眞の判斷は存すべけれ社會の事を見る目にも間々此例のあてはまるべきあり夫の新聞紙に始めて小說の載せらるゝや世人多くは目を見張り新聞紙は新しき事實を報道すべきものなるに事ふりたる作物語を掲ぐること理に於てある可からずなど罵る者多かりき然るに西洋の新聞紙にも小說はありと噂するに及びて非難の聲いつしか消つ今は嚴めしき向の新聞紙の外は何れも競つて小說をかゝぐさすれバ初め小說を斥けしが道理か後にこれを容れしが是か何事にも西洋の手振が後楯となるものならバコーセットもよし決鬪もよし裸体像もよし壯麗の私娼もよし賄賂もよし秘密選擧會もよし

吾人思ふに新聞紙に小說を載するの是非は西洋の手振に問ふに及ばず新聞紙の務は素より報道のみにあらねバ讀者の娛の料を作るもよし但し新聞紙の讀者は少數人にあらずして(內實は兎も角も表向きは)社會全体なれバ賢愚老少男女を問はず皆新聞紙を讀むといふことを忘る可らず是新聞紙の冊子と異なれる要點にして冊子の著者と新聞紙の記者と用心を異にすべき所以なり或意味にて言へバ冊子は割合に有限なる讀者を有し新聞紙は割合に無限なる讀者を有す第一、冊子は價も貴く又品によりては專門家にあらざれバ買はぬものもあり新聞紙は然らず些も雅心なき者もフト買ひとりて讀むとあるべしされバ記者にして注意せざれバ娛しませんとして不快を覺にさせ益せんとして害を蒙らせ思はぬ罪を作ることあらん蓋某の調理の長信の口に適はざりし如く奈良茶を嗜む口はヤタイチの下物に舌皷は打たじさのみならバまだよけれど支那料理の膏濃きは日本人の胃を痛め小兒の喫烟は動もすれバ暈を起さしむ就中小說は少年の注意を惹くものなれバ記者力めて當世に注目し社會と我との關係を察せずバ不本意の危害を釀すことあらん若しかの美術といふものが絕對的にいはるるものならバ吾人は信ず裸体美人の像も淺ましき筋の書も(其手際だに

巧妙ならバ)或は美術の仲間に入るべしと併しそは絶對的にいふ美術の上にて社會に見すべきものにはあらじこれを絶對的美術家は美ともせんさりながら廣くいふ社會には階級幾段もありて人の品さまざまなり雅人は鹿の聲を聞いて秋の哀れを知り獵夫は同じ聲を聞いて彈藥を取出す祇園精舍の鐘の音も沙羅雙樹の花の色も見聽く者の心にこそよれ人さまざまの見解作者の思ふやうならず木下藤吉郎の所行は時に借倒しの口實となりお七お染の身の果は間々同感を喚ぶにあらずや蓋し諷誡は高尚なる謎なり只の謎さへも智惠なければ解きがたし況して高尚なる謎の誤解すれバ害あるものをや是を賢愚混淆の社會に見するはあやうきとあり兎に角に新聞紙の小說には吾人かゝる作の載せられざるを願ふむしろ有益にして面白きものか又は無害にしてうるはしきもの佳し斯く言へバとて吾人敢て勸懲主義を復興せよといふに非ず社會と新聞紙との關係に留意し禍の種を蒔かざれといふのみ此筋の議論は夙に『報知新聞』が論せしことあり又『女學雜誌』が論せしこともあり只彼と此と異なる點は彼は此論を小說全體の上にいひ吾人は新聞紙の小說にのみいふ是には深き譯あれど論の橫道に入るを忌めバこゝには悉く言ふに由なし只一言いへバ冊子とする小說は新聞紙のものよりも用心刻鏤すべき餘地多けれバおのづから誤解せられぬやう本意を明かにするを得べし又讀者を限るを得べし喩へバ我『讀賣新聞』は卑しき記事なしとて今の大方の愛讀を得たるが突然若し卑しき小說の我欄內に上ることあらんに親達敏く之を認めて其子女の讀むを禁ずるを得べしや老人は多く小說を讀まざるに要するに新聞紙の小說は冊子となれる小說よりも一倍の責任を負へるもの也されバおのづから不自由多し尋常の小說家の如く樂屋落をいふこと能はず何となれバ讀者は多く他人なれバなり又大に濫がること出來ず何となれバ讀者は多く俗人なれバなり已に此不自由の牢屋の中に在り渠等でか他の小說家と伎倆を比角することを得べき蓋し新聞紙の小說は純然たる文學的小說を以て見る可らずよし美術として欠くる所あるも新聞紙たるの義務即ち廣く益し廣く樂ますといふ點に於て本分を盡す所あらば十分賞美して當然あるべし然るに怪しむべきは今の作者及び批評家あり後者は新聞紙の小說を以て兎もすれば文人を上下せんとし文人もまた之にかゝづらひて少數の褒貶に目張り耳たて數欄の小說を綴るにだに彫琢の苦勞勘からざらんとす吾人は此等彫琢の當

人の爲に益あるを知るも新聞紙の爲に社會の爲に益あるを知らず或少數の讀者の外は殆ど留意して讀まねばあり夫れ文學を益せんとおらば世に其筋の雜誌多し彼の欄內に掲げてこそ色をも香をも知る人に遭はめ當世の景況を知らんとする新聞紙の讀者は概して題目を走讀して心を惹く所に目を注ぐ何の暇あッて賞鑑を事とせんさりおがら當人の神經はさもあらんこれはまだ酌量すべし只怪しかるは批評家なりもと新聞におがら新作を評すらんやうに小說の體を成さずおど罵る斯かる人はアル并ングの『スケッチ』を讀みて小說にあらずと叱りアヂソンの『ローゼル、ド、カヴリ』を非りて支離滅裂の小說ありといふべし世間の文章は物語の体を成しさへすれバ皆小說と思へるにや不思議あり新聞紙の小說家が氣にして彫琢を事とするもかゝる批評家のあれバおらん罪は後者の上にあり

扨新聞紙と冊子とは大に異ある所尙一ッあり新聞紙も冊子も世の傳導師といふ點は同じなれど著作者の手心に相違ある意見を吐き或特別の人々(Picked men)に向ッて傳導を試みるともあらん喩へバ世尊が羅漢に說法ありし如く劣等の傳導師を敎へんとて無上の大眞理を說

くこともあるべし新聞紙は然らず其聽衆は社會全體あり其中には匹婦匹夫も含まれたれば冊子の調子にて說かバ大聲俚耳に入らで何の裨益する所無からん是故に大見識の冊子は社會に先だつこと多くて十步に過ぐるは非しして當世と同じ水準に立ち只管無明の徒に媚を賣るは是れ傳導師たるの職を忘るゝ者あり吾人は斯かる新聞紙を目して商賣人といふ傳導師とは言はず尤も吾人も或意味に於て新聞屋の商人たることを知らぬにあらず然れども其善く賣れんことを願ふは其言ふ所の廣く世に益あらんことを願ふに因ると信ず若しまた然らで新聞事業は全く金儲の爲ありといはゞ吾人また何をか言はんそれは格別若し夫の新聞記者にして哲學者又は美術家を氣取らば是嬰兒に向ッて後主を說く者か然らざれば古器物を見せて誇る者あり渠未だ今生を知らず豈後生の大切あるを解せん又未だ現物をも辨じ得ず況んや新古の差別をやかゝるべきは自からの必要あり彼の新聞紙に掲げしものを見て淺し拙しと譏るものは奇人として除て置くべし

兎に角に新聞紙の小說は若年家の注意を惹くこと多し隨ッて其惹きかた巧け

れバ益する所も多し故に廣く讀まれ且當日に讀まるゝが肝要あり是また冊子と新聞紙との異なる點あり夫冊子の小說は百歲の後までも傳はるべきもの新聞紙は(大概當日一日のもの彼は後の知己をも俟たん此は當日に讀まれずバ全編合せて八ページ澁紙の下張とせられて怨を呑むも慶政の亡靈には似で朧朦とだに現れん期無し文士の文を作る素より名聞の爲にせざるべしされバとて讀まれずバ人を娛ませがたく將た世を益しがたし娛ませず又益せざるもの吾人其何爲者たるを知らず

さらバ廣く讀まれんには如何にせば可きかといふに局部の嗜好に訴へで普通の人情に訴ふるに若かず普通の人情に訴ふるには下にいふ條々に從ふを可とすすされバ第一作者の丹精空とならず且廣く娛ましめ益すると共に今の或種類の作よりも眞の文學に近かるべし

第一　小說にも當世の事情を報道するの意を含ませ成るべく當世を本尊とし現在の人情風俗又は傾き等をしめすべし

第二　誰が見ても同感し得べき事、さなくとも多數の人に解る事、即ち樂屋落にならぬやうにすべし

第三　親子兄弟並びて讀むとも差支おきやうに

第四　過去の事又は未來の事を種とせバ成るべく當世と異なる點を今の人に知らしむるやうに

第五　所詮娛ましむると同時に當世の有樣を報道するか然らざれバ多少敎へ導く心ありたし

此注文おそらくは無理おらん局に當らぬ者のいふ事當局者の氣に叶ふ筈なし出來ぬとならば其迄おりせめて新聞紙を艸双紙の如くしたくおし一体に小說の數を減したし少くも新聞紙らしくおきを

博覽會餘所見記

序びらき

此記の序びらきせよと吩咐られて獨り上野の公園へ出向ふ晴るゝを俟ちかねて沸いでし人の雲何處捕へて何といふべきや辛うじてくゞりぬけて會に入るりしが蹈こたへ思ふやう觀るべきは先づ人驅て人の氣にうたれてふら〳〵とおりしかそも物か列品もめざましけれど此人出もめざまし此雜多の人種皆同胞と思

へバ多少の感おかるべしや先づ見よ女性の髪の風、衣裳の好み、身のまはり、身分は同じ程と見にたる男の衣類、持物、身のまはり、同じやうの貌したる人のさまざまなる語音、調子、言葉癖、都人士と地方の人との姿態の相違、斯くも思ひ〳〵ありし例昔もありしにや堅氣らしき奥さまの署式、素人姿せる藝妓大年増の派手衣裳、腰元の羽織被たる、これらはいふも管々し、其他色あひの取あはせ上被下被の好み何を本として定むるや變化餘りありて統一なし美といはまくすともいはれまじき也或はこれを自由の氣の溢れとして祝すべきかされど能く思へバこれら皆秩序に伴はぬ情の自由なり爰に知る風俗今思ひ〳〵となりて昔謂ふ禮儀格式は殆ど其影を沒せしことを但し此事衣裳身のまはりに留まらバいふにも足らじ更に源あるを知らバ誹りて止べきにあらじ

又一つ目にとまりしは衣裳身のまはりに贋物多きことあり唐縮緬、觀光縮緬、綿南部、綿お召のきはだちたる、あかし玉、吾妻玉の著きは誰れの目にも知らるれど綿繻珍の艶までを能く似せたる、綿更紗の下被となりて微見にたる、唐繻子織の匂ひの髣髴たる、さては飴色馬爪の麗しき、贋珊瑚の疵まで似たる、素人が瞥と見て眞物と贋物とを分たんや聞く昔は中以下の人も斯うは贋物をよろこバざりきと分に安んじてありけれバなるべし今は然らず小き借屋に住む細君も上被バかり眞の糸織被て下被は綿物にて化さんとす是れ何の故ぞ贅澤を好む故か奢る者何條氣のひける贋物を用ひんや不景氣の餘波か貧しき者上被に大まいの財つかはんや因縁は外にあるべし此事も衣裳身のまはりに留まらバ半欄を埋るの要なけれど其流行の及ぶところ重大あり見よ衣類の贋ひを見ては爪はじきして自分せぬ者は女子にもあり然るに他の贋物を見ては當世の眞物とし剩へそれに倣はんとする者男子にも多數ありこれを何と評すべき夫れ眞物と贋とは其皮相は酷だ似たり殆んど判ず可らず而も唐縮緬は風にあうて玄なはずして搖き本縮緬は波うちて翻へるが如く又は唐繻子織の艶匂ひの目ざましきも所詮はきはだたぬ本物の温雅しき徳は及バざるが如く事にあたり物に觸て終に正体を明すべしとかや況て久しくせバ翁屋の香水庫と日本橋の魚市とほどの差あらんされど世には只一夏の晴を目的とし觀光縮緬に近眼を化し秋となりて臀〳〵バリ果はぬけいづる見苦しさを思はず一向日前を飾りあるくもあり扨も奇怪至極やと思ひつゝフト我身を顧みれバ鼠色になりし袖口についたる金色鈕いつの間にか赤みてあり嗚呼これも滅金なりしか知らざりしゆゑ

とはいへど我、我に對して恥かし、思ふに世間我とおなじく知らでかぶれたるも多からん心づかバ再び鈕を滅金する勿れ我が初度の餘所見の記これのみなり以て序びらきの詞に代ふ

其の二

昔しデカルテ家居櫛の齒の如く比び車馬人籟雷の如きアムストルダムの街頭を過ぎりし時我は林の間を通て梢を拂ふ風の音を聞きたらんやうにのみ覺ときとぞいひし哲學者の心、形而下の物にあらで其の觀念するところ甚だ遠く深けれバあるべし吾人餘所見の記作らんとて往ぬる日博覽會へ往き此處かしこ漫歩せしが眉の間茫々として譬へば春秋の花一時に咲いたる大室の中に入りたらんが如く心惑ひ目眩み何の發明する所も無かりきそは前にいへる塲合に似て其内實の非なるが如し思ふに我は平生の觀念漠々たれば心無差別に外物に掩はれ何等の發揮をも得爲さざる也同じく人にして我と彼れとの間には涙一滴と大海との相違あり耻かしといふべきか口惜しといふべきか扨家に歸りし後役目なれば止むべきにあらねば目鏡もて見たる鼻先の事どもつく〳〵思ひ出しつゝ書はじむされど書くことも〳〵おかしからぬことバかり也これを書きならべて何の用あるか書く吾さへ知らず況て他は何といふらん例へば地方の人の可笑かりし風俗擧動二ツ三ツ目にあれどそれらは果して可笑かるべき筈のものか將た可笑しかるまじき筈のものか若し可笑かるべき筈のものならバ可笑かるべき筈のものを可笑しといふバかり世の中に可笑しきは無かるべし若し又可笑しかるまじきものならばそれを可笑しといふ本より違へり思ふに當然の事は可笑しかるまじきなり然らバ假に田舍の媼が五千圓の屏風を見て魂消たりとせんか魂消るは當然あるべしこれを可笑と笑はで質樸と褒むべきか、山間僻地の民何れの世にか質樸敦厚あらざりし取いでゝ褒むるだけが野暮なるべしさあらバ異樣の服裝、異樣の人物、それを拾ひて寫すべきか、そは淺草の公園に小屋張る人のする事に似たり屑よからず然らバ若き男女の見よがしに繋り歩きたる、又は見に來たりといはんよりは見られに來たりと云べきさまにもてなしたる、若しは物知らぬ癖にトンチンカンの品評下したる、或は譏るを見識と心得てか見る物毎に口穢くケナシたる或は斯かる品取るに足らずといひつゝも内心欲しと思ひたる、其他巨家の旦那の如く見せかけてあはよくバ他の懐中物奪はんと覗ひたる、法律の罪人と

成ぬやうに工風して地方の人をあざむきたる、彼れはスリと知りながら後の崇を恐れて見ぬ振したる、第一本館の入口にて草臥つゝ歸る人を意久地無しと譏りながら其身も機械館見殘したる、我がしれる貴婦人がさる帶地褒めて通り過たぎるを見て即坐に其帶を約定したる、我受持ならぬと知るべきかといはぬばかりに物問ふ人に對して或る番人の不深切なる、無法に館内を廻りて道に迷ひあがら會場の順路わるしと腹立たる、我心にさへアヤフヤあるを確かさうに品評して同伴の人に講釋したる、人の心は樣々なれバ銘々思ひ思ひ當然ありと獨り頷いて冷淡に通り過ぎたる、他人の鑑定ちがひせるを笑止に思ひそれは云々此れは云々と一々深切に誤りを正したる、此等深切なる鑑定家が細些の事よりして口論をはじめそれが爲他を敎ふると留主になりたる、これらの振舞をや書綴るべき否これとてもまた詮無し何が故に詮無き、世人皆知りたれバあり毎日の觀覽人數くとも一万何千人渠等會場を往來して毎に此等の現象を見る、見て歸りて其知交に語る、今はしも此等の現象を詳知したる者日本國中幾千万人の多きに及びたるならん然れども何の詮無し渠等は吾人と同じく見知したるのみにて會通する所なければ也みづから詳知してすら詮無くバ無會通の吾人の觀察を語るとも何の詮かあらん已に詮無し詮無しと知りつゝ書くは最も詮無し故に書きかけたる五六枚を火中して筆を投ず

兄弟文學

ふたごの似たるゝ更にもいはずまことの兄弟の似たるもおかしからず當然のことなれバあり他人のそら似こそいとゞ目に留るものなれされバ陽虎の孔子に似たるソクラチスの痴人に似たる忘れられぬお伽草の種ありけり戲作の本に見えし繪兄弟晋子か輯めし句兄弟なぞまた其たぐひあるべくやさすれバ詩文小說にも腹がはりの兄弟はあるべし思ひ出して見ばやと床ばあれわるき此頃の朝の現に、これかあれかと思ひたどるうちに先づ思ひついたるを爰に掲ぐ強ち西洋と東洋とを比べんとにはあらねど和漢の間にある兄弟文學は物しらぬ我こそ知らざれ他は夙に心附いておはすべしと思へバ重に西洋種をとりて扱さやうの對照をも加へ短く筋書を添ふることもあるべし承知の人は見ぬふりせよ御らうじたかと答ふべし

最初に掲ぐべきは

東　『西遊記』　作者未詳

西　『天道（ピルグリムス・プログレッス）遡源』　英人バンヤン

なり此二書は形こそおなじからね腹がはりの兄弟といふことは爭ふべからず扨双つとも聖人の教を種として小説の形とせるものなれば何れ此批評は吾人凡夫の本領にあらねバ只皮相をそつといふべし就中『西遊記』は粗末の飜譯を續みしバかりなれバ意馬心猿の喩は何れのあたりにあるか藏神、藏聲、藏氣の三藏とは何の事か毎篇あらはるゝ所の惡魔王は恐らく六根の障碍なるべしとは思ひ測りながら終に無明のへロへロ矢合點の金的（きんてき）に觸たらしき手ごたへもなし只皮相の姿をいへバ『西遊記』は複雜にして豐富なれど『天道遡源』は單簡にして淡泊なり此は浪漫にして荒唐あれど彼は温雅にして當然あり此は殺伐にして賑かなれど彼は蕭條として秋のごとし『西遊記』は誤りて讀めば他界の『水滸傳』となるべく『天道遡源』は引きあはして一部の社會小説とおすに足る、後者に見ゆる人物は人間なり前者にあらはるゝ者は天魔たるに近し扨も其人物の人の如くならざるが寓意の更に深き所以かはた人間を見せたるが作者の詩眼の優れる

所か免も角も雙方ともに宗旨にかゝるアレゴリー（寓意譯似たり）や似たり花あやめとまでは出でたれど其後は洒落も出ず論もおし比較の沙汰は金次第と聞きしがこれゝ天道極樂の沙汰なれバトント何の詮方も無しさりながら吾人内々に疑ふ『西遊記』は果して噂の如く徹頭徹尾人間の説明を主意とせるものか凡眼をもて見れバ要おき笑謔勘しとせず西洋に謂ふ神仙叢話（フェアリー・テールス）に髣髴たる所多しと思ふは非か恐らくは非おらん識者もし斯文の爲に半日を空うし『西遊記』の細評を語らバ其巧徳莫大ならん君子豪傑を本尊として空間廣くかけまはらするを規摸の大おる小説と心得たる人もそれが爲に目を醒ますべく我家の猫を寫生して猫を畫きたりと思へるものも又あらためて悟る所あるべし吾人不學自ら其道の書を讀むこと能はず先づ取あへず學海先生の方角に向つて合掌し更に槐南先生の方角に向つて三拜すおはれ不學の蒙を啓け

西洋にては『天堂遡源（ピルグリムス・プログレス）』を讀まぬもの殆ど稀なるべし就中英國にては此書の行はるゝこと聖書（バイブル）に次ぐといふ蓋しこれには文學上の價値（ねうち）の外二ッの理由あり其文の平易にして何人にも解せらるゝと其主意の聖教（せいけう）に基けると此二ッなりされバマコーレーの評にいふ「バンヤンの字林（ボカビラリ）は平民の字林なり二三の神學の語（ごと）

を除けバ文旨の農夫にも解りにくき句全くなし數葉の中に二疊音以上の字なきこと間々あり云かも言はんと思へることを隈なく言ひ盡したること他に越にたり(中署)十七世紀の末英國に騷客多しと雖も最も高上の想像に富めるものはミルトンとバンヤンとの二人のみ甲は『失樂園』を作り乙は『天堂遡源』を作る」と、コーレーの評當れり『天堂遡源』も共に人間の運命を語るものなり想像の力まことに高し唯異なる所はミルトンは希世の大學者バンヤンは殆ど無學の人なり而して其歸する所の一ッなる是不思議に似て不思議にあらず人間を知るは強ち學識に因らず偉なるものは覺悟の力なりトマス、ショウも又バンヤンを評していふ「バンヤンの寓意小說に王たるは猶シエークスピヤの院本に王たるがごとしエドマンド、スペンサルの寓意譚巧みなりといへども彼は事件の面白きをもて讀者を牽くこれは人間活動してそゝろに讀者をして同感せしむ」と佛人テーンもまたいふ「寓意譚にあらはるゝ人物は總じて死灰の如しバンヤンの人物は然らず皆活きて動く云云」と案ずるに寓意譚は作文の最も難きものか何となれバ寓意の淺々しくて皮相に浮いて目を遮るは五月蠅けれどさりとて餘り沈み過ぎて並人に解し難きは胴樂仕事さなくバ獨よがりの比なり殊に一時

一ケ所にとゞまる寓意は政治家の機關新聞の舞臺に屬す、つまらぬ一時の花なり喩へバスペンサルの『神女王』の如きは今他國人の心をもて讀めバねばむね唯の小說たるに近し理由を聽きし後に忝おきは寓意譚の本意にあるまじ云かるにバンヤンの作はそれと異なり數百年の後吾々が讀みても感ずる所深し其寫せる所人間おれバなり廣き意味にていふ人間と其運命とが見ゆれバなり世には自ら居ると高くて我作は高上なり故に俗人には喜バれずといふ人もあらめどそは自惚の隣なり上智下根に通じてもてはやされてこそ眞に大文人と云べけれ吾人の考へによれバ目に見ぬ鬼神とあるは無學文旨の徒又は殺風景の徒の替名なり唯數寄者、學者バかりを喜バすは古器物の寂が茶人を喜ばすと同じことなるべし近松の作が廣くもてはやされシエークスピヤの脚本が土間連の氣に入りしを思へ此等はトロロープ、ドライデンの一時にときめきしとは格別ありバンヤンの作も或意味に於ては近松シエークスピヤの亞流なれバこそ今に至るまで捌口はとまらでジョンソンにもクウパルにもスコットにもバイロンにもウォーヅオースにもソウセーにもほめられ譏譯せられて終に全天下に沿からんとす是一つは前にいふ耶蘇敎の庇に由るとはいへど唯それのみの

力とはいふ可らずまことに『天堂遡源』は耶蘇教の無害なる武器として尊きものあるに怪むべし此國の耶蘇教は日々に長ずれど此書の飜譯(漢譯はあれど)はいまだ生れず宗教家の中に詩想ある人の乏しきが爲か何ぞ然らん文學に宗旨に深切なる岩本善治氏あり何故に平易の文章をもて此書を飜することを力めざる

此書の筋書を添ふべしと思ひしが『天堂遡源』已にあれば要なしと思ひて省きつ

其の二

東『武藏あぶみ』　作者　淺井了意(?)

西『倫敦大疫病の記』　作者　ダコエル、デホー

『武藏鐙』は明歷三酉年正月の大火事の顚末を樂齋坊といふ同事件に關係ありし人の懺悔話のやうに取做して一伍一什をものしたるにて慘憺の情景目の前に視るが如しかだらかに書いたる記事文の上乘也『倫敦の大疫病の記』は其頃の景況を目擊せし商人の手づから記したるやうに書做して一千六百六十五年に起りし大惡疫の顚末を記したる也以上は其能く相似たる所なり扨其異なる所をいへば前者は想像の空談を加ふること重に話の首尾にありて本文は事實其儘なるが多く唯處々大げさに言ひ做せるのみ後者は稍や小說氣勝ちたり元來デホーの此作は一千七百二十一年佛國に疫病流行してありしといふ怖れ人々の心に遍かりし頃フト其事情に投せんとて故老に傳へ聞けたる事實を基とし所謂實から出たる虛話を並べたるなれば大體は總て實なるも細かきは多分想像なるべしさはあれ其文章眞摯平坦にして片言隻句だに虛僞らしき所無し學識大に進みたる近年までの統計家醫士のたぐひまでが此書を事實の考證となしきとか其文才の並々ならぬを知るべし然らば多辯するまでも無く假作物としての値は西の方勝なり了意は其下に居らざる可らず併しながら若し文章の可否よりいはば此相似たる二つの文輕々しく兄弟す可からず且又其飾らざる筆の力にいと能く細き景況を寫しいだし或は味ひなき數字町名等を羅列して些も讀者を倦ましめずなか〳〵に其頃の江戸倫敦を見るやうの思ひあらしむる技倆は蓋し何れが兄ならん例へばデホーが疫病の犧牲を精算して三万八千九十五人と書きしるし了意が火事に死せし者を十万二千百餘人と數へたる、或はデホーが病死者を埋むる爲に長さ四十尺幅十六尺深九尺乃至

二十尺の大穴をこゝかしこに穿ちたりしに彼等須臾にして塞がりぬと其埋葬の仔細の摸樣をいとも緻密に描きたる或は了意が淺草門なる火事の騷を記して來りて老若火焔を逃れんとて高さ十丈の石垣より堀へ飛入ると書き下し「せめて命の助かるかと斯やうにせし輩いまだ下まで落附かず石にて頭を打碎き腕を突折り半死半生になるもあり下へ落つくものは腰を打そんじて立あがることを得ざる所へ彌が上に飛重なり落重なり蹈殺され押殺されさしもに深き淺草の堀死人にて埋みけり其數二百三十餘人三町四方に重なりて堀はさながら平地よなる」と目に見たるやうにものしたる、何れを弟と定むべきや唯巧者といふ點よりいへバ西の男巧者なるべし何となれバ渠ハ文章家といふ外に彼の『ロビンソン漂流記』を書いたる寫實小說家の腕を具へて虛つく事が上手なれバ也渠は緻密よ叙狀しながら時々疑の地を殘して「右のやうには云るものゝ其實此件は目擊ならねバ必ず然りともいひがたし」又は「これも直接には見ざりしゆゑ唯噂のみを記す」などいふ態とらしくなき疑を加へてます〳〵虛を眞實の如く爲す東の男は然らず渠は『東海道名所記』に於て能文の譽れ高しと雖も必竟は眞地目の文章家なれバにや此『武藏あぶみ』も多くは事實の纂錄に似て機轉の虛は稀かと見ゆさりながら此點は强ち文の疵とはならず兎に角に吾人は疵とせず事實的記事文を學ばんとならバ此二者の書を取て相比べて後更に見よ二者は相似たるばかりかは、東西の稀物也

其の三

第三の兄弟には小品ながらに名高き戲作物と端物ながらに大手腕の作に成れる滑稽本とを比ぶべし

東『四十八癖』　作者　式亭三馬

西『若紳士かたぎ』　作者　ボッズ

東は誰も詳知なれば言はず西はギッケンスの稽古書ともいひつべしボッズは戲號なり『若旦那かたぎ』原名は『スケッチエス、ナブ、ゼ、ヤング、ゼントルメン』といふ、若者の氣質好尙のさま〴〵なるを例の筆にて叙狀せるものなり今譯して形氣といへバ其磧自笑の形氣物と對してこそ名義は能く適ふべきなれど其實は彼れに似たる所少く却りて三馬物に肖たる所多しそは自笑其磧は話を主として氣象性質の細きを客とし言はゞアル井ングのHales（テールス）に似たるに三馬は專ら性癖を主として脚色趣向を立てねばなり『若紳士かたぎ』もまた然り但し三馬の

『四十八癖』は大抵家を有てる年輩男を寫せるに『若紳士形氣』は其表題に見ゆる如くわはむね部屋住の若者なり都合十二章結論の章を加へて十三章とす其名目は差かしがる若紳士、ごろつきの若紳士、甚だ深切なる若紳士、武人めかす若紳士、政事家めかす若紳士、家内の若紳士、口惡の若紳士、芝居風の若紳士、詩人めかす若紳士、道戯がる若紳士、いかもの若紳士、婦人向の若紳士、是なり扨兄弟の位附をせんとするに圍扇は何れへもあげがたし今思ふに『四十八癖』に代ふるに『百馬鹿』をもッてせバなか〳〵に鈎り合ひよかるべし双方とも弱所を寫し出して讀者を笑はしむると同時に轉たおのが身を反省せしむ滑稽は客にして諷刺は主人也作意は五分五分にして此所勝負無しと雖も『百馬鹿』の輕妙には『若紳士かたぎ』に問答と獨語とをもて人物の性癖を見せギッケンスは大抵作者の筆を用ひて細く傍より樣子を叙述す前者は折々口穢なく『百馬鹿』にての如く頭下し馬鹿と罵り又時としては筆を舞はして態とらしく道戯て落話を作る是日本人の長所にして又其短所なるべし英の作者は然らず渠は飽までも諷刺を主とし好言たら〳〵の輕薄少年をも甚だ深切なる若紳士と題して例の如く叮嚀に叙述し偶々正面より非難する時も口穢からず激しからずさながら一面識の人に向ひて某には交際ひたまふなと忠告すらんやうの風情あり是先づ異なる所也式亭は輕くギッケンスは重く前者は獨語問答を肝腎とし後者は擧動風采を綿密に寫し力めて說破せぬを用心とすされば三馬の作を讀めバ上手の落語を聽くが如く面白くギッケンスの作を讀めバ通人の茶話を聽くが如く可笑し『浮世風呂』の作者は人のアラを穿ちつゝあるものゝ如し今更に押ひろめて概べて兩者を評判せんに一氣呵成は式亭の得意にして片言苟くもせざるはジッケンスの持前也三馬は畫工とすれバ鼻の曲みたるを描いて口元の愛らしきを寫さずボッズは斜睨の醜きと共に其後姿の麗しきを示す要するに前者は睥睨し後者は注視す此は殆ど世の中を見て泣かず彼は折々目をゑばたゝく二人相肖ざる所著しさはいへど又大に似たるものあり何ぞや二者共に人間の脾心に入らずギッケンスは全力を外面に用ひて敢て煩惱の由來を知らせず之を讀者の自覺するに任せ三馬も專念に習癖を穿ちて其出來りし源を示さず物足らぬ所あり吾人はじめ三馬を以て京傳より深しとせりき不知庵内田君駁して曰く非也京傳は三馬より深しと實

にや三馬は淺かるべき也或場合は京傳よりも淺かるべく素よりギッケンスよりは淺かりさりながら其奇才は作の大小と著眼の淺深とを以て大にギッケンスの下に置く可からず諷刺家（サテリスト）としては三馬は遙かに我國の參考舘物也

附（つけ）ていふボッズの端物の中別に『若夫婦形氣』といふ十三章の作ありこれも八文字屋物に似ずして三馬物に似たり又思ふに三馬はギッケンスよりも彼の著名なる『カルテン、レクチュールス』の作者英人ドウグラス、ゼロルドに比して殆ど浦次郎と瀬川采女との如くならん

其の四

第四の兄弟には英國に最も古き大寓意詩（アレゴリー）と此國に最も近き大稗史とを比べん已に其名の上に見ゆる如くこれは不當なる比較なり詩（殊に寓意詩）と稗史とは別物なれバなり然れども其名と形との異なれるに拘らず着想の相似たる斯ばかりなるは外に見ざれば假に空（ろら）言の酷しきものとす

東『南總里見八犬傳』　曲亭　馬琴　作

西『フヘアリー、クイーン』（神女王）　エトマンド、スペンサル　作

先づ皮相よりいはん、『八犬傳』は羅漢中の小說を種として我國の戰國武士を見せたる敘事詩風の小說也『神女王』はホーマル、アリオストーの敘事詩を摸範として中古騎士の勳功を見せたる寓意ある敘事詩なり『八犬傳』の著者は我稗史壇の泰斗『神女王』の作家は英國四大詩人の隨一、馬琴は孔孟の敎を元として仁義以下八行を人に擬へて八犬士を作りスペンサルはプラトー、アリストートルによりて十二の美德を定め之れを十二人の名士にしたてゝ希世の寓意譚の趣向をたつ何ぞ着想の相似たるや剩へ尙別に似たる事あり馬琴は『八犬傳』に敘して曰く「文武猶二花實一也未レ見二其花惡得一レ其實一耶故孔子曰有二文備一者必有二武備一若夫其勇有レ餘而一文不レ通則其行倏離譬如二沐猴之戴一レ冕（中略）由レ是思レ之三綱無レ道亂離世行似二猿梟一者雖レ有二記傳實錄一而不レ足レ見矣是吾所二以作一八犬傳一也（中略）於レ是乎善可二以勸一惡亦足レ懲云々」とスペンサルもまた曰く「此書の全體の目的ハ温雅德行に訓練せる高上なる人即ち君子の風を涵養するにあり（中略）殊に主人公アーサルは大度寬仁の德を代表せるものとしたり蓋し此德ハアリストートルによるも他の說によるも諸德の最も圓滿あるものにて他の百行を包含すれバなり云々」とされバ曲亭の旨とする所は文武兼備へたる人物を示すにありてスペンサルの望む所は士風の醇粹を寫すにあり敎誨の旨一揆なりといふべし馬琴は里見義實を作りて

八犬士の歸着すべき中央の本尊としスペンサルはアーサル公を作りて十二名士の上に居らしむ所謂大主人公なり偖別に神國の女皇グロリアナ(神女王)を作りてこれをアーサルに配すべきものとし且つ十二名士の主君とす馬琴が初に伏姫を作りて八犬士の由來を開きたるに似たり去りながら其の相似たるは皮相の空肖(そらに)のみ其内部の性質を見れバ『八犬傳』と『西遊記』と異なれるが如くに異あれりこは着想の似たるにも拘らで作の本質の同じからざるに因るあり案ずるに曲亭の『八犬傳』を綴るや胸中先づ八犬士の趣向ありて扨後に思ひつきて仁義以下八行に擬へし歟何とあれバ八德を人に擬するは甚しき寓意小說の沙汰なるに全体の工夫を見れバむしろ史の演義を語るものゝ如く寓意は淺近ある勸懲の爲におほはれ又時としては潤色の爲に藏れ間々仁義八行の說明は二の町となる事あり且や八行を人に擬するは因りてもて人間を說明すべき爲なるべきに馬琴の旨とする所そこにあらず八犬士の八行の靈たることは全篇の大趣向には强ち密接なる關係あるし所詮曲亭の八行を採りしは人物を作る爲の方便にして全篇の趣向にあらじ然るにスペンサルの『神女王』を編むや其工夫これと大に異あれり渠は先づ十二德を得て扨後に全篇を工夫せしあらん何とあれば人物已に寓意的なると共に全篇の趣向悉く寓意的なれバなり

此の說原稿未完なりき、今補續せん暇もあくはた完結すべき程の價値あるものにあらねバ未完のまゝ玆に揭げたり只一言もて二者の相違を掩はんスペンサルは出世間の詩人、馬琴は世間の作者なりこれ其の祖述する哲學の然らしめし所ありスペンサルはプラトーの唯心哲理を奉じ馬琴は孔孟の現實教を奉せりスペンサルの作は徹頭徹尾夢幻境の趣にして比喩周密精緻、着想幽妙飄逸、而して叙狀描寫の句々總じて作家の出世間的詩肺肝より出でたり馬琴の巧妙豐富にして虛飾の形容と借用的詞藻(セコンドハンドエピセット)とを縱橫自在にしたる叙狀描寫に似ず

ホワイト氏譯『天路歷程』の評

いぬる日『兄弟文學』の中にてバンヤンの『ピルグリムス、プログレス』と『西遊記』とを比べて前者の我國語に譯せられざるを憾みしが此の頃築地なる外國紳士ホワイト氏態々書を寄せてみづから譯せられたる『天路歷程』を示して吾人に披露せよといはれき誠に『天路歷程』の名は吾人嘗て聞ゐざるにはあらざりしがこれを

も漢譯とばかり思ひ誤りたりき今此書を見て先づ聖教の爲に賀しホワイト氏の勞を謝し併せて思ふ所を述ぶ

『天路歷程』はホワイト氏の譯とあれど其文を見れバ頗る小說を嗜める人の筆に似たり麗しく又流暢にて難所拵く女小供も解し得べし若し原書が並々の書ならば吾人は此を良き譯といふべし併しながら名著の譯としてはおかぬ所多けれバ茲に思ひつくまゝの評言を加ふこれは彼の神聖ある夢想者を推重する心厚きより出づるなり又彼の教を重ずる心より出づ譯者幸ひに辯を好むとあ思ひたまひそ吾人思へらくバンヤンの作の他の千万の作に優る所以は其信心全篇に溢れ一字一句虛飾浮華あらぬ所にあり平淡の中に無量の誠の籠れるにありと吾人彼教に昏しと雖も未だ『ピルグリムス、プログレス』を誦する毎に聖書の俗解を讀聞かされたらん如く思はずバあらず絶にて虛榮市の文學書類に似ざれバあり然るに今『天路歷程』を見るに行文をさ〳〵馬琴を學びて所々浮靡に近く俗間に行はれたる凡小說を讀む心地す原文の簡なるを引延したるは彼と我と文格異なれバ止むを得ずとするも虛飾を加へて原意の質撲を損ねたるは口惜し試に二三をいはゞ「斯るべしとは白糸の結ぼれ解けぬ妻や子は」とあるは陳りたる淨瑠理の文句也それバかりあらばよけれど調のいと浮きたる嫌ふべし況して結ぼれ解けぬとのみにては憂に沈めるの意通せざるをや又「返す言葉も泣顏を峰に刺さるゝ心地して」とある是バンヤンの用ふべき文句歟其他「善哉柳太ぬし」といふ句のふさはしからぬ「ものから」何々しつゝといふ筆癖の曲亭を學びて文法にたがひたる皆取除きたき疵也爰に如何ばかり原書と譯文と趣同じからぬかを見る爲に誰も知れる「疑念城」の一節を抜きて示すべし譯文にいふ

去程よ此所を去る遠からざる地よ疑念城と云へる城廓あり此の城主は絶望爺にて容兒魁偉の剛の者なるが今朝しも早起して郊外を遊歩なすに大地よ二人の眠れるを見る是れ別人ならず從道望道ふり絶望見るよを聲荒く呼覺し汝等何者なれバ何處より來りて我領内よ潜み入るといふも怖ゝき荒男子の如何なる業をも爲し兼ぬほ素振よろれと知られよを二人は大いよ驚きて起直り吾々ほ道よ迷ひし旅の者怪しき業を爲すものならずと只管詫るを耳にも懸けず默れ奴輩汝等夜中斷りもなく我領内よ潜み入り我地を踏み我地よ横ばるぞ奇怪なるいざ追立てゝ連返らんといふよそ二人ほ之よ敵ゝがたく身の過よ出でしかとなれバ言葉なくゝゝ追立られて云々

これを及ぶべき丈け直譯にすれば左の如し

爰よ渠等が臥ーさてー處より遠からぬあさりよ疑念城といへる城ありけて其主は巨人自棄といふ渠等が今眠りさりしは件の巨人の領地なりきされバ彼の男朝早く起いでゝ田野をあちこち遑遽きせるうちフト領内に熟睡せー信者と望多とを見いさしぬ驚て怖ろしき聲よて起きよと呼び何處よて來て爰よ何せるぞと問ふ二人は回國者なてと告げ道に迷ひきと語りぬ其時巨人いふ汝等今夜我地面を蹂躙て我地面に横臥りて我權利を侵害せり此の故よ我と共よ來らざるべからずと二人は隨ひ往がざるを得ざてきうは彼の彼等よても力強ければなり彼等はまさ殆ど言ひいでん言葉なかりき已が過を知ればなてけり

右は斯くの如く譯せよとて譯したるにはあらず原文の質撲平坦なるを見せんとて也又「天城」の有樣を叙狀せる條下を見るに譯文は左の如し

從道望道も爰よ及んで詮すべなく死ぬも生るも命なりと覺悟を極め身を躍せて汎と水中へ飛込てより斯くて從道は次第ゝよ深淵へ沈み覺束なくぞ見えけるが大よ叫びてあなや主の大浪吾を卷く早や溺れんといへば望道は心安かれ從道ぬし吾いま水底よ足の觸れさてと氣を勵せど從道は否とよ死の苦み今吾身よ迫れり吾まさ乳と蜜の流るゝ陸地「天國」を見るさとなけんと云々

直譯は左の如し

さて彼等は身づくろひして水の中に入る程よ信者は次第よ沈みぬ聽て其頁友望多をよびひつゝいふ我は深淵へ沈む大浪我頭上を超ゆ波みな我をおやふ[シラ]やと其時他はいふ安せよ我兄我河底よ觸る氣づかひなしと其時信者はいふ嗚呼我友よ死の悲み我身に逼てぬ我は乳と蜜との流るゝ國を見ざるべしと

原文は經文を讀むが如く平々淡々たり要するに『天路歷程』は intelligibility の點に於ては能く mission を盡したれど未だ文壇の物にあらず大に弘法せんとせば更に洗禮を要すべきが如し夫れ已に聖教を奉じたる人は『ピルグリムス、プログレス』を讀んで後に聖教の尊きを知らざるべし願くは聖教を信せざる者をして此書を擧て天城に詣らしめん然せんには此書月桂冠を戴いて扨後に文壇に降らざるべからず

明治二十三年上半期文學界の風潮

ことしの春の例にあらひて七月までの風潮を批判せんとてふりかへり見るに目ざましき事の多からぬぞ本意なき去年は文運の淀みなく進みし時なり尠くとも小說界にては糊口の爲にものするもの減じて名の爲にものするもの增し杜撰粗漏の文章藏れて琢磨せる文章あらはれ加ふるに元錄文學の新空氣文界を爽かにし森鷗外、落合直文、井上通泰、內田不知庵、幸田露伴、末兼湖處子等の輩出

して文壇を風靡せし時あり去年の暮に身まかりし文學狂はいかに今一年を死にとむながりけん末の進歩の兆いちじるしかりし故なり然るに年明けて後は初春の莟のきをひ目さむる計りなりしに似ず花早く失せて秋風立たぬうちに四方山の若葉の病葉のやうに凋みゆきたる此魂祭に彼魂あくがれ來しならバ神ぞ〔紅葉君より借用〕呆れて開いたる口をえ閉がざりしあらん

かくあれるを世人は政事といふ外道の所爲なりといへれどいかゞあらんいで

や上皮のみを見れバこそ今年は大小説、大詩篇、大著述、大覺悟、大觀念の世とも見えしがそは楷子の新しく高樓にかけられたるを見て一躍りせバ登り果つべきものと思ひはやりたる類なり登るは楷子を一つ〳〵踏むありと知らバ今年の一休は楷子を製り終へて登り試みる前に識人の腰まさぐりて青葉蔭に先づ一服する時なるべし下手の考は休むに似たれど上手の休むは考ふるにおあじシエークスピヤの昔を聞くに彼れの腕節は彼の『ソンネット』を綴りし時已に大かた成りぬとおぼし是廿八九才の頃あり乎それより『ハムレット』出でしまでは十餘年經たりきとすれバ廿八九より四十までは彼れが修行の時なりき學者の說に彼の胸に『ハムレット』の趣向浮びしはたしかに三十幾才の時にて其成りしよ

り遡くとも五六年以前ありし證據ありと、案ずるに『ハムレット』はシエークスピヤの卒業論文か『ハムレット』の後には『ハムレット』幾篇もありと見ゆれど其前に無きを思へバ其徐に腕を養ひしこと知るべし此春もいひしが去年は製作の時代にて譬へバ素を作る時なりしかバ假に彼の詩仙の成立にくらべバ廿八九才の頃に當るべし詩仙の天稟なるだに修行に十年を費やしきとせバ此一二年の中に大觀念の傑れたる作を見んこと難かるべきは勿論ならずや今年は明治文學子がはじめて修業門に入りし時なりと

そも修業といはゞ精進して怠るまじきなりシエークスピヤは情に溺れて世間を知らざるロメオの哀しきを寫せしより知に溺れて人間を知らざるハムレットの惱れなるをものせしまで其間幾星霜を經たれど彼れ一年も休まざりき其證は彼の專ら時代物をものせしは此間ありと聞ゆれバあり然るに明治文學子の修業はこれと異なりて此大切なる時代に隱れて修行せぬやうに見ゆる人の次弟に增しいよ〳〵多からんとせるはいと訝し人は之を見て文學さびれたりといひあへり併しながら浮屠は山籠りして修行すといへれバこれもさる類なるべくや兎に角に物書く人の藏れたれバとて文學の衰へたるにはあらじ元よ

り出版と著述の多寡とを標準にしていへば文壇の寂れたること爭ふべからず
と雖も目を瞑ぎて深く氣運を卜へば去年の文運の前へ進みしと同じく今年も
前へ進めること明かなり先づ文學の內界に於て進み次に其外界に於て進めり
適ひたるをいふ
文章の事は別にいはんと思へバ省き爰には內界の進めるとを辯ずべし去年の
暮までは其道の人の外は著作を評するに大かたは文章の妍醜をもて上下し又
は漠然と人情を寫したり否寫さずおどのゝじるのみにて評の作者の觀念に及
べるを聞かざりき聞かざりしにはあらねど爰にいふ意味のものにあらざりし
なり今は趨勢大に改まり普通の讀者だに稍や眼あるは文章とはいはで着眼と
いふこれいちじるき進歩なり素より如何なるを善き着想といふかは其人々の
心々にて同じからず或は勸懲主義が味方を得たりと誤りて闐聲を擧げたるも
あるべく或は文章のうるはしきに慊らぬ心より非を此點に求めたるもあるべ
しそれは何れにもせよ目の稍や形無きものも向へること實あり『江湖』『朝野』等
の新聞紙並に『女學雜誌』等が人情小說を織巧と罵り規摸の大あるを作れといひ

今の作者は痴情のみを愛とするか何ぞ愛國の愛、愛民の愛をかゝぬなど叱りた
る若しくは龍溪居士が今の小說の偏れるを歎きて『浮城物語』を著したるなど其
いふ所の當否は暫く措き總て着想を論せしものなること明けし其他批評專門
の人々の聲もます〳〵此方角に向つて高くおりぬ鴎外漁史が『ゑがらみ草紙』にて
此春のはじめ去年の『詩眼』を評したるが如きは恰も時に適ひたる(漁史の繪畫論
の中より借る)ものにて先づ本街道を開きしものあり或は忍月居士が罪過論を
反覆して作者を警め或は不知庵主人が觀念論を叮嚀にして末技者流を提醒し
たるなど元より今年にはじまれるならねどさすがに一層を加へたるに似たり
されバ露伴子の作を評して觀念高しといひ湖處子の作を批して思念純潔なり
などいふ聲の普通の讀者の間にも間々聞ゆるに至りしこと一つは批評家諸氏
の反響を傳へたるに過ぎざるべしと雖も斯かる反響の成立つに至りしは抑々
また時の進みたるに因るなり乞ふ讀者と共に批評家の勞を謝し明治文學の前
途を祝せん
夫の政事の爲に文學衰へたりといふが如きは形を見て魂を見ず今の文學界の
內證を知らざるもの〻言なり客氣の新作者出ざるは實にや政事の影響ならん

戯れに小説をものすることの廢れたるこれも同じ源ならん又主大小説主義の霹靂は多少卵中の言文一致をおのづからかしめて殺し國文學の疾風は多少巣籠の俗文を吹拂ひしとあるべし併しながら斯くの如き作者はたとひ生るゝとも巣立たず巣立つとも高くとびじよし暫くは羽搏つとも明治文學の雲に冲るは所詮燕雀の少さき翼には頼るまじければ其の退縮を見て文學退縮みせりと思はんは彼のサムソンの隕髪をきざみて彼れの怪力を失はしめたりと思はんにひとし、まこと政事の文學界に及ぼしたる影響を知らんとならば已に家を成し門を成せる作者に就て其痕跡を尋ぬるを當然とす人は謂ふ今年は物かゝぬ作者の多くなりたると共になべての作者も怠りがちなりと前は事實あれど後は誣なり後の誣を辨ずる前に先づ前の事實に就いて彼等作者が政事のさはがしき爲めに筆を収めし跡あるか政事の紛雑なかりしあらば彼等は引つゞきて著述すべかりしかを否か見るべし

本年にありて殆ど半隠れ去年の目ざましきに似ずと見ゆるは竹のや主人南翠外史並に美妙齋主人の三人あり彼等皆前年に於ては八方に馳騁せる將星なりしなり言文一致の盛にしは美妙齋の力あり篁村宗の譽は竹のやの文章より揚

り想像豊富の評は外史の作出づる毎に嘖々たりき元より今とても將星の名は依然たりといへど光はやうやく目ざましからず蝕せられたるよりはむしろ自ら韜まんとするもの〻如し今年となりて竹のや主人の作は『朝日新聞』に見にたる『小町娘』と時々の劇評旅日記の外には『勝閧』の一篇あるのみまだ其他にも端物はありしかとおぼゆれど爰には廣く知られぬはさし措く又美妙齋主人を見るに『醉沈香』を去年の作として除けば『都の花』に出たるは『いちご姫』の後段を圓せるもの〻みあり後『改進新聞』に助力して『文壇叢話』と『人よし男』との作ありしが其他は取出で〻いふべき程のものにあらず殊にいちじるきは南翠外史の退隠なり『有喜世新聞』の昔より『開花』『改進』と三代を經て雄麗自在の健筆をふるひ數年の間殆ど二月とは休まざりし作者が今年となりては『殘燈』の作一ッのみにて『破魔弓』は去年の作として除く)久しく黒幕の中に藏れ(よし黒幕の中にて臺張の丹精ありしにもせよ)此ごろ又浮世にいで〻『新世帯』を結ぶこととなりしまでに他の作無かりしは怪むべし二竪に腦まされたりとて斯くて休む人にあらざるをや或はいふ外史病中匿名にて淨瑠理体の小説を『改進新聞』に出だしきと予もこれを知れるあり只何故に外史があらぬ名を掲げしか、又いふ竹のや

は專ら近松の著書を調べて其傳と論とをものせんとし美妙齋は思想を練りて之を韻語にあらはさんとすと是また實事なるべし只何故に元の如く隨感隨抑の筆を用ひざるに至りしか眼ある者は其理を察るに苦まざるべきをこれをも政事の影響といふべしや

人皆其然らざるを知るべし政事上の紛雜なきも彼等は暫く引籠りて工夫すべき時に臨みしより其他二葉亭の二葉のまゝなる、嵯峨のやの時頼と共に世を厭ひたる、春のやの返咲きして又忽ち凋みたる、これを政事の影響とすべしや爰にいはずとても前年よりの消息を知れる人々は知るべからん以上六人を除くの外は別に異なれる狀を見ず蝸牛の角は故の如く蠻觸の大なるを載せ梅花の匂ひは新に文園の風情を添ふ學海の波は舊に依りて洋々思軒の月はむかしながらに射し入れり況してや綠雨の爽かにそゝぎ紅葉のます〳〵錦を懸け岩底の清水潺湲として清く萩のやの露玲瓏として珠を散らし湖處俗に遠く小金井塵を見ず加ふるに鷗鷺の盟暖かにして去ばらくも文海を去ることなく長閑に中流に來往して細かに漁翁の意を認むるあるをや若し此間に立ちて不知庵の夕勤の鈴の音に觀念を凝し忍ぶが岡の月の影を罪、過、無うして詠めんには誰か文學

を衰へたりといはんや見よ『新小說』は休めりといへども『報知新聞』新に我黨に同盟して龍溪居士の閑雅の筆爰にまた光彩を放つ『都の花』の艶あせたりといふと勿れ『江戸紫』の色やうやく方に濃か也徒らに『江湖』の流星を惜むこと勿れ『國民』の明星なほ輝げり我社不敏なりと雖もまた常に時に先んじ文運を導かんと力めて休まず百年一日の如し見ずや文學のチヤムピオン雲の如し文學さびれんや寂れたりといはんや

小說三派

總評

『新作十二番』とは春陽堂より發兌せる美本の讀切物にていづれも名家苦心の小說也第一番は竹のや主人の『勝閧』第二番は紅葉山人の『此ぬし』第三番は美妙齋主人の『敎師三昧』第四番即ち最近は發行の三昧道人の『桂姫』なりいづれあやめ草ひきもわづらはれておの〳〵おろかあるは無けれど氏も育も流石に殊あるこそおかしけれ先づ『勝閧』と『桂姫』とは色も香も大同にて小異也然るに此の二つと『此ぬし』とを比ぶれば心も形も大異にて小同ありさて又『此ぬし』と『敎

師三昧』とを比ぶれバ色も香も大同にて小異也然るに『教師三昧』と前にいへる二つとは心も形も大異にて小同なり具にいへバ『勝閧』と『桂姫』とは着想も文章も専ら在來の粋を採れるに『此ぬし』と『教師三昧』とは新文脈をまじへ用ひて着想も頗る外國ぶりなり詳きことは次々にいはん爰には便宜のため假に『勝閧』と『桂姫』とをもて同類の固有派と名づけ『此ぬし』と『教師三昧』とを一味の折衷派と稱す

所謂固有派とは物語を作るに事を主として人を客とし事柄を先にして人物を後にする者也人間の浮沈榮枯流離轉變を語るを主として傍ら種々の人物を點綴し正邪順逆の跡を紙上に躍然たらしむるもの也此派の物語いはじめより事變を主とすれバ奇異の事をもさしはさむ且又必ずしも主人公を設けずたま〳〵主人公を設くるも事話の脈絡を繫がん爲也蓋し大かたの事變は主人公の性行より來たるとせで偶然に外より來たるとする故に必ずしも主人公を要せぬなり夫の固有派の巨擘曲亭の作を見るに惡人は暫く措き忠良の人の上に起れる禍は大抵天の爲せる災にしてみづから招けるはいと稀なり其他京傳種彦の作も轉變流離の誘因を偶然に歸したるが多し例へば里見伏姫の不幸

も自意識を標準としていへバ自ら致せるにはあらで全く其意識の外より來れり又芳流閣の災難も信乃が心の罪にはあらで圖らず外部より來れるなり即ち事と人の心との間に(災厄と性行との間に)必ずしも密接ある關係無し事を主として人を客とし事を先にして人を後にしたれバなり所詮此派の作者は俗にいへる三世因果の說を理法とし若くは天命の說を理法とするあり就中曲亭の作はをさ〳〵三世因果の說によれり『八丈綺談』『春蝶奇緣』『累解脫』等を見ても去けしそれだにおしなべて小乘の心なりまして其末流に及びては此の理やうやうおぼろげなれバ人心と事變との緣ます〳〵遠くなり動もすれバ宿命(フヘタリズム)說の趣に似たるものあり草双紙なぞに見にたる忠臣孝子の災厄は間々宿命(フート)の所爲とも見にて理無し有爲轉變諸行常無しと解せば解すべし去からざれば卷を措きて天道の是非を疑はざるを得ず在來の作者が筆を曲げても毎に圓圓をめでたくせしは一つには此不審を釋かんが爲なりしならん恐らくはおのが心にも安せざる所ありけれバあるべし到底近年の固有派は天命の說を作者みづからは意識せずもあれ奉じたりと見て可なり榮枯禍福を必ずしも人に歸せざれバなり此派は外國にも多かりき中古の物語類はいふも更なりスモーレット、フヒー

ルヂングの徒頗るよく性情を寫せれど其實は事を先とせたる也スコット、ヂッケンスも亦間々然り只後者の旨とせたる所は事のみにあらで人にも在り事を先にすれど事を主とせざる所異あれり此差別は次の折衷派とは、人を主として事を客とし事を先にして人を後にする者也前の固有折衷派と半は似たれど半は異なり人を主とするとは人の性情を活寫するを主とする謂にて事を先にするは事に縁りて人の性情を寫さんとすれば也性情は形無きものあれば有形の事變に縁らざれば寫しがたき故也具にいへば或る特別の人物を作りて其人の榮枯轉變に於ける心の有樣を寫すあり前の固有派にては事主にして人物客たれば人はれのづから事の附物とありて客觀あり換へていへば人物の此派にては人を主とするが故に人物おのづから主觀あり玄かるに哀歡悲喜を外よりのみは見で内よりも見るあり英雄の心緒紊れて絲の如しと客觀的に叙し去らで時としては其の亂れたる樣を寫すこともあり但し人物と事變との間に主客先後の關係こそはあれ未だ因果の關係あれば人物必ずしも主觀とはあらず蓋し此派の本意は或特別ある事變に於ける或特別ある性情の狀態を寫すにあれば未だ必ずしも事變をもて其人に由來するとせざるあり是

別に人を因として事を縁とする派のある所以あり

（其　二）

新作十二番を評するに斯かる管々しき辯何の要かあるといふかる人もあらんが評者は此辯の止みがたきを知る也今の批評家中には間々第二派の眼をもて第一派を評し第一派を評し徹頭徹尾取る所無しと抹殺する者ありかゝるはホーマル、ヴルジルズの眼をもてしミルトン、ダンテを評するにシェークスピヤの眼をもてするものに似て少しく理にたがへりげにや叙事詩もドラマも其詩たるや一つなり梅も櫻も其花たるや一つなり然れども花にの王あるべく梅或は花の兄ならんさりとて梅を評する人をば色をも香をもよく知るものといふべきか嗚呼の風流雄汝櫻の外に花なしと信せば何ぞ先づ櫻の梅にまさるを說き兼ては梅を枯らすべき方を講ぜざる古たる梅園に就きて其花の櫻あらざるを笑ふ風流雄の名にも似ではしたなきかな

西詩に三派あり抒情詩と叙事詩とドラマとあり其中ドラマをもていと高しと

すれや抒情詩も叙事詩もまためでたし案ずるに小説にもそれに似たる派ある
べし前にいへる固有派は更に名づけて主事派若くは物語派ともいふべく其次
の折衷派は又の名を性情派若くは人情派とも稱すべしさて別に第三派を置き
て之を人間派と呼ぶべし即ち人を因として事を緣とする派あり第一派(即ち物
語派)は最廣き意義にていふドラマの結構なり而して第二派(即ち人情派)は其事を先とすること甚だ
しければ叙事詩となり其人を主とすること重ければドラマの形とならん常は
兩派の界に立てりさて物語派と人情派との中間派との別は明かにて物語派と人情派との
相違も已にいへりひとり人情派と人間派との別はなほぼろげなれば今少し
く次にいはん

人間派とは其結構をいへば人の性情を因として事變を緣とするものなり其事
變を緣とするは前に人情派(折衷派)に就きていへるに同じく有形の事變に緣らざれば人の性を發揮する能はざれりさて其異ある所をいへば人情派は或事情に於ける或性情の狀態を寫せば足れりとし若くは或事變の或性情に於ける影響を寫せば足れりとす故に性情と事變との間に(人と事との間に)主客先後の關係はあれど(アンテシデント・コンシクエント前項後項の關係はあれ
ど)必ずしも因果の關係無し即ち人を物語の主題とはすれども未だ人をもて事の主因とはせぬなりされば事の起りて後にこそ人の心は動け人の心まづ動きて後に事の生ずるにはあらず此理玆に盡しがたし下に『此ぬし』と『敎師三味』とを評するを見て察せよ我所謂人間派は然らず先づ人を因とし事を緣として一果を寫し此果を若くは他の事變をも合せて)緣として更にまた一果を書き終に大詰の大破裂若くは大圓滿に至りて休む偶然の事變を使ふことは物語派と同じけれども其事と主人公との間に因緣の關係の離れぬ所たがへり是もとより眼目の差をいへるのみ小同は三派相通ずるべし管々しくは例をもて證せざるもシエークスピヤを讀みたる人は評者の言の大に誤らざるを知らんマッベスの逆心まづ崩して弑逆の事起り弑逆の事緣となりて彼が罪惡ます〳〵增長せしを想へ又ハムレットの懷疑固より存して腸九回的煩悶とおりオセロの妬疑一たび崩して血淚千行的慘劇を釀せしを想へ客觀的哀歡は概して主觀的性情より生れたりしを想へ則ち人心と事變との間に先後の關係ありて又更に因果の關係あるを見るべしされバ傑作のドラマを讀めバ吾人恍として因果の理

を見、且雜然紛然たる人寰に一定の理法流行することを瞑悟す而して其理法たるや幽明にまたがり有爲無爲に渉り虛靈より出でゝ實相に現はれ實相寂滅してまた虛靈に歸す例へバ『シーザル』のドラマに就きてブルータスを見よ彼れ思量足らでシーザルを殺し亂を釀し身を殺す羅馬の內亂といふ實相はブルータスが遠慮の周からで編に靈界にのみ彷徨せし結果とも見るべしさすれバブルータスの敗たるはみづから致せるなり自業自得なり天を咎めんや人を怨みんや主觀的ブルータスが客觀的ブルータスを造りいだせしなりブルータスの失墜は身招自致なり然らば吾人のブルータスに對する感想は只一の惻憾慈悲の心あるのみかといはんに然らず吾人は客觀的ブルータスを貶すと同時に主觀的ブルータスを貶すこと能はざる由あり彼れの義と勇とは吾人遂に貶すこと能はざれバなり彼れ現界に於て敗れたれど隱然靈界に於て凱歌を歌へるを聽けバなり吾人が到底ブルータスの義を美とせざるを得ざるとを想へ則ち此明界の背後に更に又一の幽界ありて人間の妍醜を定むるとを見るべし是前に虛より出でゝ實に現はれ實滅してまた虛に歸すといへる所以なり而して此理法は吾人がドラマにて暗に觀る所にてまた人間に於て暗に見る所なり蓋し浮屠氏の謂ふ三世因果の理も其底を叩かバ此理に外ならざるべし將た哲學の究めんと欲して未だ明釋する能はざる所も或は此理に外ならざるべし現在の人智は只暝々裡に此ことわりを知れるのみ未だ明かに釋することを能はず

（其　三）

上の如く解すれバ「人間派」は人と事と相因緣せるを寫すをもて足れりとせで更に虛實幽明の相纏綿して離れざる趣を寫すものなり即ち人間の經緯を取りて因果を織做せるものといふべしされバ人間派の寫す所は其形は小なれど其心は大なり其相は一なれども其實は万なり其表は特殊にして其裏は普通、其色は偏にして其理は圓なり夫の人情派の其形も其心も其相も其實も其表も其裏も其色も其理も大かた特殊なるとは同じからず又夫の物語派の偏に普通なるとも異なれり案ずるに物語派は俗に謂ふ因果說を體し若くは天命の說を奉じて普在せる事相を寫すものから其相の由來をば明にせざるが上に本來人物を主因とせざれバ甲人に於ける天命も乙人に於ける天命も汎然漠然として一なるが如く平等の理はあれど差別の實なし死したる觀念はあれど活きたる觀念はなくゼネラリチーはあれどインヂビヂュアリチは無し此故に或は讀者をして

世に因果あるとをゞ知らしむべきが因果の關係をば知らする能はじ或は讀者をして人間に理法あることを知らしめんが其理法の人に因緣せる由をゞ知らしむる能はじ先天的にものして後天的にものせざれゞなり演繹的に筋を立てゝ歸納的に筋を立てざれゞなり

茲に件の三派を物に喩へていはん先づ人情派は五感の如く人間派は魂の如し又之を畫に配せば物語派は文人畫の梅の如く人情派は根幹枝花殘りなく畫ける油畫にも似たらん文人畫の梅粗あれども梅の全体を見るべく密畫の梅花細なれども一班に過ぎずひとり油畫の梅は其全体を見ると同時に枝、葉、根、幹、花の相關係せる所以を見るべし又之を學問に配せば物語派は常識（コモンセンス）の如く人情派は諸科の理學（天文、地質、植物、動物）の如く人間派は哲學の親あるゆゑに人間派は毎に人情派にくらべて深く哲學は廣くして深し

併しながら此等の比喩は其質を評せるのみ必しも三派の優劣をいへるにあらず然るを若し比喩を進めて哲學は科學の親あるゆゑに人間派は毎に人情派に優れり常識は科學の材たるに過ぎねば物語派は最も下なりといはゞ是恐らく非事（あやまり）あらん猶風韻ある日本畫の粗なるを見て密なる油畫に劣れりといはんが如く一向に形に泥める沙汰なり哲學の名は尊しといへども其の說まことに高からずばまことに深き科學に及ばざること遠し、ダーサン、バックスレーの學說をもて謬妄ある獨斷哲理に劣れりといふは狂愚ありさて又物語派を常識に比したるも只其形の上をいへるのみ其表に現はるゝ所のいと廣くして淺きをいへるのみ、寸鐵よく人を殺す、俚諺に見たる常識の大獨斷敎に優ることあるを思へゞ普通の常識ばかり眞理に近きものはあらざるべし常識豈卑しかるべきされど世の物語派即ち事を主として物語を作る人々の中には間々事を重んずるの餘りいつしか事の奴となりて我また人物を奴とし奇しき事を語らんとて有るまじき人物を作る事ありかゝるは常識界を離れて詭辯界に入り若くは妄言界に蹈込めるものともいふべし文化文政の名家に此失多し

また案ずるに我國の純文學の幕の内ともいふべき小說並に淨瑠璃の多數も大かたは物語派也即ち事を主として人物を客とせり演劇の臺帳すら諸派の雜種にて中には純然たる物語派あるも多し今の批評家往々我狂言作者を責めて彼等學淺くして識足らず何ぞ共にドラマを語るに足るべきと叱すれど是思ふに

的を誤りたる沙汰ならんたとひ彼等狂言作者をして大ある學と高き識とをもたしむるも今の批評家が望める如き西洋風のドラマをバ爭で得作らん何とあれバ彼の主とする所と此の主とする所と全く違へバなり批評家はドラマを得んと欲し作者は叙事詩を作らんとす作者批評家に迫られて進退維れ谷まり鋭意奮發して『一口劍』の主人公のやうにありて千錬々々万鍛々々吁將莫邪を作り得たりとするもまた益なし批評家倭の所望は日本刀にあらず正宗にあらず支那劍にもあらず莫邪にもあらずダマスカスの短劍なるをいかにせん倭の注文理あくもあるかな試に想へ今の文壇誰か學海居士を推して博學卓識の文人とせざらん而も居士の作の曾て批評家の旨に稱はざるに非ずや又見よ竹のや主人の近作『大田道灌』の脚本を誰か彼の作を評して學足らず識足らずといはんやよし絶對に高しとは云ひがたきも相對には高かるべし而も此作を批評家に示さバ彼れ果して何といふやらん吾人は正に美といはざるべきを豫言す是併しあがら兩家の技倆の拙きがゆゑに然るにはあらで作者と評者との間に旨の異なること甚しけれバならん作者は水を望み評者は山を望み作者は東に向ひ評者は西に向ふ漸く進みて漸く離れ漸く巧にして漸く拙あるが如くに見ゆるなり嗚呼西方果して彌陀の淨土か上人何とて其然る所以を說敎せざる

（其　四）

臺帳の事はさしおく小説に就きていはんに西洋にてもドラマの趣旨のをさを小説に用ひられしは實に近きころの例なり前にもいへる如くスコットは物語派と人情派との間にまたがりし作者にてギッケンスの如きもまた然りさてまたサカレーとても重に人情派の作者と見てよかるべし『ペンデニス』『ヘンリ、エスモンド』などを見『ヴニチ、フェア』などを見るにも人の主題となれる跡は明かあれど人の主因となれる證はおぼろげなりジョージ、エリオットの諸作は評者の詳しからぬ所なれど嘗て見つる「ミッドル、マーチ」によりて判ずれバ頗るドラマの旨意に稱へり思ふに英國に於けるドラマ的小説家は彼女史ひとりに止めたるにやあらん知らず女史の外にも尚あるにや夫の近世の魯獨にこそドラマ的小説家も多しとは聞たれそれもいと近き程の事あり又佛蘭西なる諸作家バルザック、ユーゴ、ヴラ、ドーデーの徒は或は我所謂人情派の界を越にて人間派に入れりともいふべからんがこれとてもまた近世の作家あり詮ずる所ドラマ主義の小説界に入りしは十九世紀に於ける特相といふも誣言にあらじ尚いと稚

き現象あり ウベルネ、ハッガードの徒はいふも更なりホルムズ、ブレットハート、ベザントの如きものも我批評家の評言を聽かバ恐らく憫然と自失すべし批評家の說の非あるにはあらねど其說の新しけれバあり然るに何事ぞ今の批評家所謂人情派の小說だにいと〳〵稀にある我小說壇に向ひて唐突にドラマ（ギヨオテの『フハウスト』、シエークスピヤの臺帳）を標準として物語派の作を批判し叱咤一聲して是小說にあらずと喝破す嗚呼是文壇の救濟主の聲か物語派の名家みづから信ずるに厚く且頑にて絶にて改進せんの心なくバ事も無けれど改進せんの心あらば彼等そも何の方角に向ひて進むべきぞ何故にドラマ主義を奉ずべきか茫々然として知るに由なく百花爛熳紅雲蒸すが如き中に立ちて梅まづ畏れて散り桃また次ぎて散り李も散り杏も散り梨の花も散らんとせん此時に當り幸ひに櫻の咲くあらばよし唯四五の櫻の書と只二三の櫻の枯枝とが空しく文園に横たはらバ花を散せし咎は何れの嵐の罪とせん吾人は今の批評家の花に慈ならざるを怪しむ

斯く長々しく辯じたる、頗る辯を好むに似たれど吾人は唯標準を別にして諸家を評せんと思へバこそ止むを得で此斷をいひつるなれかゝる差別の我文壇に

現在せるを信ずれバなり西洋の差別を適用せるにては無し詩を評するに抒情、敘事、ドラマの三質を別つ如く小說にも或別を立つるとの甚だ用あるを感ずればありたとへばドラマとしては上乘あらざるも敘事詩としては上乘なることのあるが如く敘事詩としては傑作あらざるも抒情歌として傑作あることのあるが如く人間派人情派の作としては甚だ妙あらずと見ゆる作も之を物語派の作とすれバ甚だ妙あることのあるべければあり此別を非ありとする人あらん乎其人は事物の平等を見て差別を見ざる人あり世に絶對あるを知らざる人あり一あるを知りて万億あるを知らざる人あり宇宙あるを知りて國家あるを知らざる人あり國家あるを知りて我あるを知らざるは死せるあり死灰あり

此故に評者は『勝閧』と『桂姫』とをもて物語派の作とし『此ぬし』と『教師三昧』とを人情派の作とし下に其然る所以を辯せん敢て此四者の優劣を判せんとにはあらず其質の相異あれる所以を分析せんとす是もまた評判の一種あるべし但しかの三派の別は素より評者のほしいまゝにせる差別あり幸ひに十中一の正しきを得バ好辯の譏をまぬがるゝに庶幾からん

『勝閨』と『桂姫』と（其一）

『勝閨』と『桂姫』とは其結構をいへば共に事を主として人を客としたる小説也又共に文章をもて勝るものなり故にまづ文より始めん『勝閨』の文章はをさ〳〵平安堂と柳亭とより脱化したるものとおぼしく優美なれど艶かず軽妙あるが中におとおしやかある所あり穏當ある雅俗折衷文あり夫の曲亭の文に比べて五綺麗の嫌ひあく夫の浄瑠璃の文に比べて閑雅優美ある所一入優れり情迫りても文態とらしくは急ならず事卑しきに渉りても姿流石に風流たり蓋し柳亭の粋を抜きて更に加へたる所ありとおぼし物語的折衷文の上乗ありといふとも過言にあらじさて『桂姫』の文章を見るにこれはむねと院本を体として近松の眤を奪へりとおぼしく風姿洒々として淡きが中にまたおのづから婀娜たる所あり雅俗折衷の鹽梅前の『勝閨』の文と相あらびて兄弟たりがたくほと〳〵至極に近きたりと評すべし殊に『桂姫』の文は大胆ある雅俗言の折衷也さながらの俗語より一轉して忽然と雅文に入る所水晶盤の上を白玉の走るが如く虹の七彩の相没してうつくしきが如し一糸の接目だに見ず麗しきこと自然其ものゝ如し大胆ある雅俗の折衷此に至りてはほと〳〵極れり評者思ふに此般の絶妙好辭は其旨意を離れてもてはやすに足らん夫の清樂の聲は其樂譜を知らぬ者には何の意味も無けれど我れこれを聽きて美とす美と感ぜざるを得ざるなり此二編前にいへる如く事を主としたるは一つなれど其脚色は甚だ異あれり蓋し『勝閨』は事の變換を主とせること『桂姫』よりも重し故に主人公と見做すべきものあし否むしろ主人公と見做すべきもの卷毎に輩出す故に時間を使ふこと廣く又空間を使ふこと廣し故にまた偶然の事案外の變蹤を接し局面絶間無く轉換す有爲轉變の相まことに歴然たり其徹頭尾の主人公無き證には上の卷を開きて小主人公の多きを見よ、腹十文字にかききれる畠山政長も若君を守護して落行く平三郎左衛門も頓智もて君を救ふ遊女妙も御兒丸を怪みたる細川政元もさては志貴の八郎もさては若君御兒丸もいづれか主要なる人物にあらざる、若くは中の卷の水澤敏長、遊佐九郎二郎、初花姫、小六太禪門、又は下の卷の義植、尼公、竺阿の徒いづれも名代下の役にはあらず人物いとも多にして而も其輕重相當れり御兒丸主公あるが如しと雖もそはアーサル公の『仙女王』に於ける若くは里見義實の『八犬傳』に於けるに同じく物語の脈を繋ぐ

ための料のみ而して斯くの如きは素より物語の常法也『平家物語』も此法により『源氏物語』も此法により『八犬傳』も此法により『田舎源氏』も此法により『田舎源氏』は其理『勝閧』に光氏あるは其理『勝閧』に御兒丸あるにひとし素より主人公と名づけバ名づくべけれど蓋し事の脈を繫ぐ爲のものゝみ扱『勝閧』の脚色を案ずるに先づ畠山の滅亡を敘して御兒丸が落魄の緒を發き斯くして忠臣と節婦とを發揮し更に義豐を政元とを點綴して忽ちまた一忠臣(志貴八郎)を出しやがてまた討手襲來のことを敘して主從流轉の因を作る事を主として人を客とし事を先にして人を後にする法に適へり扱中の卷に至りては轉じて初花姫の事に及び先づ木澤敏長の偶然或家に立寄れる事より發端して遊佐をいだし姫をいだし小笹をいだし菖蒲をいだし禪門をいだす即ち事を先にせる也さて榮屋の口を借りて御兒丸が大和奥の郡に潜みてある事を言しめ此事を臺にして人々の發足を呼起し途中の厄難を呼起し御兒丸との遭會を呼起す是また事をもて事に接ぐものなり下の卷とても亦同じ終に義豐の亡滅して御兒丸の安堵するに至りて結局す終始こと〳〵く客觀的敘事にして整然秩然たる物語なり之を物語として何の著き欠點あるか評者は未だ知る能はず詮ずるに種彦

馬琴得意の筆法我固有派の本性なり

（其　二）

翻りて『桂姫』を見るに其脚色痛く之と異なれり上卷花、賣の卷は「玉をまろばすやうなる」花賣の乙女の聲をもて実如と端を發す此聲緣となりて藝妓舞子の聲きこに客あらはれ乙女あらはれ「姉の袂へ縋下る」五六才の禿切あらはる、孃てまた実如として「斬た〳〵」と人雪崩此脚底飛鳥的事件を緣として花賣の愁傷を呼起し善四郎の似而非深切をあらはし花賣の素性を明し善四郎の毒計をほのめかし母親を見せ母子の情を見せそれより流水の低きに就くが如く事情の必然を因緣として主人公が流轉の境界に墜るさまを結びいだしたる是また事を主とせるものにて純然たる物語の体なれどおのづから『勝閧』とは同じからず蓋し三味道人の本意此等事件をもて主人公墜落の因緣としたれバなり當に事をもて物語の主題とせずして物語の因緣としたれバなり具に云へバ『勝閧』の事件は多端にして奇なれども偶然なるが多く『桂姫』の事件(かゞはかし)は單純にして奇ならざれど尚一篇の精髓也彼の惡漢の毒計ありて桂女の艱難も滿篇の悲哀も生せし也試みに乙女が惡漢にすかされて其宿におもむき巧みに彼れに說かる、條

を見、更にまた駕にのせられて後の事情を見よ譬へバ桂女は善四郎に実かれて千尋の深き谷に轉落つらんもの〳〵如し一轉して木の根にとゞまり再轉して岩角にとゞまらんとすれど終に得とゞまらで三轉また四轉す其度に傍より更に押おとす者ありされバ其たばかられて妓に賣らる〳〵手續ほと〳〵自然あり讀者あらかじめ彼れの逃れはつまじきを知る也其事情の必然なるべきを知る也

勝　閧　と　桂　姫

事と人と人と事との關係密にして作者が事を主としたる本意明かなり『勝閧』は然らず事件甚だ複雑にて甲の事乙の事丙の事丁の事緯となり經となり相纏綿して流轉艱難を織いだし來る然れども此等の事件大抵偶然に起れるものにて事と事との間に必ずしも密接の關係無し譬へバ『勝閧』の事件は人物のさしてゆく其先々の道に當りて偶然生ひ茂れる荊棘ともいふべし例へバ平が妙女に頼りて御兒丸を女にしたてつるも偶然思ひつける策也而して妙と夫婦になりしは此偶然が媒也是恐らくは必然の勢ならん然れども端なく若君に難義のふりかゝるに至りしは偶然政元が途中に於て女裝の御兒丸を看抜つるに基けり扨八郎が尋ね來つるもむしろ偶然なるに近く木澤が姫に遭ひしもまた偶然也又姫君と御兒丸とがめぐりあふに至りしも偶然也是併しながら作者の用心をさ〳〵奇なる事を點綴して興味を加ふるにあれバ也是また物語の本意にして曲亭得意の結構也必然なるが優れるか偶然なるが優れるか未だ遽かに判ず可らず何とあれバ人間界の事間々偶然に起ること多けれバ已に事變をもて主とせるからは多く偶然を寫せバとて強に非しきことにあらざるのみか却つて實際に近けれバなり有爲轉變の思議す可らざるを示せバなり

勝　閧　と　桂　姫

要するに『勝閧』は猶『太平記』の如く『桂姫』は猶淨瑠理のごとし前者は廣くして粗く後者は狹くして密前者は事繁く人多くして一場所一人の上に詳しからず後者は人少く場所狹くて或一場所の事詳し即ち『桂姫』はさながらに移して我劇場に演ずることを得べし之を幕に分てバ上の巻は西京の幕にて下の花園の巻は東京の幕にて大詰なるべし上の幕を場割に分てバ四條河原の場大和大路人殺しの場三條川端介抱の場(新門前の場)先斗町善四郎宿の場桂の里の場一本松の場(大津驛の場等とすべしさて又東京の幕も同じ譯にて拵くとも三度舞臺を換ふるに足るべし或は作者の用心もあらかじめこゝに在りしか人或は或一時一場所に於ける主人公の性情の躍然たるを見て『桂姫』の小説は暗に人情派若くは人間派の脈を伏したるものと思ふもあらん然らず主人公桂女

は決して此編の主因にあらず將た作者の主題にもあらずそは作者が上卷にては專ら主人公が落魄の因緣(即ち事件)を詳敘しさて又下卷にては其因緣の結果たる主人公の或一種の覺悟を見せたるにても云るけし若しまことに人を因とし若くは之を主題とせば其覺悟を得つる次第を最も明細に敘狀すべきに(即ち主觀的に敘すべき筈なるに)作者は主人公の口を借りていと輕く客觀に敘し去りたり其本意の此にあらで彼れにあることと明けし前にいへる所を總括していはんに『勝閧』は奇事奇談と忠臣節婦とを巧みに綴り合せたる物語派の小說にて其文は穩當なる雅俗折衷文なり又『桂姬』は必然的事情を因緣として一女子の落魄(といふ事)を結び出したる物語派の小說にて其文は大胆なる雅俗折衷文也共に人間の轉變を命に歸し運に歸したるものに似たり人『勝閧』を讀まゞ人世の有爲にして無常なるを知るべし又『桂姬』を讀まゞ世に不可抗の事情あるを感じて命の避け難きを知るとはあるべし然れども終に因果の我にあるとを悟るべき由なからん況んや人間に幽明の二界あるとをや

『此ぬし』と『教師三昧』と　(其一)

『此ぬし』と『教師三昧』とは其結構を云へば共に人を主として事を客とし事を先にして人を後にしたるもの也即ち或一種の人物を造りて或事變を因緣として其性情を發揮せんとせるもの也具にいへば或人物をして或事變に遭遇せしめて其性情に於ける影響の機微を寫さんとせる也其結構は頗る物語派に似たれども人を主とする所に相違あり例へば『此ぬし』の作者は俊橋といへる磊落(みづからあざむける)學生を造り『教師三昧』の作者は志保子といへる我儘娘(スポイルド、チャイルド)の自意識無きを造りて是が性情の動搖を活寫せんとせり而して前者は切なる戀愛といふ事に緣りて人を見はし後者は惡周圍といふ物(即ち事)によりて人を見はす『此ぬし』は俊橋を得て物語成り『教師三昧』は志保子有りて成れり其旨とする所性情の變遷也境遇の變遷にあらず其人を主としたるや明か也といふべし以上其着想の相似たる所也

さて又文章に就きて見るに『此ぬし』は松壽軒の文を親として間々歐文の脈を折衷し『教師三昧』は歐文を体として言文の一致を力め間々雅言をもまじへ用ふ前者は俗稱して言文一致の新体といふ然れども其實は其名の異なるほどには異ならず又其語尾と接續辭との相背けるほどには

其用語は相背かず蓋し双方ともに新文脈をまじへ用ふる所の同じければなるべし唯夫の問答の言葉使ひは『此ぬし』は俗語に文章の薄ぎぬをきせ『教師三味』は裸美人のまゝなり此所負勝無し又地の文の特質をいへバ『教師三味』は特癖（マニリズム）に富むこと『此ぬし』よりも多く聲調の和はざる所も彼れより多しさながらなる俗言と用ひなれぬ漢語とをシラセ無しに相逢はせ若くは歐文の比喩をさながらに俗語をもて譯したるが如き所あればなりこは言文一致体の生れてまだ日を經ぬ程の病にて流石に若返れる元祿翁に及ばぬあり但し是は文の心をいへるにあらで文の形のみをいへる也

批評家往々紅葉を評して只一局部の妙想と文章とに泥める作者也とす或はさる事もありしあらん特り此の作は所謂理想派の作に似たり我所謂理想派とは或一種の理法を得て之を活寫せんとするものをいふ「鹿を追ふ者は山を見ず」といふが理法ならバ之を活寫するもの理想家なり「人間万事金の世の中」と云ふが理法ならば之を活寫する者理想家なり而して理想家と人間派とは先後の相違あり人間派の作にも理法見ゆる事あれどそは實際の人間界に理法の見にたると同じ譯にていはバ自然にして見ゆるなり理想家は然らず先胸に理法ありて理想的人間界を作るなり故に理想家の作れる世界には一法ありて万法無し一道ありて万道無し

儒教ありて佛教あく耶蘇教ありて功利教無く厭世教ありて樂天教無し蓋し理想家の世界は理想家の小世界にして造化自然の大世界にあらず差別衆平等の大宇宙にあらざればなり所謂世界は孔老佛耶を容れて餘りあり所謂理想家の世界は一家言を容るれば充塞す前者は空間の如く後者は容膝の盧の如し前者は宇宙を壺中にをさめ後者は管をとりて天を窺ふ前者は富士峯の雛形を作り後者は富士の一面を畫く其差霄壤のみならず

併しながら世には富士を見ざるものあり富士の一面をも得畫かぬものあり又はじめより思議す可らずとして敢て天を窺はざるものあり彼等の世の海をわたるや落葉の木枯に舞ふと一般飄々泛々風休めバ止まり風起れバ舞ふ嗚呼此徒に比すれば理想家の高きこと幾等『此ぬし』を評して理想派と云ふは敢て貶したるにあらず人間派の更に高かる可きを諷するのみ

評者は假に『此ぬし』をもて理法を寫したるものとせり愛の力の無敵といふ事を活寫せりとす是或は評者の妄見あらん併しながら若し作者の眼中に此理法無

くて此作ありとすれバ評者は『此ぬし』の本意の何の邊にあるかを疑はざるを得ず批評家不知庵主人も曾て此理想を賞しきと記す又大概の人情派は理想派の作者なるを信ずヰッケンス、サッカレーも一方に於ては理想家あるを信ず然るにさる事は作者の識らぬ所也といはバ作者は何を主として此作をなせしか姦落めかしたる男兒の性情を見せんとてか戀に焦れたる當世娘の嬌態を寫さんとてか若し果して然らバ『此ぬし』の作者はいと狹き義の技術派なり畫工と旨を同うせる技術家なり嬌態、痴態、恍惚、失望、無邪氣、姦落、小心等の性情を只離れ〳〵に寫す者なり之を畫工に比していはバ花を畫き鳥を畫くも花鳥と周圍との關係を畫かざるものともいふべし art for art school としても域の狹きものなりさすれバ『此ぬし』は一帖の花鳥畫譜か

紅葉山人は式亭の穿ちに駕して甘ずるものにあらず人物畫工にあり人物畫工にあらず人物畫工にあり紅葉山人は式亭の穿ちに駕して甘ずるものにあらず顏畫工にあり人物畫工にあり筆を得て揚然たるものにあらじ肯顏畫工にあり性情の種々を寫すと同時に件の性情ならず浮世繪の大畫工たらんとする者あり性情の種々を寫すと同時に件の性情を左右する理法をも寫さんと試みたるならん只夫の理屈を先にして人間を後にし實を本とせで虛を本とし一を容れて二を容れざるこそ所謂人情派の特質

なるべけれ

（其　二）

扨又此點は『此ぬし』と『教師三昧』とが相同じき所なり紅葉も美妙も共に人を主としたる小説をものしながらに其立案の次第を見れバ二人ながら理法を本としたるこそ不思議なれ但し是人情派の多少理想派とあらざるを得ざるに基く事にて其人間派と異なる所爰にあり案ずるに『教師三昧』の根底は習慣と周圍とが人を作ると云普通理法にあるもの〻如し作者の本意を叩かバ或はそれのみにはあらずともいはん素よりそれのみにはあらざるべし然れども『教師三昧』にあらはれたる所はなべて我評を證する也主人公志保子の生立を見るに「祖めぬばかりにして育てられ」し結果やう〳〵我儘娘となりて學校にあるを「楚四」のやうに思ひしはまださすがに白糸のいと清き頃ありしを「間々教員室に居殘りて四方山のはなし爲て舌を研ぐ稽古」の重なりしが「そも〳〵身の落つるはじめ」となり年十七となりて吉士を思ふ心のおこりて「邪道に足一足」これればかりはおのが心より生じたるに似たれど「親をおどして舌を出す」癖の偏に「女教師仲間なる羽田富江」の傳授なりしを思へバこれもまた周圍より得し影響あるべし其の他「教員

室に居殘りて男女席をまじへての天下無し徒では興無しとて阿彌陀の間食に
やう〳〵人品を下せしもこれまた「尋ねて來て遊ぶ」羽田富江の音頭の餘音ある
べし斯くて清華學校へ中乘しては腐れたる大氣鼻を撲ち志保子の膓ます〳〵
汚れ其のみづから望む所を問へば「只嫁入支度と間食と道樂がしたい」と計りに
て始と善惡の辨無し一向に周圍と習慣とに驅るゝのみされバ志保子が我非を
意識して其身を省みるに至りしは學校といふ惡周圍を離れたる後にて「多少の
懺悔胸を突き」『五體刎木にかけられ』たるやうに思ひしは其惡周圍に遠ざかりて
我家の門に近づき不孝の娘をも惡しとせで好める魚を炙り燒ける「其いつくし
みの香を聽きし時なり見るべし志保子の一擧一動一煩一惱總て外物の刺衝を
得て浮べるとを素より心は水の如く情は浪の如くなるべければ風なければ浪
はたつまじけれどさりとて全く淨水の如き心は聖人と小兒との外にはあるま
じ人間の實際を見れば心の淨水まづ濁れバこそ風來たる時濁れる浪をあげ若
くは先づ熱したれバこそ風來たる時熱き浪をあぐるなれ志保子の如きは心の
淨水に冷溫なく淸濁無し只常に汚れたる風に吹かれたるゆゑに汚れたる浪を
あげたり即ち其性いまだ固からず其質いまだ確定せざる也具にいへば水の穢

くして穢き浪のあがれるにあらで風(外圍)汚れたるゆゑに浪の汚れたる也水の
因にあらで風の因たること明けし志保子は猶白糸のごとし而して作者此白糸
をとりて一篇の主公とす白糸の主にあらで如何にして白糸の汚るゝかを主と
したるや明けし前に此作と『此ぬし』とを人を主としたる小說也といひしは他の
物語派の專ら事を主としたるに對していへるのみ故に曰く『教師三昧』もまた理
想派たるや一つ也譬へバ共に朧月夜といふ妙想
を見せんとて春の夜の櫻を畫くものといふべし櫻は末にして朧夜は本也故に
朧夜の妙想は明なれども櫻の上にはあらはれず否あらはれざるにはあらねど
櫻の影こしらへたるやうになりて間々自然を失ひたりされバ『此ぬし』にありて
は俊橘の性質作りものとなり『教師三昧』にありては志保子の墜落急實に失し殊
に其末段の如きは作者の惡戲にこそ見ゆれ造化主の所爲とは見えず人を因と
せずして事を本とし想念を先にして現實を後にしたれバなるべし
斯くいはバ人或はいはん何故に『此ぬし』の主人公を作物といふか俊橘の性情は
躍然と見にたるをや前後何の矛盾かある評者汝は俊橘をもて眞の磊落男兒を

寫せりとするか抑くとも作者の本意は眞の頽落にありとするか作者の本意は頽落をもて自らあざむける一種の人物を寫すにあるをや是紅葉の美術家たる所以也夫れ大に嫌ふは窃に恐るゝ所あれバ也女を見て大喝し不潔物と罵る者は内心窃かに女の美に撲れんことを恐るゝものなり昔一婆子有り一庵主に供養して二十年を經にけり常に二八の一女子をして飯を送りて給侍せしめき一日ひそかに女子に吩咐めける事ありけり女子実然に庵主に抱きつきて今いかにぞやといひけり庵主曰く枯木椅ニ寒岩ニ三冬無ニ暖氣一と女子歸りてかくと告げしかば婆子我れ二十年いたづらに俗漢に供養しけりとて庵を焼き僧を逐ひけりと聞く女子を見て平然たるものすら尚危うし況や武者振ひするものをや俟、橘の女を嫌ふは女を恐るゝが故にて其恐るゝは女を思ふが故なる事智者を俟たでも知るべき事なり作者これバかりの事を知らざるべしや紅葉山人は態とみづからあざむける男兒を寫せるなりと

嗚呼是れ『此ぬし』を辯護せんとて『此ぬし』を破るもの也右手の小川より救ひあげて左手の泥田へおしおとすものなり川も田も共に失墜なるべしといへども評者は川の田にまさりて清かるべきを知るあり而して紅葉山人の失は清き川

渡らんとしてよろめき轉びたるにあり只そのよろめき轉びたるこそ失なれ川をわたることは非ずして即ち作者は無上の無骨漢を寫しいだして愛の無敵の力の之をも動かせるを見せんとせし也然るに理法を重んずるの餘り力人物に專らあらずして「まさしく岩木男」と作らるべかりしもの終に世間に心中立の僞武骨」となれり是豈作者の本意ならんや

若しまた我評を違へりとせバ作者はいと狭き區域内にて理法を寫さんとせしもの也僞武骨に於ける切愛の力を寫さんとせし也僞武骨とは人情に脆しといふに同じ情に脆きものと愛の力との關係を寫さば何の益ぞ紅葉山人何條さる益もなき戯れをせんや到底僞武骨をもて作者の本意とする者は作者を愚にする者也

（其　三）

『教師三昧』の着想は頗るブラの立案法に似て周圍の影響を重く見たる所面白し但其周圍を重んずるの餘り主人公志保子をほと〳〵無意識の自動機械に作りなせり吾人此篇を讀みて惡周圍の無殘なる影響が次第に無邪氣なる少女をおとしゐるゝを悲む墮落せる少女を喞らんとは想はず志保子は雪の如く淨

けれど常に周邊の惡大氣が彼れを驅りて魔道に誘ひしを知れバ也案ずるに美妙齋が志保子の墮落を寫せる所は三昧道人が桂女の落魄を寫せる所に相似たり共に勢の必至也只其異なる所をいへバ彼れは事を主とする故に必至勢を因として桂女の境遇の變遷を歸納し此は人を主とする故に必然勢を緣として志保子の性情の變還を誘致す而して彼れは孝女此れは敗德の我儘娘なれど二人物に對する吾人の同感は同じ度也其共に無意識あるを憫れめバ也桂女の悲も志保子の亂行も皆外勢の所爲也自意識を標準としていへバ自ら招き自ら致せりとはいひがたし夫のマクベスが意識して弑逆を行ひハムレットが意識して優柔不斷あるとは其の趣太だ異なれり必竟彼れにありては人因とありて事緣となれるに此れにありては事をさ〳〵因となりて人は却りて緣となれり其間は冠履轉倒の差ありこれを人情派と人間派との相異あれる點とす

併しながら評者は强に人情派(理想派)を排するものにあらず東南極まれバ西北と合し理想極まれば現實と合するを知れば也只其理想の圓滿に現せざりしを惜むのみ而して『教師三昧』に就きては更に一つの惜むべき事ありなくてもあるべかりし勸懲主義これあり『柵艸紙』早くも此點を評して『蝴蝶物語』を宗とせるかとやうにいへるまことによくもいはれたり思ふに作者の寓意此假作的女學生を犧牲として幾多可憐娘の墮落を救はんの大誓願なるべしされバこそ口を極めて冷罵冷嘲して志保子其人をしてほとほと身を置く所を無からしめたれ此殘忍不自然なる嘲罵は美妙齋の本心にあらじ若しまた假に然らずとし作者眞實に志保子其人を憎惡して叱咤筆誅せるものなりとせんか其心太だ解しがたし何となれば若しかゝる憫れむべき自意識無き罪のなき乙女を筆誅するにだに斯かる銳き筆法をもてせば他の意識して惡をあせる極忍極惡の奸賊を誅するにはまた如何さまの筆を用ふべき昔の歌人おにがしが其子をいましめしたる物語を聞きも知らぬやうにかいたるものかあゝまこと惡むべきは自ら識りてする罪惡あるべきに

跋を見るに「一字かいて血の淚(云々)三字四字とおれば骨肉の淚」云々とあり作者の冷罵は勸懲主義よりいでたるにて本心にあらざること明か也さもあらバあれ評者は此不自然ある冷罵冷嘲の勸懲主義の一將となりしがために此微妙ある悲哀小說が甚だ殘忍なる滑稽小說と化したるを惜まざるを得ず嗚呼紅葉山人は主

人公を寫し誤りていとめでたかるべき妙想の範圍を狹うし美妙齋主人は勸懲魔に誘はれて好トラジェデーを殘ひ了んぬ

三上、高津兩學士合著『日本文學史』上卷

地味季候を察せずして種蒔き耘らバ人皆其愚を笑ふべし然るに今の文士動もすれば我文學の地味季候を察せずして新文學の種子を蒔かむとす順序轉倒といふべし爰に三上、高津の兩學士多年刻苦して『日本文學史』を編纂し大に當世を益せんとす此書は實に我文學の風土記也何の花の我國にはいとよく咲けりしか何の實の最もよくみのれりしかは此書を讀めば瞭然たり此書一たび廣まらバ熱帶地方の植物を取り來て強て我國に移さむとする者も大に悟る所あるべし程無く我文學の園生はまことの花とまことの實とをもて埋もれん此書編纂の法も頗るめでたし漢學佛敎の輸入假名文字の發明等は我文學に影響を及ぼせる大要素なるが著者よく爰に心を籠めていと詳細に說かれたり上卷は上古の文字有無の論よりはじめて平安朝の文字をもて終れり其間の國文の變遷目に見るやうに記叙評論して文例もいとゆたか也人の欲に限りはなけれど我最初の文學史としては誰か限りなく欲をいはむや只少しく欲をいはバ卷頭にいと長々しき文學論是れ疣也凡例の中に短く記されて當然なり初學の便にとての老婆心切と見ゆれど文學論としては深からず初學の爲としては長々しきに過ぎたり第二には古文に註解の無きこと敎課書としては不足なり此まゝにては地方の敎員は困ずべし又總て文例を別にして本文の末に一束とせられたる、却りて學ぶ者の爲に不便なりこれは評論の都度且論じ且例證せん方便利なるべしさる例は西の文學史にはいと多く且よくすれバ最も興のある法なるに何故に用ひざりしか

何はともあれ我文學界にとりてはよき賜也文學に志ある人は一本を求めて座右におくべし此書は日本文學の地味誌なり、地圖なり、地圖地味等を見て後にこそ開拓はすべけれ

下卷

此書上卷の署評は已に往ぬるころものしたりき今また其下卷の成れるにあへり我文學のために祝すべし聞く所によれバ此書の上卷は已に國學院、東京專門學校等にては敎科書となり往々は高等中學校をはじめ哲學館、華族女學校等に

ても用ひらるべしとぞ此書の時の必需に適ひたる良著なること著けし
比較上よりいへば上巻の方は日本文學の變移せる道筋尚さすがに單純なれバ
編者の苦心も割合に尠かりしならんが下巻即ち鎌倉時代以下の文學に至りて
は文學稍や進化して多岐多般におよりにたれバ材料もおのづから雜駁多端なら
ざるを得ずこれを分析し總合し取捨淘汰せる編者の骨折そもいかばかりおり
けん思やるに餘あり偶〻漏れたる事のあらんも穩かならぬ解釋のあらんも是
は又止むを得ざる所なるべし殊には編者深切にしてをさ〳〵初學の便宜を思
量し(教科用書あれば)いと豐に文例を擧られたれば自然本文の區域を縮めて爰
に此事のいはれでは叶はじと思はるゝ事の終にいはれで止みたりと見ゆるも
流石に多かりおしなべていへば下巻は上巻よりも雜駁にて讀みて益すべき事
も面白かるべき事も多からん代りにはまた難ずべき節も多し併ながら此著の
よしあしを云はむとならバ先づ此書の文學史の破天荒たる事を思ひ兼ては此
の書の教科用書としてものせられたる事をも思ひ扨後に兎角いふべきなり評
者の見る所によれば編者は頗るよく其任を盡し凡そ我文學の生長に影響を及
ぼせりと思はるゝ文章は殆ど網羅して剩せる所無きが如し人若し此書を繙か

ば日本文學の地味と地圖とは瞭然として見ることを得べく古來いかなる花卉
のはなさきいかなる實のみのりしかは此掌の筋を見るにも似たらん曩に評者
が此書の上巻を評して風土記也といひしは此故也例へば鎌倉時代の文學と題
せる編を見よ厭世の秋風立そめて梧桐の一葉の散り蓮の花のすがれて佛臭き
ありけらし此一篇は日本文學の初秋にこそ咲きけれ正に是哀はしるき秋の夕暮にあん
代を見よ厭世の旨味は此時もまだ染透りたれど人々やう〳〵秋にあれてや今
は初秋の頃のやうに珍しげに秋々と口毎にはいはずさりとて秋雨の淫がはし
う降つゞきて野分おそろしく鄙も都も荒たればにや七草も疾くすがれ紅葉も
早く散り霜雪霰すさまじく降て氷はりつめたる恐しさに辛うじてそだちし室
の花だにいと稀也たま〳〵其をおがめけん人は金殿玉樓に籠りて佳人の紅袖
を屏風とせし室町聚樂の貴人のみありけんかし夫の謠曲連歌おその流行は臘
梅寒梅の又來ん春を知らせ貌あるにも似たるべし此あたりの叙事は日本文學
の多枯の風土記とやいはまし、さて又第六篇江戸時代の文學に及ては四方山の
草木よみがへり芽を含み花の兄も色めきそめ岸の楊柳も生きて見ゆるおそ是

初春の景色也應て元祿の梅櫻桃李さても咲きたり匂ひたり霞や花、花やかすみ、此あたり豊に文例を擧げたるは日本文學の春の風土記を盡くしたりともいふへし、それより又次第に降りて寛政このかた文化文政とありては表面浮いたるやうにて裏緊り花やかあるやうに見にて沈み盛極りて衰へんとしたる是豊秋の風物にあらざらんや尾花萩女郎花の優なるは更にもいはず紫菀桔梗抔唐めいたるも色を競ひ唐なでしこ千日虫螢虫あど雅びたる又は俗びたるものゝ數を盡して咲亂れたる文園はさながら羅綾の如くあり況して千代見虫の紅葉と共に錦の上に錦を添へたるをや同じ秋景色とはいふものからかの室町の秋には似ざりけり當年の人の心にはれそろしき維新の雪あらしあらんとは小春日和に端居せる媼がうたゝねの夢にだに浮ばざりしなるべし此は是晩秋の園の記也

以上いへる如く春夏秋冬おしなべて日本文園の地味風土、花卉の品々、いと詳細に記されたる、いとめでたし明かにいへば何の世には如何ある文体と文致とが行はれ何を專としてものせしか其中の稀者は誰々なりしか其人の特質はいかにあを頗る細に說かれたり橐駝の翁に其もたる園の地味と花卉の種類とをきけばとてこれよりは詳からじ是書を評して良き日本文學の風土記也といふ所以也

爰に少しくあきたらぬ節をいへば此書我文園に幾回の大變遷（我所謂春夏秋冬）ありしことを記し其都度花卉の品の變りし事を語り其花の形をも示したれど如何にして春の季の割合に長かりしか又いかにして春の暮れて夏となり秋となりしか其あたりの解釋はねばろげ也比喩を離れていはんに鎌倉時代の人は造化、人性、神佛、人の運命等の大題目に關してそもいかさまの觀念を抱きたりしか當時の所謂厭世教とは如何さまのものなりしか本文に只少しくいひたる如き一時目前の感慨のみによりて起りしか若くは更に遠き因緣ありしか此あたり甚だ漠然たり南北朝室町時代とても其如し如何あれば厭世的鎌倉時代の究極して活動的南北朝時代を生じけるにや南北朝以後の文學には如何ある特相（主觀的特相）の現れてありしか、造化、人間、神佛等に於ける當時の觀念はいかさまなりしか此あたり又漠然たり江戸時代とてもまた其如し蓋し編者の主とせる所は各時代の文學の主題（サブジエクト）と客觀的特質とに止まりたるに似たり主觀的特相即ち當時の人情、觀念着眼等に至りては概して掻撫（かいなで）に論じ去り其因

緣を究めずして止みたり此故にこそ此書は眞の文學史といはむより國文史といはむが穩當也といふ者あるなれ評者此非難を破らん力無し扨また卷末に至りては今一つ惜き事あり何ぞや編者の院本小說を敘するや勸懲主義に似たる定規を取りて假にも卑陋の嫌あるものは其形によりて取捨褒貶し就中敘事の中に慷慨めいたる論を交へたる事是也是必竟上卷なる文學の定義より派生したる結果あらめど所詮は文學をもて古今に通じて敎訓の具と獨斷したるより生じたる弊也よしや一歩を讓りて文學は敎訓の具也とするも文學史を編まん折には卑陋ある過去の文學をも(實際成立しものなれバ)敘述せざるを得ざるにあらずや喩へていはんに假に正史をもて儒家の云へる如く訓誡の具とすとも實際ありし事あらんには弒逆の事蹟をも記さゝれバ叶はざるにあらずや元より敎科用書なれバ文例を擧げんは憚あるべし抽象的敘狀的に敘述せんには何の非きとかあるべき否細に敘せざる可らざるなり西鶴も其磧も春水も將た黃表紙もこんにやく版も江戶時代の幾分を代表せる主觀的歷史なればあり殊にいぶかしきは編者の所謂理想の解釋也編者は近松をもて「不完全ながら理想を有りし」といひたるが近松の理想の何なるかは竟に說かず此理想こそは主觀的歷

史の要素なるべきに明解あきこといぶかし編者はまた西鶴其磧等を斥けて何の理想も無くて物かきしやうに敘し去りたるは如何にぞや蓋し戀情派にも理想はあるべく勸懲派にも種々の理想あるべきに馬琴流の勸懲主義をのみ唯一の理想の樣にいひなしたるはいと〳〵解しがたき所也其他俳諧者流を敘したる所も大抵皆形の上の評也本文の如くバ江戶時代の通俗文學は何等の普通觀念をも映射せざるものゝ如しいかでさる道理のあるべき

要するに此書の欠點は其主觀的國史となりたる所にあり評者が此書を揚げて日本文學の眞風土記といひ抑にて國文の歷史たるに過ぎずといはむとするは此故也併しながら此文學の風土記は其廣きこと春夏秋冬に涉り剩へ花卉の標本をさへに擧げたかのみあらず相互の聯絡をも敘したるものあれバ客觀的文學史としては十分其職を盡したりと云ふべし夫今日は磁石もなく海圖もなくて茫洋たる文海を航せんとする時也此明細なる文海の圖のいで來たること其道の人に取りては其效益いくバくぞ況んや羅針盤の功用さへおのづから其中に籠れりと見ゆるをや此書若し五六年前かたにいできたりつらんには何人か月桂冠を編者頭上に加ふることをたゆたひし

妄想錄

博覽多識の餘業なるべき隨筆漫錄を吾徒が倣はんは惡女の顰にもまさる物笑ひならんさりながら漫錄にも種類ありて溫故考證を旨とするもあれば只思ひいづるまゝを述ぶること『枕草紙』『徒然草』の如きもあり、我れ學に貧しといへど思ふこと無くてやあらん、言はぬは言ふに優るといふは藝あらば市川團十郎乙女ならばオ〳〵リヤ姫あるの拔いでたる際にこそいはめ、吾々づれは徒に胸にたゝみて言はざらんよりは打出てこそ敎を受くる傳手をも得め、或物は皆無より佳しとは爰なるべしとひとりうなづきて限りなき忘想をかきはじむ嗚呼の限の沙汰なりけり

奴

淺知と至聖との外は人間の究竟目的は何ぞと問はれて我れ之を證せりと輕答せざるべしされどおぼろげに遍く人間の爲にするあり爲にすると言はゞ大かたの人頷かん、或は之をなみして神の爲にするありと言はん、神を認めぬ間は頷きがたし、或は眞理の爲にするなりといはん、人間を離れたる眞理といふものを認めぬ間は頷く能はず東方の聖人は曰く一切衆生云々と、是人間兼或物なるべきのみ、人間を離れたるにあらずや吾徒の眉間尠くとも人間無かる可からず

人間の事業百千万億種政事家、實業家、宗敎家、美術家、學者、文人、何ものか人間の爲にせずしてよからんや、然るに今の世偏に政事の爲に政事を行ふあり、是政の奴あり、偏に實業の爲に實業を力むるあり、是業の奴なり或はたゞ學問の爲に、若くは美術の爲に學を攻め美を求むる是學の奴美の奴降りては文章の爲に偏に章句を彫琢し些も他を顧みず是文の奴あり共に人間の遊民あり皷を鳴らして責むべし若し夫れ私利私欲の奴と墮落して同胞を害はんものは嗚呼何をもて攻むべき

舊幕時代の學者

おしなべては言はれまじきが舊幕時代の學者ばかり多忙ありしは稀あるべし、當時は學者といへば何事をも知らぬこと無き人 (jack-of-all-knowlege) と人にも

思はれ我れもまた玆か心得たりしに似たり、伊藤仁齋が玄かみ火鉢とはいかに書くぞと問はれて答ふる詞あく未だ考へ申さず、追て御意得べしと言ひしよしと『八水隨筆』の中に記したるあを千萬例中の一なるべし、されバ當時の學者はかゝる瑣細の事をだに知らざれバ大なる恥のやうに心得、競うて瑣事の穿鑿に力を盡せしことは所謂隨筆の殆ど悉く瑣事の考證をもて埋もれたるを見ても察すべし而して其考證は重に俗人の質問に答ふるが目的なれバにや隨筆の紙數と冊數とは多けれど吾徒が讀過して殆ど何の益も無きが多し、偶々玉片金粉あきにあらねど所詮玉片金粉たるに止まりて粧飾にも實用にも用ふ可からず語を換へて評せバ其考證論辯、大抵一事、一物、一時代、一箇所にのみ關したる特殊の事實に止まり、廣く應用せらるべき普通の理法にあらぬ故に其益は多くとも好古家若しくは好事家の娯樂の料となるに過ぎじ茶山徂徠の隨筆おほむね皆然り『桂林漫錄』『善庵隨筆』のたぐひも博覽の寐ごとなり、併しながら斯の如きは強ち彼等に科學的想思の乏しかりしにのみ歸しがたしむしろ博識博覽を譽とする習慣が此弊を釀しきといふべし今の世の學者は專門に安じて未だ舊幕の學者の如くに博覽博識を宗とせざるが如くなれ

ど、人に負惜み自惚の病のある限はようせずば同じ弊に引入れられあん廣く知ることも要無きにはあらぬど深く知りてこそまことの用はあらめ世間よ學者をもて博覽家と同視するを休めよ、學者もまた瑣事を知ることに汲々として大切なる日晷を徒消すること勿れ、若しまた自然に多く知ることを得ば之を分類し統括して或一理法を推定することを力めよ

結構的批評

維新前の批評はおほむね古格を墨守するをよしとせる保存的批評にあらずバ個人の愛憎によりて妄に褒貶するの外なかりき就中著作の批評は世に公にせらるゝ限は漢土の文人の弊を受けて只徒らにほめそやして修辭の末枝をたゝふるに止まり廣く文學を益すべきもの稀なりき維新の後外國の文物入るに及びて政治社交上の事物よりはじめて、次第に破壞的批評法行はれ固有の事物と主義となり驅て西洋崇拜主義となりと打破する風さかんになりゆき延いて歐化したり就中文學の如きは其形(文章)も其心(理想感情)も英佛の物に似ざらんを後

れたりとなし和文は貶しめられ雅俗の折衷文は飽かれ四書五經は古書肆の塵にまみれ馬琴、種彦等も名聲を全滅せられおんとせりきそは當時のなべての批評が偏に破壞的ありければありさる程に機運一轉して西洋心醉の夢漸く驚き一轉して國粹保存主義となれるに及び萬に保守の風勃興せしかば遂に文學にも其餘波及び一方には元祿文學の熱となり他の方には所謂國文學の熱となり ぬ併しながら此等は公平に評せば前の歐化主義の反動に て情の沙汰多分を占めて理性の沙汰いと尠かしされば其前かた力を盡して他が破壞せし惡習慣を此反動の熱に浮がされて又回復せんと力むるやからあり、過ぎたるは猶及ばざるがごとし蒼海の波の如く低く又高からんとは人間相のやむを得ぬ所とはいひながら幾たびも同じ事に行きて返らぬ日を消せんことを可惜ともまた可惜し案ずるに萬般の事今は結構建立すべき心組にて精密穩當に批評すべき時到れり他事は暫く措くひとり文學に就きていはんに西鶴を再興するもよし近松を稱譽するもよし馬琴もよし種彦も、八文字屋も、江島屋もよし只妄に反動の熱に浮かされて稱美するとをなさで、何故に彼等が稱せらるべきか、其美は何の邊にあるか其醜は何の處にあるかと情の沙汰によらで明に理性をもて判すべきなり、古文近古文の興隆もよしただし何故によきかを辨せで妄に修辭の末枝をかしましく罵りて時文の成長を妨げんとするが如きは予の取る能はざる所あり所詮今年の二月迄の文壇の摸樣は反動の熱の醒めざるものと見にたりあはれ情を擲ちて冷に又誠實によしあし草の葉並撰わけて取るべきは取り棄つべきは棄て予が謂ふ結構建立的批評を行ふべき人のいでよかし、何者か第一陣に駒乘いで、紫式部の文學者としての本相を科學的に鑑破して彼れは其の已に得たる文章家たる名譽の外に大詩人といふて層高き譽、一層高き名を天下の文壇に有すべきものかの否かを道破するものぞ又何者か眞先にたちて西鶴、近松、馬琴、種彦を修辭家といふ資格を離れてまことの文學者として鑑破するものぞ、明治廿四年以後は文章軌範的批評の時代にもあらず、金聖歎的批評の時代にもあらず將破壞的批評の時代にもあらず世間幾多の才子、建立的批評の如何あるものあるべきかを案せよ

『眞善美日本人』

故の江湖新聞の主筆『日本人』の記者『哲學涓滴』の著者文學士三宅雄二郎氏一書

を著して『眞善美日本人』と題せり紙數僅に四十葉餘り眞に翩々たる一小冊子のみ而して其文を讀めば言々肉有り句々血有り全篇活きて動き紙背に聲あるかと疑ふ近來の快文字若し讀者を動かさゞる文を死文と名づけバ此種の文を呼びて活文といはん

著者夙く哲學家をもて知られたり然れども曾て『江湖新聞』に『日本人』に氏の文の屢々出づるや予讀みて竊にれもへらく、氏は、尠くとも氏の文は、冷灰的哲學者の文に似ずと己にして『哲學涓滴』の卷初二三章を讀みてまたおもへらく我見つる所大に誤らざりしに似たりと今や又此著のいづるにあうて予はます〳〵我見のたがはざりしを信せんとするなり案ずるに氏は多血性情熱的哲學者の一人なり彼の虛靈界を重ずるの餘り殆ど現實界を忘れんとし終に人間を忘れんとする冷淡、死灰の如き出世間漢にあらて虛實雙界を兩脚にふまへて眉間常に人間を脫却せず平等即差別を觀じて自國の眞、善、美を護らんとする情熱、火の如き世間漢なり若しウチーヅチースが言へる如く情熱の語をもて詩ありといはゞ、若し理解力に訴ふると共にをさ〳〵感情に訴ふるを科學的當代の詩歌なりといはバ、若しルーソー、バルク、カーライル、エマルソンの徒をもて抒情的散文派の詩人なりといはバ『眞善美日本人』の著者は正しく明治の一詩人にして而も詩人の資に富みたること他の韻語家（ポエトアスタルス）の比にあらずといはんそは其一句一解總て活動的血肉より成りて酷だ彼の豫言者の口吻に似たればあり其理想こそ同じからざれ其優劣こそあるべけれカーライルが當世の豫言者たりし所以ルーソーが當時の豫言者たりし所以も蓋し三宅氏が今日に豫言者たらんとする所以と敢て異なること無かるべし

シエークスピヤの傑作を讀むや不易の活造化髣髴として吾人の眸に映ず而して其著書は迥然として天外にあるものゝ如く吾人竟に其姿を見ず大ドラマチストは宛然小造化翁に似たれどなり然るに夫のミルトン、カーライル、シエレー等の傑作を讀むや著者の理想界躍々として現じ讀む者の血は奮えんとし肉は跳らんとし無明はこれが爲めに明かならんとし懦夫はこれを得て起たんとするとせバ實に此の後派に屬するものか思ふに三宅氏は同胞四千萬の迷夢を覺破して未來に善美ある大日本國を造りいだされんと試みるものあらん

著者先づ「日本人の本質」の條下に於きて宇宙主義と列國主義との矛盾せざるべ

き由を論證し「圓滿幸福とは眞善美を極むるを謂ふ」と前提し來りて其眞を極むるや猶金星の經過によりて大陽の距離を測るが如く及ぶべく多く及ぶべく異なる地より之をなすを要すと說き「盧山の形かなたよりは峯と見ゆるも此方よりは巒と見ゐん峯を孰り巒を孰り彼是此非と言ふ盧山の眞終世見はれじ」と隱喩し暗に歸納的論證の止むべからざるを諷して列國對立の必要を說き善を極むるも美を極むるもまた復然らざるを得ざるなりと辯じて竟に「我日本人は其特有の材能を發達せしめて彼れ白人種の欽陷を補ひ眞善美圓滿の幸福界に進むべき一大任務を負へるものたるや必せり」と斷じたる所極めて壯極めて快日本男兒誰か起つて贊同せざらん哲學的問題としての正否は暫く措く之れを愛國的抒情詩として見れば起し得て雄渾壯大頭首先づ大に振ふものと許すべし」次に「日本人の能力」を論じたる一節は純然たる一編愛國のリリック、ポエトリー、掛くとも之を讀める當坐は蜻蜓洲中蓋し一人の臭劣男兒無からん嗚呼散文界に於きて此大抒情歌を見韻文界中に此者を見ざるとまことに怪むべき哉著者は更に進みて「日本人の任務」を論じ之を三段に分ちて第一に極眞に於ける日本人の任務第二に極善に於ける日本人の任務を說けり論序整々として一絲も紊れず加ふるに證例いと豐なり此あたり稍や抒情詩的詩趣に乏しき代りに議論としての價は高からんとせり最後に第三の任務に論及し極美上に於ける日本人の任務は其固有の美質たる輕妙の能を發達せしめて各國の藝術と轡を駢べ相競爭するに如くはなしと說きて「たとひ其特質にして口を極めて稱揚すべきものにあらずとするも非難を容るゝの餘地あからんには益々之を宇內に撒布せよ之れまた人類の美を極むるに於て一箇の手段なり」と斷言したる所稍やまた抒情詩の口吻に似て讀む者の肉動かんとす

嗚呼我同胞四千万人皆起つて此小冊子を一誦せよ平等に偏りて差別を忘るゝは相對に拘らひて絕對を見ざるものと其惑ひや一なり且つ万般の詩文を讀むに只管冷灰的眼光をもてすることと勿れ哲學科學の書と沒理想の世相詩との外は須らく時と處とを忘れずして讀むべきあり窃に方今の學弊を案ずるに似而非哲學の流行曲學の誇衒漸く其勢を逞うして頑頑的死灰的批評こゝかしこに流行せんとす一時の方便敎を評するにも不易絕對の標準を以てし所謂杓子定規の狹く且窮屈あるを用ひんとする者あり彼等の言ふ所の如くにせんかジョツブも取る所なき妄言家にてカーライルも一個の妄信者ならんミルトンも一

個の偏信詩人にしてルーソーは勿論狂人ならんバイロンの抒情詩は總て皆愚人の囈語にしてシェレーの抒情歌は悉く痴人の譫言ならん然り或は妄語たるに過ざらん但し之を妄語ありと斷じて敢てみづからは不言不說當世にも後世にも何の裨益する所無き衒學者と謗くとも當世を裨益したる此等空想家との功勞を比べバそもいづれをか高しとすべき起つて抒情詩人の理想を讀め、日本をして三宅氏が理想中の日本とならしむると否とは一に君等が心にあり三宅氏が果して豫言者あるか否かは彼の冷灰的僻見を脫せる情熱的君等が心に於ける此の書の影響の如何に因らん三宅氏は果して豫言者か否か余は敢て判せんとはせず只君等の僻したる眼が此の明治のアルンドをして此當代の小カーライルをして對手彈琴の憾あらしめんことを惜むのみ、嗚呼聽く者のあからんかアデンスの武器庫を震蕩しきといふデモスゼニズの雄辯も無人孤島の落雷のみ心耳を洗ふ广訶薩の妙音もサハラの荒漠に通へる風のみ

讀法を興さんとする趣意

人は其思想を他に傳へんとす

人は思想する動物あり人と思想とは離る可からず人は相感する動物なり人と相感とは離る可からず此の故に人は社交の動物あり人と社交とは竟に離る可からず哀歎苦樂の別を問はず人の苟も內に思ふ所ある時之を外に表して其同胞に示さんとするは蓋し此理に因る例へば樂天派の先覺が其所見を公にするは現在の有限を知らで忘想の無限に苦める者を慰諭せんとするに由るべく厭世派の先覺が其所感を公にするは此有限の穢土に知足して自ら醜陋に安んずる者を攪破せんとするに出づるあらん而して大慈人大至人が其神聖の教を說くは遍く迷惑の衆生を悲引して有限と無限と幽と明との關係を明にし安養の彼岸に達せしめんとするに出づるあらん案ずるに人間に此相傳へんの天性あるは造化の不可思議配劑にして相憐み相傳へて相提携することの人の天命たるに因らずんバ非ず然れども人誰か生れおがらにして此隱秘ある天職を識るべき滔々たる天下、人の大かたは私情の動物也私利の爲に思を吐き私樂ある者は其情を語る才學識ある者は我が慢心に媚びんとて思を吐き私苦私樂ある者は其私を抒さんとて情を吐き以て世間の相感を呼ぶ之を前に謂へる使命に比せバ其差ふ所幾バくぞ吾人の多數は此差の善惡を知りて而も善に赴くを得ず斯く

論ずる者も早く已に奈落の底にあるべしさもあらばあれ賢も愚も其思ふ事を表白して他に傳へんと樂ふや一あり人に其思を表示せんとする欲あるは天性あり動かす可からず

思想を他に傳ふる法

人は已に其性の自然によりて其思を他に傳へんと樂(ねが)へり彼れは如何にしてかこを成就す夫れ人の心は其面の如く殊あり、思想を傳へんとする欲は同じけれど其本意は千差萬別あり例へば孔子釋迦耶蘇の如く世を濟度せんの本願ありて高上ある教法を說きしもあり若しくばダンテ、シエークスピヤ、ギヨオテの如く人間相の秘密を寫して普く世間に示さんと試みしもあり或はアリストートル、ベーコン、デカルテの如く舊妄誕を排斥して新學問を闡明せんとするものもあらん或は近古の哲學者の如く有形無形の兩界を一貫して眞理の根底に到徹せんと願ふものもあらん或は又尋常の多數の如く自家の才學を示して功名を博せんとするもあらん將た又大多數の男女の如く單に私の胸懷を披露して同胞の相憐を買はんとするもあらんこれ其本意の多樣あらんことは辯ずるを須ひず但夫の思想相傳の法は予は僅に二種あるを知るのみ著作(ライチング)と話說(スピーキング)と是あり話

說は本題の外あれバいはず乞ふ著作の事を說かん

上代の著作と今代の著作と

著作の名は一なれど上代の著作と近代の著作との間には其効用の上に相違あり其故をいはん何れの國にても上古の時代には印刷といふことなく料紙さへもいと乏しかりしかば隨つて書き寫すことも盛ならず此故に偶々著作する所あるもそを他に傳へんはいと〳〵難義なりき開明の今日にては便利自在ある印刷術の助あるが故に只我が思念を章句となして表白することを得バ立地に之を印刷して世間數萬人に傳ふることを得れど上代にはこの便宜無し第一料紙乏しきが爲に高上なる觀念も徒に古市の斷片に書きとバめられ若しくは(西洋ならば羊の皮紙の片端などに書きしるされたるのみにて永く作者の坐右にとバまり又は古つバらなどの中に押込められて風にも觸れず日光にも照らされで埋沒せしこと多かるべしたま〳〵寫し取りて相傳へしことあらんもそは數十人若くは多くとも百人に足らぬ小社會の間ありしなるべし物に譬へていはバ近代の著作は浮屠氏の謂ふ大慈大悲觀世音菩薩の如し箇の絕大觀念が作者の胸懷より解脫して或ある印刷の機械壇に來降するや料紙

の白蓮華紛々として翻り紫雲漲り黒龍躍り奇機回轉して靈響の憂々鏘々たる間に件の大觀念は一刹那に化して三十三身となり須臾にして三百三十身となり其國語の行はるゝ限の大世界に八散して大光明を放ち奇妙相を現ず其降臨して法を説くや豈啻に十九説法にとゞまるべき讀む者の信心の次第によりて億萬の法を説くとも思はるべし大觀念の本尊は唯一位一躰あれど印刷術の功徳によりて分身斯くの如く自在あり、古代の著作は然らず比喩妄當ならざれどもも假に之を耶蘇教の唯一神にたとへんそも大自在全能ある神品の光明は元より廣大無邊にていとよく大宇宙を掩ふに足れど元是唯一躰不可分離的神品あれバ分身八散せずして常に超焉として天上の世界に孤在せり信心渇仰のともがらは猶聖廟に於ける中古の香客の如く山河千萬里を遠しとせで我より進みて彼れに賽せんとせば大慈悲の恩波に浴すべきが他の彼を知らざりしものは惘れむべし件の唯一神品は曾て歸依渇仰せざるもの丶身邊へは降らざりし也之を明にいへば古代の著作は廣く讀まるべきものにはあらざりし也さりながら人の著作するは我が感想を他に傳へんと願へるに外あらねバ件の神品いつまでか空しく天外に超焉たるべきむかし耶蘇教の唯一神が時に人間に化現して濟度の遊歴を試みし如くに或方便を求めて世間に現れんと欲するに至るべし此に於てや朗誦朗讀の必要起り此に於てやホーマルは『イリアッド』を朗誦して希臘の列國を遍歴しヘロドタスは公衆をつどへて其史を朗讀しき上古の希臘人が文の節奏あると節奏なきとを問はず有調と無調とを問はで常に公に朗誦して以て衆人に聽かしめしは全く此必要に因ることにて又國土の東西を問はず誦し易き節奏文の先づ起りて無調の文章の後に興りしはた此理に因る也されば上古の時代に於ては著作と朗讀とは猶上唇と下唇との如く相伴うてはじめて人の意を發露し若くは車の兩輪の如く相待けてはじめて人の思を運びき今の所謂默讀は恐らく其ころには行はれざりしなるべし

讀法の種類

然らば今日の如く敎育普通したる世となりて一編の文章の忽ちに化して數萬部の印刷物となり同時に億萬人に默讀せらるゝ世となりては最早朗讀すべき必要はあるまじき筈也といふものもあるべし彼等或は論じて曰はん著述を朗讀するは古へ未開の世の必要件にて今の開明の世には要あき事也今の世は文

章の意味を解し誤らざるまでに默讀若しくは素讀することを敎ふれば足れり昔人こそ耳をもて他人の作を讀みたりけめ今人は目もて讀み得べき便宜を得て而も今の人は概して普通の讀書眼を具へたり何の爲にか朗讀し若しくは朗讀法を學ぶ要あらん古へは朗讀法といふもの實用技藝なりけんが今の所謂讀讀法は假令用ありとするも僅に人心を娛しますといふ美術の末班に列するに過ぎじと

かゝる論者は讀法に素讀あるを知りて他あることを知らぬ者なり予が謂ふ讀法の如何なるものかをいふ前に先づ讀法にさま〴〵あることを辨ずべし讀法を大別して三種とす機械的讀法と文法的讀法と論理的讀法と是なり夫の默讀も讀法の一種ありと雖も實は前にいへる三讀方をば無言にて行へるに外ならねば玆に別目とはせざる也蓋し讀む者の才學識見の多少によりて其名は同じやうに默讀といふとも其効用の實際は或は機械的讀法なるもあるべく或は文法的讀法あるもあるべくまた論理的讀法あるもあるべければあり曩に饗庭篁村氏が『國民の友』にて「讀かた」を論じて「たとへ音讀せずに默讀ありとて心に其調子を取りてよく讀みてこそ始めて書中の妙味は解せらるゝなれ」云々といはれしは玆也默讀は人次第にて三讀法に相通と知るべし

機械的讀法（Mechanical Reading）

機械的讀法とは俗にいふ素讀なり文章の句讀だに殊更には注意せずして只文字の並びつゞがれる順序を追ひて例へバ小兒が論語大學などを素讀し、老錬なる變則の英語學者が英文の朗讀をするやうに只さら〳〵と讀流しゆくをいふさて此讀方をする人の聲いと朗かにて流暢なれバ之を褒めて立板に水流したらんやうなりといひ之を譏りて素直なるノッペラ棒讀といふ扨またいと〳〵拙き時には之を啣りて「辨けいがナギなたを」讀とも村雨過ぎての雨だれ讀ともいふ篁村氏の謂はれたる「唐朱八家文のドウヅヤ節にて種彦春水の作を讀」み「三馬の浮世風呂一九の膝栗毛を立讀にエー〳〵と節あしに讀」む輩は思ふに雨だれ黨の甲羅經たるにて氷柱黨など名づくべきものあるべしさて其氷柱の溶けて立板に流るゝ水の如き讀かたあらバ可きかといはんに是とても唯機械的にさら〳〵と讀流すのみなり傍聞きせん者のそを解し得るか否かを思はず故にぼろげに聽取らるゝのみに止まることあり近年すなる謝辭祝辭吊辭答辭等の

朗讀は間々、此機械的讀法もてさら〳〵としてのけらるゝ事あり此法にて讀めば文は哀げなれど讀聲は勇ましく言葉は悲壯なれど讀みざまは泣くが如きことあり所詮讀む聲に情無く温度無く生活無し此法或は名づけて死讀法ともいふべくや關根正直氏が讀法の研究を創唱せられしは全く此弊を歎かれてなり今は教育普通の世なれど百人につきて死讀法を行ふもの尠くとも九十人の割合あらん而して死讀法にて文を讀める者に其文の本旨を解し得るもの予の經驗によれバ殆ど無し墓無き俚歌童謠も活眼をひらきて論理的に讀めバ時に『毛詩』『萬葉』に髣髴たる旨味を含みたるを見るとあれど死讀せば『聖書』も一編の活字の排列孔聖の教のふみもシェークスピヤの靈妙の脚本も甲は玉編の若干字が機械的に聯關して並列せるものゝ如く乙はアルハベット二十六字が Odd combination を作れりとも見ゆべし

文法的讀法 (Grammatical Reading)

文法的讀法は所謂朗讀法の本領にて又の名を正讀法ともいふべし發音、法に合ひ句讀、宜しきを得讀聲の緩急抑揚、よく文意と調和して正當なるが故あり即ち文章を朗讀して他人の聽覺に訴へ彼れの視覺に訴へたらんと同樣の感銘を生

せしめんと力むるもの也夫の讀書眼無き者が自ら讀まバ(前に謂へる機械的讀法によりて默讀(若くは素讀)するが故に殆ど其文旨の在る所を十分には理解し得ざるべきも上手が文法的に朗讀して聞かすれば自ら書を開いて見るよりも一層の感銘を起すべし聞く其かみに「太平記讀」といへるものありて『太平記』を朗讀して人耳を娛しませしことありきと案ずるに件の太平記讀といふものゝ讀方は予が所謂論理的讀法に似たらんよりは寧ろ文法的讀法に似たりしものならん而も人々樂みて聞けりとあるを思へば讀法の巧拙によりて感銘に多少あることを知らるべし

文法的讀法と機械的讀法との第一に異なる所は彼れは讀む聲に調子無く變化無く此れには讀む聲に抑揚あり緩急あり句讀あり多少句拍子の變化あり所詮文法的讀法にては文章の意味をいと明瞭にいと較著に會得せしめんことを旨とするが故に讀むに先だちて先づ深く文の品質に留意し且其體格を分別し細かに句讀に心を用ひをさ〳〵發音の誤無からしめ兼て音訓の別を正うし時に文義を斟酌して多少の句拍子を附け聲の緩急を考へあくまでも文章の本意を明晰あらしめんと力む關根正直氏の所謂「句切り段切りテニハの懸り結び等を

注意して讀むべき事」とあるは是也篁村氏が引かれたる某の説に「物語りの眞味を知らんとならば先づ只本文をよく讀めかし讀方よく本文を讀め、詞と地の讀をよく分ち口切よく讀めば文義はひとり通じ讀みもて行くうちに無量の味ひは出るあり」云々とあるも爰也世間時としては馬琴の七五文、俊基の吾妻下り、若くは近世の志士が作れる長歌やうのものを句拍子附けて抑揚頓挫して誦するものもあれどかゝるは唱歌的句拍字といふものにて拍子はあれど文法にも將た論理にも適ざれば是は一種の機械的讀誦法なり即ち五七、七五等の句拍子につられて我しらず調子づきて誦するのみ予が所謂文法的讀法の句讀並に句拍子は之と異なれり我に於ては聲を張るも文章の意味に因り聲を弛むるも文章の意味に因るあり例へば揚音は疑、不信、歎願等を表し抑音は確定、固信、命令等を表すること(言葉通りに書きたる文章例へば三馬一九等の作にては)敢て歐文の場合に異あると無し即ち聲の抑揚と弛張とは毎に文義に隨ふものと知るべし」必竟するに默讀と朗讀とを問はず苟も文章をよく讀了せんとせば勢くとも文法的讀法に因らざる可からず或は然らずといふ人ありとせん乎予は其人を評して殆ど讀法の本旨を知らぬ者ありと言はんとす就中朗讀の場合にすら文法

的讀法だに行はぬものあらバ予は其人の何の爲に朗讀するかを怪まざるを得ず何となれば已に朗讀すといはゞ人に解せらるゝが目的なるべきに文法的に讀まぬは文章の意義を明かにせぬにひとしければ也

文章の和漢洋を論せず記事叙事の文は大概此法によりて讀むべきあり其中和漢の文章は言文一致に遠きこと遙に歐米の文に越えたれば美文論文の類といへど多くは此法によりて讀むべきにや若し例を擧げていはバ『文章軌範』の文章、『日本外史』の文章『源氏物語』『平家物語』『太平記』等の文章は總て此法にて讀むべき也夙に關根正直氏が唱へられたりし朗讀法といふは正しく此法と思はれたり但し氏の本旨も予が趣意も專ら國文、時文の朗讀法に關すれば漢文歐文に係る事は暫らく題外と諒すべし

因にいふ往ぬる日東京專門學校文學科の諸生關根甥庭の兩氏を聘して茶話會上に朗讀研究會を催せりき其折予もまた其席に陪すべしと約し且篁村氏と契りて同氏の所謂「讀かた」予の所謂論理的讀法を試みんが爲に同氏が作れる院本を讀まんと約しき然るに此事其當日に先だちて世間に漏れ太早計の徒ありて我徒を難じ文學亡國云々とさみしき其意の在る所を案ずるに專門

學校の諸生をもて俳優の假聲を學ばんとするものと非り兼て吾々を責めしものゝ如し其言の謬妄ある由は次々に辯ずべし特に關根氏を誣いて同斑となしたるは(予が所謂論理的讀法の俳優の假聲あるかあらぬはさし措き)更に不當あり關根氏は文法的讀法を唱ふるに止まれり院本を讀まんと主唱せる者は予と雖庭氏とあり

以上いへる如く文法的讀法は文章の意味を明晰較著あらしめんやうに文章を讀む法也文義は文法的讀法を得て火を覩る如く明なるべし併しあがら凡そ文書の目的は文義を明にしたるをもて終れりとすべからざると猶批評の目的の文章の美醜妍媸を分析し金聖歎的結論を得て終れりとすべからざるが如し更に一歩を進めて作者の本意(むしろ作者其人の爲人)を看破し人間と其作者との關係を明かにせざるべからず此に於てや評批的讀法(クリチカルリーヂング)(說明的讀法解釋的讀法)即ち論理的讀法起る

論理的讀法 (Logical Reading)

予が謂ふ論理的讀法は歐米に謂ふ「エロキユーション」の脫化なり必ずしも朗讀の際に此法を用ふ可しとは言はず默讀の際には必ず用ひざる可らずといふあり。悪しくいへば我論理的讀法は彼の文法的讀法の如く朗讀法の本領にあらねど百般の讀法の本領あり(ブンシー)嘗て「エロキユーション」を釋して曰く「エロキユーションとは自作若しくは他人の作を他を感動せしめんやうに(effectively)言ひあらはし若しくは演說する法なり」と又ホエートリーは論理的讀法のことを感銘的讀法(ブレッシーヴリーヂング)と名づけ文意を明瞭に(clearly)有力に(forcibly)面白く(agreeably)朗讀するものありと辯じ其正讀法(文法的讀法)に優る所以は文の情と文の躰とに應じて讀音に若干の應變あるに因る云々と論じたり予の謂ふ論理的(批評的)讀法は上の定義とは要點に小異あり予は或るエロキユーショニストの謂ふ美讀法(fine reading)を興さんとするなり美讀法とは啻に文義を明瞭にし(文法的讀法)有力に(ホエートリー)し面白くするに止まらで其文自作あらば自家の感情を朗讀の間に活動せしめ若し又他人の文あらば其原作者の本意を朗讀の間に活動せしめんと欲するものあり更に具に之をいへば凡そ一文章を讀まんとするに當りては先づ其發音を分明にして彼の北奥の人の如くスとシとを誤ることなからしめ又東京の市人の如くヒとシとを誤ることなからしめ又音訓の別を正うする

なぞはいふも更也勿論文の品、質、躰、格にも注意して例へバ朝廷宗廟聖賢を叙記したる文を讀む時は肅如として讀み山河軍旅を叙記したるには勇壯に讀み山林仙窟を叙記したるには清く宴樂歡娯通達を叙記したるには和かに、神怪豪俠幽險を叙記したるにはものすごげに、攬古搜玄雅勝を叙記したるにはいと寂びしく讀むなど、若くは文の情悲壯なれバ讀む聲も悲壯に、文の情優美なればたれバ聲もまた斷々、情嗚咽すれば聲もまた嗚咽し情怒號すれバ聲もまた怒號すらんやうに及ぶべき限は文と情と相應相伴して緩急の句讀(Pause)に注意し聲の抑揚高低弛張(Emphasis)に注意し哀傷奮激等の情を其聲の色にあらはさんとする心得あるべし蠶庭篁氏村が「物語ものを讀まんには靜かに優しく聲づくろひして我も冠裝束したる心あるべし亦戰記ものを讀まんには聲も強く張り勇ましく其身も六具にかためたる心ならねば興味無し」といはれたるは此理をみやびやかに言はれたるに外ならずされバ或は此法を名づけて活讀法といはんも不可なからん何とぞなれバ彼の機械的讀法の死讀法たるに對して其然るべき所以明なれバ也

論理的讀法の機械的(メカニカル)部門に關しては歐米の學者中子細煩瑣なる法則を設けて子弟に敎授せんと試みたるもの多くありシエリダン、アプソルプ、ヘブン其他枚擧に遑あらず併しながら予は强に論理的讀法をもて朗讀の科學的方法とは信せざるが故に彼のホエートリー(リチュアル)と共に此等細則の益なくて徒に煩瑣あるを排するものあり又批評的(論理的)讀法の細則は蓋し以心傳心にして自得自證せざる可らざるものと信ずるが故に敢て實例を擧げて細則を說かず偏に其法の精神的部門に關する最も大切ある(即ち默讀の際とても行はざる可らざる)概則をいはゞ凡そ論理的讀法にては彼の文法的讀法に於ての如くに强ち文法的句讀に拘泥せで專ら其文章の深意を穿鑿し(批評(グリチシズム))否むしろ其文の作者若しくは(院本あらバ)其人物(カラクタル)の性情を看破し(解釋(インタルプリテーション))自家みづからが其作者若しくは其人物(カラクタル)に成りたる心持にて其文中に見はたる性情をもて直に自家の性情の如くにし誠實熱心に肺肝を傾けて慷慨せるが如く悲憤せるが如く哀傷せるが如く憤怒せるが如くに讀まんとするあり言葉を改めていへバ彼の機械的讀法にての如く單に目(アイス)のみをもて讀まず又彼の文法的讀法にての如く專ら智力(インテレクト)のみをもて讀まんとするあり更に總括して祟せんに

は怒るべき文句には怒りて讀み笑ふべき文句には笑うて讀み急ぐべき時には急いて讀み沈むべき時には沈みて讀み總て「云々あらば云々あるべし」といふ論理に從ひて讀むが故に名づけて論理的讀法といふなり或は之を目して性情的讀法といふも妨おからん人物の性情に相應じて讀めばあり即ち予が謂ふ論理的讀法は譬へバ支那の文人の如きものなり俗稱は美讀法、姓は論理的讀法、名は感銘的讀法、字は批評的讀法、號は說明的讀法、別號は解釋的讀法、又の名は活讀法、綽號は性情的讀法若し之に尊稱を與へバ人間研究的讀法なぞゝやいはまし

論理的讀法の要件

論理的讀法を(默讀法として行ふ時は暫く措く朗讀法として)行はんとせバ必ず先づ下の約束に從はざる可からず

(第一)言文一致の文章か然らざれバ言文一致に近き文章にあらざれば殆ど此讀法は行ひがたく又假に行ひ得べしとするも假裝せる雅文には爛熳たる天眞あらはれざること多く隨つて人性研究の本旨に遠かるべければ論理的讀法は專ら言文一致に近き文章に於てすべし就中傑作の脚本をよしとす(此理は尙末に詳論せり)

(第二)言文一致の論文にもあれ院本の臺辭にもあれ之を讀まんとせバ先づ其文の結構組織句切り段切りテニヲハの懸り結び等に注意し詞と詞との關係を明にすべし(文法を詳悉す)

(第三)文の品質躰格を辨別し褒美、貶難、冷笑、諷刺、嘲弄、戲謔等の語氣の文章上に於ける特質、疑問詠題等の語氣の相異なる所以、例へば同じく只一字のやの字なれど驚愕を表するやの字と怪訝を表するやの字と呼掛る時のやの字との間には語氣に相違ある事等を會得すべし(修辭の原理を詳悉す)

(第四)文法上に謂ふ語句の賓主と論理上に謂ふ語句の主客とは相異なる事、虛字助字等の讀みかた幷に文法上よりいへば直に續けて讀むべき文句も論理上よりいへば所謂思入れの必要ありて句を切らざれば叶はぬなど臨機應變に注意すべき廉々を會得すべし(論理を詳悉す)

之を要するに論理的讀法を行はんとせバ先づ悉く文章の客觀(即ち文法及び修辭法)を觀察して之を分析し解剖して其主觀(論理)に及バざる可からず語を換へていへバ論理的讀者は必ず先づ文章軌範的批評家となり金聖歎的批評家となり

り兼てコルリッジ的、ハズリット的、ゼムソン夫人的、シュレゲル的、ヴェルデル的、ハドソン的、ドウデン的批評家とならざる可からず此法を綽號して批評的讀法といひ解釋的讀法といふは此故なり

論理的讀法の利益

以上の約束にても知らるべきが如く論理的讀法は(默讀と朗讀とを問はず)必ず先づ讀まんとする者に文法修辭論理を會得せしむるが故に多少作文の伎倆を發達せしめ嗜好を高雅ならしめ觀察の力、適應の力、表白の力等を鍛錬せしめおしなべて智情意の三心力を鋭敏にする効あるべし是第一の利あり

又音樂に次いで聲音の美醜調子の當否等を研究する者は讀法なり故に節奏文、韻語を創作せんとする者にとりては多少の裨益あるべし元より節奏調子等は詩の外形たるに過ぎずと雖も詩と節奏文と同視せらるる計に彼此密接の關係ある間は音樂の耳と音樂の嗜好とは輕々しく棄つべきにあらず

第三の利益は雄辯を錬磨すべき助となることあり古來雄辯の學ぶ可からざるを論じて雄辯の秘訣は只一の誠意と熱心とにあり云々と論じ或は辯士は天成なりと論じたるもあれどそは雄辯法の半は技術たるを忘れたる僻論也彼の雄

辯の泰斗すら雄辯の秘訣三あり一に曰く活動といひてみづからも屢々其法を他古今の雄辯大家も學びて後に上達せしが多しげにや至誠と熱心とが雄辯の精髓にして靈火の宿る所あるべけれどさりとて至誠を專一にせよといふ事は其演說の當坐に臨みて人工を用ふるあとの意味にて平生學ぶ勿れといふ義にはあらず猶平生文法修辭等を研究し置きてイザといふ時には神來に任せて詩を作り文をものせよといはんがごとしさすれバ平生の讀法に人を動かすべき技倆あらんものは自然に雄辯の秘訣を知りて一朝天時機の來りたらん時に彼のシエリダンがヘスチングスを彈せしが如く雄辯全院を搖かすこと無しとせずシエリダンは實に讀法の達人なりしなり

讀法の興さんとする趣意

併しながら以上いへるが如きは予が得んと樂ふ讀法の利益にはあらず予はむしろ論理的讀法をもて人性研究法の一端とし延いて人間研究法の第一階とせんことを妄想する者あり若夫れ予が定めたる性情的讀法の概則によれバ君子の言葉を讀まんとすれバ己れ先づ君子の心を知らざる可からず英雄の言葉を讀まんとすれバ己れ先づ英雄の心を知らざる可からずシヤイロックの臺辭を

讀む時は剛愎慳忍執拗ある猶太人の心となりポーシヤの臺辭を讀む時は機敏聰慧にて情濃かある上簡の心となりマックベッスを讀む時は功名の邪念燃ゆるが如く黯憺たる想像蒸すが如く而も眞心の刺撃を忘るゝ能はざる勇怯相半せる賊臣の心となりマックベッス夫人を讀む時は朱唇毒を漲らせて傍人無きが如く而も女性を脫せざる情熱の貴婦人となり或はハムレットと共に轉倒し煩悶し推理し或はオ〳〵リヤと共に窈窕として逍遙し恍惚として歌ひ或はタイモンと共に人間を憎み人間を賤み怒り怨み狂ひ罵り或はフオールスタッフと共に高きが如く卑きが如く勇あるが如く憶病なるが如く智あるが如く愚なるが如く憎むべきが如く憐れむべきが如き人物となり或はイモーゲンと共に嫻雅優美貞眞温柔に、或はミランダと共に清淨無垢無邪無念に若くはイアゴーの肺肝に分け入りて奸邪の骨底を探り或はリチヤード三世の臟腑を潛りて魔王の巢窟を燒くべき資料を求め或はヘンリー五世と共に妄想界を離れて現世の功德を專念し若しくは老道士プロスペロと共に安心立命の境を尋ねて浮世の善惡を知了するとを得んには是豈人間の性情を探り天命の一端を窺ふ者に近からずや或は又タムバレインの臺辭を活讀

しては權勢餓鬼の煩惱の底止する所無きを感じフハウスタスの獨語を精讀しては智識餓鬼の執着の果しあきを意識しハルパゴンと共に猜疑しては眼中人間無く人倫無く偏に黃金の奴となりジユールダンと共に虛榮に心を奪はれては四十にしてアルハベットを學び細君と擊劍を鍛鍊し唱歌し舞踏し狂し亂し或はウサルヘルム、テルと共に義俠の情熱火の如く一身輕きこと鴻毛の如く或はフハウストと共に無際邊の幽界をたどりてアーリマンとの怖るべき爭鬪を瞥見せば是豈人間の性情を探り天命の一端を窺ひ知るものに近からずや予は實に斯くの如き目的をたてゝ論理的讀法を唱ふるものなり實に斯の如き目的をもてり故に勢ひ叙記の文に重きを置かずして脚本に重きを置かざるを得ざるなり

喇難

論じて此に至らば八方の反對論者ときのこゑを擧げて或は叱し或は顰み且喇り且難じて曰はん斯の如くば汝の所謂論理的讀法とは殆ど俳優の舞臺にする事を講堂にするものあり汝は俳優の境界に墮落して無用の遊民と化し世間俗の耻間とあり時好の翫具とあることを甘ずるかと

かくの如き難者は些も演藝と學術との區別を辨へざるものなりそも〳〵俳優とは(和漢洋を問はず)身に假裝を被り面部支躰に多少の粉粧を施し躰を搖かし手足を働かし公衆の褒美を買はん爲に老少賢愚男女正邪の性情を研究し巧に其趣を摸倣し舞臺にいで〳〵云爲し動作し演藝する者、即ち終に演藝者たることを脫せざるものにて其目的の學問の爲にあらで人を娛しまするにある限りは其云爲する所概して摸倣に過ぎぬものあり併しながら予は夫のビューリタン的美術排斥論者の如くに敢て俳優を貶低せんとするものにはあらずさりとて世の學生をすゝめて梨園に上らしめんとするものにあらず故に少しく此條下に於て俳優と朗讀者との相異を辯せん

我國の梨園子弟は論外として暫らくさし置き歐米の俳優に就きて辯せんに彼れ俳優といふ者と我謂ふ讀法の讀者とは其朗誦の方法に於きても又其朗誦の目的に於きても殆ど雲泥の相違あるなり只其稍や相似たる所は其外形の幾部分のみ嗚呼若し外形の相似たるを見て其質を同じありといはゞ五月雨過ぎて這いづる靑だいしやうも鰕て河の物と同じにせられて大黒屋の流し元に生捕とならん

第一に二者の手段一ならず俳優は專に他の聽覺に訴へて足れりとせで別に視覺にも訴へんとす故に假裝し粉粧し身振し手眞似し又其臺辭を諳誦す朗讀者は然らず專ら聽く者をして目のあたり其人の聲を聽くが如く感せしめんと欲する故に一に其聽覺に訴ふされば假裝粉粧せざるべきはいふも更なり身振せず手眞似せずまた敢て諳誦せんとせざるなり是我謂ふ美讀法の歐米の「エロキユーション」と相異なる要點なり彼れにては「エロキユーション」を敎ふるにをさをさ諳誦(Recitation)の法を取れるが故に勢ひ身振し手眞似せざれば俗にいふ手持無沙汰なるべきなり蓋し泰西にては身振手眞似をもて雄辯の必要件とし彼の活動(アクション)を原則とするといふ敎を奉じ平素朗讀法をもて雄辯錬磨の一方便となさんと望めり故におのづから身振を要すべき諳誦の方法を用ひたり然るに予の考案は之と異なり予もまた論理的讀法をもて多少雄辯研究の資とせんと望めること前の「利益」の條にいへる如くなれど其本來の目的は頗る前人の謂ふ所に違へゞ敢て身振を勸めず又手眞似をも妙とせずさりとて自然に成れる Gesture のいとよく其情に調和せるゝものゝ如きはまた强ちに禁めずと雖も苟も技工

的、人爲的に拵へたらん身振は總て悉く禁むべしと思惟せり扨已に技工的身振を禁むべしと定めバ勢ひ諳誦の法を取ることを勸むる能はずそは其手持無沙汰おらんことを恐れ又諳誦の爲に貴き日晷を徒消せんことを惜めバおり さすれバ俳優は諳誦し身振し手眞似し讀者は端然として立ちて朗讀す其方法全く異おれり

次に二者の目的に於て隔絶あり俳優の目的はガーリック、ブース、ケムブル、キーン、アルビングの徒もおは貴紳の歡を買ひ公衆の褒美を求め自家の藝名を高うするが故に人間を客とするおり朗讀者の本願せんとするにあり即ち我を主とするが故に我がいかバかり人性の骨髓を探り得たるか人情を解し得たるか將た又之を活現し得たるかを聽く者に於ける感銘の多少に徵して試驗鑑定し兼ては明かに善惡邪正妍媸美醜の別を他に傳へて及ぶべくは彼等をして感悟する所あらしめんとす即ち大おる誓願を抱きて方便の爲に朗讀の手段を取るなり即ち一は以て人性分析人間研究の方便とし一は以て誨導奬誡の具に供せんとするなり若し夫れ同胞人間に

裨益せんとせバ先づ人間の性情を知悉せざる可からず朗讀者が性情的批評的讀法によりて人間の性情を分析說明せんとするは偏に先づ其資を得んとてなり即ち人間全躰を主とするが故に朗讀の法を研究す朗讀を巧にして我名を得んとにはあらずおくまでも我は客にして人間が主おれバおりされば俳優は錢を納めて公に演藝し此れは專ら學友の間に於て若くは有志の私會に於てす苟も智あらん者は多く辨せずとも演藝と學問との間に主客倒置の相違あることを知らん

難者又曰はん假に一歩を讓りて汝の妄想は或一二の達人には成就せらる可しと假定せんが朗讀の形を得て其本願を忘れ一句讀一抑揚今の所謂歌舞伎的假聲を行ふもの汝が末流に比々たらば如何是多望ある年少學生をかどわかして梨園の泥濘に陷しゐるゝものにあらずやと

未流の穢きをもて泉源の清きを棄つべしといふか、如何おる大聖の敎法か其末流までも清かりし如何なる貴重おる原理か其末流までも貴重おりし嗚呼去り て黃河の本源を探れ

難者更に冷笑して曰はん善し〳〵汝の大誓願甚だ善し只一つの懸念あり汝何

處に汝の臺本を得るか鶴屋南北の作河竹默阿彌の作汝が論理的批評的性情研究的人間研究的滅天倒地的朗讀法とやらんいふものゝ臺本たるに適するか學海居士の作か望村氏の作かいづれか汝の意に適へる豫め聞置かんと嗚呼是我を破らんとして却りて我を誘うて我第二の本願を語らしむるものあり予は我古來の文壇にシエークスピヤ無くギヨオテ無くローペ無くカルデロン無きことを信ず南北奇巧ありと雖も未だ以てシエースピヤ的と評すべからず或は又近松の靈妙時に『ハムレット』以前のシエークスピヤに髣髴たりと雖も彼れの文脉には節奏ありて而も叙事文の混じたるが故に大抵は臺本とすべからざるを知れるものあり

也予は明に恰好の臺本無きことを知れるものあり

批評家石橋忍月氏嘗て屢々戯曲の事を論じて舞臺戯曲の外に文壇戯曲を盛ならしむべしと唱へたりきげにや我梨園の門閥制度と我劇場とに固着せる習慣の牽制と俳優の人柄と看る者の嗜好とは今急に改めんに由無かるべし手力雄の勇力ありとも將たウオルテールの破壞力ありとも悠々二百餘年來の劇壇の

臺石を動かさんと未だ遽に望む可からず假令幾分を改め得べしとするも予は文壇ドラマの擴張奬勵を圖ることのシエークスピヤ、ギヨオテを生まん爲には遙に捷徑あるべきを信ずる由あり

學的ドラマの成らんことを望めり此に於てや性情的讀法の基礎を作りて豫め此等文園的ドラマの來降に準備せん爲に向迎の席を設けざるを得ず

何が故ぞや

試に思へドラマの形したるドラマは悉く人物の臺辭のみより成れるものにて其間多少のHintを與ふるのみにて彼の物語に於ける如く說明解釋批評等の文句を加へざるものあれば讀む者に解釋的眼光無くば『ハムレット』も一篇の復讐の茶番とあり『テムペスト』も『フハウスト』も只一篇の怪談たるに過ぎざらん現に予が知れる某氏嘗て予に語りて曰くおのれ英國に遊びてはじめてシエークスピヤの脚本舞臺に演せられたるを見てはじめてシエークスピヤの非凡あるを知りぬと予未だ同氏が何の邊に感じたるかを詳にせずと雖も思ふに俳優の技倆妙にしてよく彼の作者の本旨を表し人物の性情を活現し得しに因るあらんかドラマの素讀して興淺く有形にして興幾層あることは今改めていふに及ば

すドラマは元と俳優に伴ふべきものあり然るに今や文園戯曲を興さんとする時に當りて汝ドラマを作るとも俳優は之を演せざるべし(具にいへバ汝の作を有形にし解釋し説明する者絶えて無し)といはゞ我觀念を世間に傳へて人間に裨益せんと願はざる作者の外は誰か消望せざらんや眞に世に益せんとするものは素より世間の褒美を求めんと願はざるや勿論あれど世に益せんと企望せる以上は廣く世間の同胞に向ひて本旨を傳へんと樂へるや疑ひ無し而して俳優の之に伴はざる以上は僅に具眼の識者二三に知られて其作いかばかり高上ありとも他の數百人の目には對牛彈琴の感を與へて止まん惜むべき至極あり」我所謂朗讀法の本願は人性研究にありと雖も其第二の誓願は此欠乏を補うて未來のシェークスピヤ、ギヨオテの説明者とあり批評家とあり兼て天命解釋の一助手とあらんとするにあり乞ふ俳優に代るありと太速斷する勿れ俳優よりも遙に高雅に俳優よりも遙に精緻に、俳優よりも遙に深遠ある着眼を有して原作者の本旨を穿鑿し其隱微を發揮し其秘密藏を發き他の死讀的同胞の聾したる耳を掃除し原作者と共に歎じ原作者と共に歎び我みづからも反省し又他人をして反省せしめんとするあり今假に『吉野拾遺』を讀み『文覺勸進帳』を讀み若くは『太田道灌』を讀まんとするは(學海先生篁村大人予が不敬の言を恕したまへ)只是未來の大ドラマチストに向つて莚席を準備するに過ぎざるのみ　(完)

『女殺油地獄』を讀みて所感を記す

『女殺油地獄』といふ淨瑠理は享保六年の作と聞にたれゞ近松門左衛門が六十八才の時の作あるべし近松の世話物、大かたは男女相着の痴情を臺として綴りたるが例あるに此れは一個の我儘子の專恣放逸悖戻剛腹あるをもて骨子とせり用心例と異あるに似たり、去かしながら然思ふは讀む者の力負といふものにて作者は別段の用心もあくて譬へば今の世の新聞記者が雜報をものすらんやうに傳へ聞ける儘を種として巧に潤飾したるに過ざるべし去かはあれど物は見やう次第にて如何ようにも見らるゝものあり木の實の標ちたるを見て木の實標ちたりと見てさてやまば重力をさとる便もあかるべく春去り秋來るは自然の法ありと掻撫に見てのみやまば榮枯盛衰の理を證すべき機遠かるべし仁すこれも釋する人の心々あり眼の一字を甲人は釋して個人に對する小愛とし乙人は釋して宇宙を掩ふ大愛とし乙人は釋して宇宙を掩ふ大愛とすこれも釋する人の心々あり眼を開きて觀る時は三瞬の間にも三世因果はあ

るべき理あり物は其形の大小に拘らず大ある眼をひらきて觀察するが學問の手段あるべしと斯う思ひつゝ手近ある近松が作を讀むに隨うて所感を錄せしは去年の秋の頃にやありけん今取いでゝ見るに一時の感に任せてそゞろに記せしものあれば論序整はずして愚にもつかぬことゝ多く人に見すべきものあらねど往ぬるころ『日本評論』社の戸川殘花ぬしに約しつる兼言に背かむもつらければ元の儘の艸稿に此はしがきを添へて一時の責ふさぎに耻をさらすことゝはあり抔も此評は近松が作を評したるにはあらず近松が作を讀みたる折の予が所感を記したるに外あらねバ讀者其心して見たまへ

〔上の巻〕野崎開帳詣の條に大坂本天満町の油屋てじまや七左衛門の女房お吉が三人の女をつれて出茶屋に憩へりといふ事を叙したる序に始めて主人公を點出し「是も同町筋向ひ河内屋與兵衛まだ廿三親がゝり」といふ句ありて〔同じ巻〕れ吉が與兵衛への意見の言葉の中に「本天満町河内屋徳兵衛といふ油屋の二番息子」といふ文句あり扨又〔中の巻〕に徳兵衛が義理ある長子河内屋太兵衛に向かひていへる述懐に「與兵衛めに商ひの手をひろげさせ手代も置き庫の一軒もたてるやうにとあがいても」とありて〔同じ巻〕與兵衛を折檻の條にも「面倒見て大き

一男の太兵衛
二男の与兵衛

な家の主にもと丁稚もつかはず肩に棒、稼ぐ程費ひほつく、おのれ今の若盛り一働き稼ぎ五間口七間口の門柱の主にと念願を立てこそ商人なれ、たつた一間まなかの門柱に念かけ」とあるを見れば河内屋といふは小体に商ひせる油店にして其義父徳兵衛の着實節儉の人物あることを知るべし、義理ある中の親子は萬事に窮屈なるが常理なるに主人公與兵衛がかゝる着實の節儉人の義子にありながら其行ひの放埒至極なると常理に背けるに似たり年齢わづかに廿三才とあれば遺傳の性癖は暫く措き、習ひより得たる性癖は重に家内の影響なるべし、此故に評者はまづ此義父と主人公との關係を詳かにせんとす

與兵衛と其義父徳兵衛との關係は〔中の巻〕なる徳兵衛の述懐に「そもた衆兄弟は身共が親方の子親旦那往生の時はそもたが七ツ野良めは四ツ、坊さま兄さま、徳兵衛ぞうせい斯うせいといふたを彼奴がきつと覺にてゐる妻もはじめは内方さまの内儀様のと云た人叔父森右衛門、子供も路頭にたつ、兎角森右衛門殿が料見で其方が家を見棄ては後家も此如く夫婦にあり」きと語れるに盡きたり爰に徳兵衛の爲人を考ふるに其心ざま忠直にて謹愼深く着實にて思量あり、されば用ひられても驕る色露ばかりも

無く小心翼々と己を省み誤りて義に背き舊主の恩、知巳の委託に戻らんかと惴々と恐れ片時も安んせざるもの〻如し、祀るや在すが如しとは徳兵衛の舊主人に對する感謝の誠情あり彼れ舊主人の妻を妻とし舊主人の子を子としたれど其心の底を叩けば彼れは依然たる舊手代舊忠僕あり子に對する時の心は舊主人に對する時の心に同じ慈愛は表にて忠順は裏あり、されば太兵衛に述懐するや其いふ所義父の聲にあらで忠僕の聲あり彼れ云へらく「尤繼父あればとて親は親、子を折檻するに遠慮は無い筈あれど」「親方の子」あるゆゑ笞を當べき所無しと、是豈子を見ること舊主人の像を見るが如きものゝ言葉にあらずや尋常の人情あらば世間の手前つらければ、あるいふべきに一たびもかゝる愚痴をいへること無し、與兵衛が暴言を吐けど聞流し足蹴にかくれど抗はぬは皆此同じ心の業あり、匆卒に見れば是唯徳兵衛の愚直にて意地無く思量無きに因るやうなれど與兵衛が母を打擲するに及びて瞰然とおどりかゝり「おうこもぎとり續打に七ッ八ッ息もさせず（與兵衛を）ぶちすに」はッたと睨む目に涙を浮べ「ヤイ木で作り、土をつくねた人形でも魂入れば性根がある耳あらば善う聞け此徳兵衛は親あがら主筋と思ひ手向ひせず存分に踏れた」といへるを思へば前に抗はで踏されし

は意地無く思量無きが故あらで大に思量する所あり、し故あり主從の義を思量して不孝の義子を見ること鴻恩ある舊主人の肖像を見るにひとしき故あり此故に與兵衛が母に逐はれて外の方へ出行を見送りては徳兵衛慨然と聲を放ち「あいつが貌付背格好成長するに隨ひ死あれた旦那に生寫しァレあの辻に立たる姿を見るに付與兵衛めを追出さず旦那を追出す心がして勿体無い悲しいと倒と臥し人目を耻」るに遑無し、げに彼れは外聞を厭ふに遑なからん、彼れは分別（思量）あり力量あり、若し外聞を厭ふ心舊主を敬へる心に優らば實子の面前にて不孝の子に蹈にぢらるゝ淺ましき耻をやは忍ぶべき往來繁き門の戸に臥し倒れて放埒無慚の子の後影を見送り婦女のやうにやは泣くべき、徳兵衛の心に一點の私無きことは前後に照していちじるし、悲むも怒るも舊主を思へばあり、彼れの奮然と怒れるは舊主人の半身と信じたる我義理ある妻を打擲せる不孝の賊兒を見つる時あり「腹を借た實の母に今のざま、脇から見る目も勿体なうて身が顫ふ」とは徳兵衛が心の底よりあふれたる言葉なり「今打たも徳兵衛はぶたぬ先徳兵衛どの冥土より手を出してれ打あさると知らぬか」とは血涙雨とありて瀉ぐ時の聲あり、彼れの其子に對するや義父の資格をもてせで舊忠僕の資格を

もて、女房お澤が長子太兵衛に語りきといふ繰言の中に「子共に遠慮あるからは現在腹に宿した母にも氣兼があるかと思はぬ心置かるゝ」といへる詞あり德兵衛の其妻に對する心持も見にたりけん與兵衛勘當の後德兵衛がひそかに手しまやを訪ひお吉にあひて述懐せる事は夫と婦との間に義理の鐵壁ある證據あり德兵衛曰く「實の母が追出すを繼父の我等輕薄らしう止められず」と、爰にいへる輕薄は俗にいへる輕薄と同じからず俗には世間へ對していふ爰は女房一人へ對していふ、德兵衛が心中の世間は舊主人の半身たりし女房お澤一人なること著明あり「聞けば」與兵衛めは)順慶町兄が方にゐるとやら若し此あたりへうろたへて見にましたら七右衛門殿御夫婦いひ合せ父親は合點隨分母に詫言いたし土性骨入かへ二たび内へ戻るやうに御意見偏へに賴み入」とは夫婦別ある證にて「二人の子供に心を盡すは皆古旦那への奉公、今與兵衛めを追出し一生荒い詞もきかぬ親方に艸葉の陰より悲を受る不果報は此德兵衛ひとり」といへるに舊主を敬慕せる心の誠を見るべし、されど彼れは實に偏りて虛を忘れ一個人、一身の義理に拘らひて社交、世間の義理を忘れ忠僕としての本分に身を委ねて人の親としての本分を忘れ、主恩に報いざる可らざるを知りたれど報いずべき方法を誤りた

り蓋し彼れ已に人の親たり其子不義不孝あらば子を規矯折檻せんに何の悖義かあらんや、かるに彼れは曰く「親かたの子なれば」折檻しがたしと、是主從の間の義理をもて父子の間を整へんとするものなり金尺をもて織物をさし藥量をもて穀物を量るたぐひなり、されば長子太兵衛此謬を辨て曰く「腹に宿ッた母ぢやなされても不道者には拳一つあてずはたえさせ萬事に遠慮が皆身の仇」と太兵衛の言の如し德兵衛が寬大は偶々與兵衛が性質を害ふに足りしのみ人倫社交の大道を餘所にしたれば訓ふべき親に此謬あり與兵衛が放蕩無賴にて譬へば「ぎりのほどけた錢さし」の如く籠で水くむ如く跡からぬけ一夕儲ければ百夕つかふ根生」とあり「意見一言いひ出せば千言でいひかへす」に至れる勢ひの自然ならん、多年辛酸の經歷を積み、世の義理人の道をも辨へてありぬべき德兵衛すら「元が主筋下人筋の親と子釘ごたへせぬ筈、身の境界がくちをし」といひて從僕の本分と親の本分とを無差別に見たりさすれば生年わづかに廿三にて條理を辨へぬ頑兒が「德兵衛どうせいかうせい」といひならはせし昔を忘れず親となれ

る、徳兵衛と僮たりし時の、徳兵衛とを無差別に見做して子の本分と主人の本分とを混同したる當然べし、要するに徳兵衛は「正直」の實に偏りて權を知らず、平等の理義に拘らひて差別の理義に昏く、主恩の忘るべからざるを感銘したれど、親となりては別に盡すべき大任あるを忘れたり、彼れの舊主に對する尊敬はほとほと偶像崇拜の程度に達せり、譬へば專制時代の忠臣が其君に仕ふる心なり、君築紂の如く暴虐にて殘を行ふとも、そを制めん方は直諫か諷諫か、此二ッの外にいでず若し此二ッの方効無くば身退くか若くは生命を犧にして止まんのみ箕子比干の忠平手中務の誠は是あり、然るに徳兵衛の場合にては其身別に親といふ資格をもてれば慈愛至極して實母お澤がいへる如く「まだ此上に根性の直る藥にも母が生膽を煎じて飲すといふ醫者あらば身を八裂を厭はじ」とやうに思へばとて子を諫めて親の死なんことは流石に常義の許さぬ所あり、古來時としては子の爲に死ぬ親もあれど、さるは慈愛の至極せる結果にて、理義の許す事にはあらず徳兵衛差別の理に昏けれど、斯ばかりは辨へたれば身を犧にせんとは思はざるべし且身退くべきにもあらず、君臣の場合とは主客の位置顛倒したればあり、此に於きてや詮術を知らず徒に勘當と一喝して無賴兒を逐出して止む、勢ひの

必然なるべし、但し忠臣の身退くやや、遽くともおのが衷心の操に背かざりしことを思うて安んずるを得べし、徳兵衛は然らず、其與兵衛を逐ふや、尚ひそかに其跡を追うて手じま屋に到る、其衷情安んぜざればあり、即ち彼れ若し忠僕の本分を盡さんとせば、遽くとも身退くまでに極諫せざる可らざれど、親といふ資格あれば之を行ふと叶はず即ち惘然と去就進退に迷へり、されどみづからは此雨岐の由來を知らず、煩悶焦慮の末、纔に婦人の慈、朱褒の仁によりて刹那の安心を求めんとす、是また主從の分と親子の分とを混同したるより生せり、さもあらばあれ此根本の過失は大あれど此れ時勢の果あり彼れは徳川專制の全盛期に生れたり忠義の爲に私情を擲ち一身の利害を餘所にして恩に報いんとするは當代の理想あり從僕といふ資格よりいへば憐れむべきあれど親といふ本分を忘れたる過は彼の眞理の爲に國家を、國家の爲に父母を忘るゝ者の過失に同じ思量經驗に富める親すら親子の分を誤れりとせば、其子此親に養育せられて子の本分を知ればなり、子の私欲に偏りて子の本分を忘れたるは義理を知らねばあり、父は世故に老いたり、故に義理を知れり、子は世事に幼稚あり、故に情

義を知らず、さすれば與兵衛が放埒無慚なるは父子の分を誨へ導くもの無かりしに因縁する所尠からずとすべし、是與兵衛の爲人を評するに先だちて其父德兵衛の爲人を評せし所以あり

大聖孔子は孝をもて百行の本としたまへり、親子の分限は人の守らざる可らざる根底の大倫にして、また最も覩易かるべき道理なり夫子の教を立たまふに當り先づ親子をもて始めたまへるは此覩易き道理を楷として啓蒙の道を開拓せんとおぼしければあるべし、然るに與兵衛の頑愚蒙昧なる殆ど實の母に對する孝子の分をだに知らず豈義父に對する義子の本分を知らんや、況んや商人の務をや、況んや人間の本分をや、彼れの世を渡るは蠻人の欲に驅られて去就し、禽獸の餌を求めて往來し蝸牛の日陰にしたがひて流元を這ひ廻るに似たり「ふみしめもあく世の中を滑り渡りの油屋」の名にし負ひて「賣溜錢は色狂ひ絞り取られて元も利もカスも殘らぬ油桶重げに見せ」て親をあざむき身の非を掩ふに足る智惠はあれどそは私欲の奸才といふものにて、野蠻の智、頑童の智あり、野崎詣の途すがら叔父森右衛門の爲に懲されしを却りて方便として父母をあざむき金子を貪らんと試みしも此奸才あり妹かおをすかして僞物の怪を粧はしめしも

同じ源よりいでたり、私情の爛んあるが故に此奸才は沸なり、夫の經驗派の學者が智能の發達を情感の作用に歸し兼愛の德性をもて自愛の至極せるものとせる故なきにあらず、野蠻未開の初めには人皆私に專らにして他を顧る智能無し、現在の利害を知りて今を避まくする智能はあれど思念の夢にだに未來に及ぶことを知らざるにひとし、其實の母すら習慣によりて母とせるもの、如く母として事ふまつるべき務めありと認めざることを、其おうこを揮ひて母を打つを見ても知るべし茫々たる習慣性と瞬昧たる遺傳性を除きさらば、與兵衛は髣髴たる一個の未開人たらん、眼中義理無く人情無し故に智惠あるに似たれども其智は只目前の小智あり、德兵衛の「正直を見ぬいて」之をあざむき蔑如にするも有形の罰の來らざるを察知し「ゑたいがいに蹈つけ」「ヲヽ手柄に婿が呼ばれうば呼んで見や見物せうと親の前に足蹈のばす」傍若無人の小才智はあれど世に大道の流行ありて早晩形無き嚴罰下り天地廣しといへど終に不孝の子を容るゝ地を餘さず「果は千日千人聞万人聞けば十萬人殘る方あく世の鑑傳へて君が長き世に清からぬ名を殘すべし」とは彼れ曾て知量する能はず、譬へば旦あるを知りて

夕あるを知らず花咲くを知りて花散るを知らざる類あり、未開の蠻民にひとし、目前有形の物の外に怖るべきものあるを知らず、されば誤りて公儀の貴士人に泥をそゝぎては彼れ恐怖畏縮周章狼狽して爲す由を知らず「アヽお侍さま怪我でござる御免あさりませお慈悲ゝゝゝゝとほにづらかく」公儀の強大なるを知り目前の嚴罰の怖るべきを知れバなり、但し公儀の重んずべき所以を知れるにはあらず、彼れの公儀を恐れ士人を怖るゝは獸類の獅子を恐るゝが如く、一層強大なる腕力として恐るゝ也、法律を法律として恐るゝのみ、正義の掟として重んずるにはあらず、是もまた未開人の心あり、此故に白刃頭の上に臨まんとすれど、尚分疏すべき言葉を知らず、法律を正義の掟とせで、只管に強大の腕力と思へる故に詫とも怨さるまじと思へバなるべし、腕力の眼中には理も非も無しと思へばあらん、されバ彼れ徒らに逡巡畏縮す猶猛犬に出あひたる小狗のごとしされば又猛犬は已に去りたれど尚「恍惚」と「醉ひたる如く」「夢か現か」をも辨へず逃去らんといふ分別もです「南無三叔父の下向に切らるゝ筈、切られたら死なう死んだら如何しよと心は沈み氣は上もり逃てくれう」とやう〳〵氣付き「かけいで」おがら「ハヽアからういけば野崎、大坂はどちらやら方角が無い此方は京の力彼の山は闇か

但比叡山か何方へいたらば逃れうと眼も迷ひうろたへ」たる、是無智の本体なり一たび心上ずりては「斬らるれば死す」といふ自明の原理だに忘れ去らんとす、人間の道を忘れ親子の本分を忘れたる其筈なり、又お吉が意見を馬耳の風と聽流したるも其分にて、賣女に對して破約を怒り、千萬人の翫物を我物顔に取りて引すへ「馴染の河與が借るからは動かせぬ」と罵りたるも其分あり、されば又「わしの心は誓文かうぢや」と只一言の氣休めにいだきつかれて大に「悅喜」し「忝いと延びた顔」に癡愚の本性をあらはし、幾千人の見る目をも恥ぢず公道にて人と泥じあひし、ます〳〵狂愚の相を現ず、皆是彼れが眼中に私情の外、物無きに因るなり、遙くとも其情熾んなる時には義理も無く人情も無く親も無く母も無し、其際彼れをして恐れしむべきものは只一の強大なる腕力あるのみ、されば又濁血一たび沸かへりては、彼れ法印を見ること蟲けらを見るが如く、義父を見ること奴僕を見るが如く妹を見ること出來損ねたる機械を見るが如く、實の母に向ひてすら謬信者の子の不信者がはじめて神佛の偶像に對するが如くす流石に遺傳と習慣性とによりてたゞちに唾棄するをたゆたへりと見ゆれど早晩奮起して粉碎にせんとするものに似たり、其眼中實の母すら無からんとす、げに子を見るこ

と親にさかふ母親お澤奮然として「エヽもぞかしい德兵衛ぞの石に謎かけるやうに口でいふて聞やつか」と涙を呑みて罵りたるこれは夫への義理もあるべく女性の一時の激語にてもあるべきがまた與兵衛を知悉したる言葉あり、此賊兒を窘めんとせば其方唯一ッより外に無し、故に母親は激語して曰く「出てうせ〳〵うぢ〳〵ひろがば町中寄せて追出すと又おつとつてつゝばるれうこは「怖い目知らぬ無法者」をも動かすに足りぬべし、此激語に伴へるおうこそアルキメヂーズの損扞(リーヴァル)なれ、さすがに與兵衛も「町中」といふ強大腕力にぎよつとして「吐胸つきたるけでん貌」宛然覩るべし

以上只我おるとを知りて義父おるとを知らざりし與兵衛の情態と履歴とあり

「上の巻」野崎詣の條に「野崎參りの屋形船卯月中ばの初暑さ末の閏においぐりてまだ肌寒き川風を云々」といふ文句ありて「中の巻」太兵衛の言葉に「跡の月御主人の供して「森右衛門が」野崎參りの折ふし不道者の與兵衛も參り合せ」といふ文句あれバ與兵衛勘當の月は閏四月なること疑ひ無きに似たり、現に同じ巻の結句」に「見れぞも餘所の繪幟に影も藏れて三重」とあれバ恐らくは四月の三十日ぞにやあらん、繪幟とは來ん節句の用意に逸早くもなびかせたるものをさせるなるべし又下の巻七左衛門がお吉の法事を營める時の言葉に「誠に死んだ亡者が物語り四月十一日我等夫婦野崎參りいたせし日云々」といふ文句あり上の巻の出來事は四月の中旬あることとます〳〵明あり扱「下の巻」の初に「ふきなれし年も久しの蓬莒蒲は家毎に幟の音のざはめくはおの子持の證かや」といふ句ありて「五月五日の一夜さを女の家といふぞかし」さては又「此節季越すに越されぬ河内屋與兵衛手筈の合はぬ古袷」又は「掛も十ヲに七左衛門大かた寄て中戻りァヽ思ひの外早ひ仕舞ひ內の拂ひもさらりとしまひ」又は與兵衛の言葉にも「七左衛門ぞのはいづ方へ、定めて掛も寄ましよ」おぞいふ文句あれば當時の習慣は五月の節句にも諸拂ひをおせしことゝ見にたり、即ちお吉殺しの月日は、五月の節の前の夜あること、たしかあり、森右衛門が廓にて與兵衛の事を探り「五月の節句前か後か」といひ「只今參りがけ櫻井屋源兵衛へも立寄吟味いたせり五月四日の夜大金三兩錢八百請取たとある云々」といひ、又花屋の花車が「わたし方へも五月四日の夜に入て大金三兩錢壹貫文」といへるなど合せ考へばます〳〵明かなるべし

又思ふに與兵衛勘當の日は五月の二日なるべくや與兵衛が義父に向ひて

いへる言葉に「けふは二日際といふて明日明後日萬事をさし置きけふの中とあるは跡々の月といふべきを大概にいひしものにや若し勘當の日を二日とすれば四日間と假定して解釋したる下の評論は誤れり

案ずるに勘當の月日を假に閏四月三十日とすればお吉殺しまでに日數(勘當の日を二日とすれば其間わづかに一日のみ)四日の間あるべし此間與兵衛はいづこにありけん、彼の七左衛門かたにてお吉が三十五日の佛事營みける折に偶然鼠の取おとせる「半切紙に一ッがき十匁壹分五リン野崎の割附は殺しの夜與兵衛が取落してゆきしものならん、而して其割附に五月三日といふ日附あるを思へば、殺しの前の日に例の色友達刷毛の彌五郎皆朱の善兵衛」などにあひしことありと見たり、德兵衛がお吉に向ひての述懐の言葉に「聞けば(與兵衛め)は順慶町兄が方に居るとやら」とありて綿屋小兵衛が借財を與兵衛に促る時の言葉に「順慶町へゆけば本天滿町親御の所へといはるゝ」とあれば其居所は實兄太兵衛の許なるが如し、然るに兄の家にありける間の事蹟は作者悉くこれを陰にし暗にもほのかにも見せざれど此黒幕の中に主人公が主觀

の第一段變化はありきと思はるゝ具にいへば彼れの心狀に一大變動ありきと見ゆ、茲に少しく其理を辯ずべし

「上中二卷」に見にたる與兵衛は我あるを知りて他人あるを忘れたる人間なりしに「下の卷」に見にたる與兵衛はたしかに我外に義父あることを認めたり、されば二百目の借錢を小兵衛に促られやう〳〵なだめて歸らせし後一錢の心當もなきに胸を痛め「茶屋の拂ひは一寸のがれ、ぬきさしならぬ此二百目」と思案に苦める心の底に我以外の一物ある明かなり、何となれば茶屋の拂ひこそ直接に彼れが身の苦樂とはなれ、件の二百目の借財は、五月五日を限り、義父の印判を盜用して、證文の面は一貫目正味は二百目といふ約束にて借入れたるなれば「五日の日がによッと出ると二百目變じて一貫目となり債主は直ちに德兵衛に逼り其返濟を促がすべきものなり即ち義父の難義とはなるべきも與兵衛の難義とはならぬ負債なり、義理を知れるものならば斯かる借財をこそ八しほに苦しく思ふべけれど「上中の卷」に見にし與兵衛は無形の苦痛を知らぬものなり、嗚呼作者こゝに至りて主人公の性質を打敗し、行爲の一致を失へるか何となれば若し與兵衛が「前の卷」に見にたる如き我の外に親あることを知らざる沒義理沒人情の

無法者あらば只管まづ茶屋の拂ひをこそ氣にはせめ云かるに「茶屋の拂ひは一寸のがれ」今濟さずとも忍ぶべしといふは其本心我一身の利害を思へるのみにあらで親に對する義務を思へること明かなり、與兵衛が義父を認め、義父に對する義務を認め、腕力の外に恐るべきものあることを認めたるや明かあり、是豈主人公の特質の前後矛盾せる證ならずや、さすれば作者此に至りて主人公の特質を打敗し行爲の一致を失へりといふべきか

將た勘當後四日間に於て主人公が心狀に一變動の起りしか

假に後の假定をもて正しとせば如何にしてかゝる主觀の變化の起りしか

與兵衛がお吉に向ひての述懷に「跡の月の廿日に親仁の謀判して上銀二百目今晩限に借ました……手がたの面は上銀壹貫目借た金は二百目云々」といへるを見れば此借入は四月廿日にして勘當以前なりしこと明かあり人或は勘當の日に與兵衛が叔父の名を使ひて三貫目の金を義父よりあざむき取らんとせる條と照し合せて彼れが「際」といふて(も)明日明後日萬事をさし置きけふの中三貫目とゝのへて渡さつしやれ」といへるは此借財の事の胸にある證據にて彼れが返濟に苦心せるは勘當後にはじまれるにあらずといはん、非なり、勿論與兵衛とても借財に苦心せざりしにはあらねど彼の折と此折とは其苦勞の鹽梅に相違あり彼の折は謀判露見しては我爲に不便宜あらんと思へる故に返濟に苦勞せしあり、親の爲を思ひてにはあらず必竟彼れが三貫目を得んとせるは私欲の小使に要する所あればにて、其證據は同じ時父に向ひて「おかちが病より何より大事がある、其當座に母ぢや人にはいふたれど」と前置きして叔父の事をいへるにて知るべし、其當座とは野崎詣の當座をいへるなりとすれば、正に是四月中旬の事にて二百目を借入れける以前の事なり、蓋し其頃與兵衛の身にとりて大に金の要る事のありしならん然るに母親分別ありて其時「ぬく〳〵とだま」されながら流石に義理の柵ありて「つか〳〵と親仁殿へ話」さゞりければこそ與兵衛小使錢の乏しきに困み廿日に及びて小兵衛より彼の二百目の金を借入れしならめ、さすれバ三貫目の無心は二百目の爲に起りしにあらざりしこと知るべし、若しまた眞に借財の方を重しとしそれが爲に親をあざむかんとしたりきとすれバ三貫目といはで二百目に對して一貫目といひしを見れば茶屋の拂ひ遊びの小使錢などこそ專ら被れが心頭にはありけめ、勘當以前には義父の難義なといふ觀念絶ておかりし事明かなり

然るにそも如何にしてわづか一月の間に彼れ忽然と義父に對する義務あることを知識するに至りしか、是難問あり、近松の此作を片輪として棄つべきか將た然らぬかも此難問一つに繫れり

案ずるにhopeは人間を活し又は半死せしむ活すとは現在の死地より人間を救ひて未來の榮にを望ましむることをいひ、半死せすとは人をして執着の絆を絶つ時を失はしめてよもやの霧中に迷はしむる事をいふあり、基督教はhopeを利用して教を說き、佛教はhopeを打破して一切空を說き迷執半死の餓鬼を救はんとす、共に其理妙あらぬにはあらず、但人間通常の例に照せばhopeは人をして半死の餓鬼とおらしむること多しそは常人のいふhopeは基督教のhopeと同じからねばあり、〔上中二巻〕に見にたる與兵衛の如きは此俗に謂ふhopeあるが爲めに迷執の餓鬼とおりしものあり彼れ義父を侮り母を侮り專恣放逸おのが欲する事として成らざること無きゆゑに未だ曾て失望といふ事を經驗せざりしあり夫れ失望の解は時と人とによりて差あれども與兵衛の如きにとりては失望は却りて迷執擴除の媒あり依賴心を去ればあり「可愛兒に旅をさせよ」といふも此理なり凡そ我が一身あることを知りて他あることを知らざるものに他あることを

を知らしめんとせば彼れをして眞の一本だちとおらしむるより外に方無し、愚人を常に暖爐ある室中に居らしめば彼れはほと〳〵暖爐の暖きをさとらん「無くてぞ人の戀しかりける」とは無明のはじめて明くおりし時の誠あるべし「必需は發明の母」とはひとり智の上にのみいふことかは德性上の變化も零仃孤立して後に起ること間々あり古へより大事の思ひたちの屢々逆運、失意、失望、蹉跎の際に萠し賴の綱の切れよもやの霧の晴れし時に起りしも皆此同じ理おるべし

案ずるに與兵衛は其經驗の幼稚おると小兒に等し、彼れは恐らく打叩かれし事おかるべし、失望の味はひは一たびも知らざりしおらん其母親に折檻せらるゝやいへらく〔此與兵衛が爰を出て何處へ往く所がおい〕と是何等の無心無邪氣ぞ二十三才の放蕩兒の詞に似ずして八九才の頑童の我儘に似たり、勘當の何ものたるを會せざる事明かおり、蓋し彼れ我行ひの非おるとを知らねば、夢にも此家を逐はるべしとは思はず逐ひだすといふ事は意見といふものゝ符牒の如くに思ひしおらん此の故に實際逐出さるゝに及びては〔ぎよつとして吐胸つきたる〕如何にすべきと〔けでん顏〕したる自然おり其時の彼れの心は夢に夢見たる如く

途方に暮れ進退に迷ひ彼の野崎にて叔父に懲らされし時の如く方角を失ひ去就を知らず茫然また惘然「辻に立たる姿」いかに哀れおりけん、甘き親を侮りて虎の如き頑童は其甘き親を失ひて悄然たること屠所の羊の如し、今宵はいかにしていづこに夜を明さん今宵は「色友達」にすがりても兎も角もせん明日は何とせん只目前の苦樂を知りて未來の苦樂を知らざりし與兵衛も此の時に及びてはじめて未來といふことに心付きしおらんさはれ當日は目前に困あれば深く未來を思ふに及ばで或は怒り或は罵り親を怨みつぶやき〳〵家を離れて其夜は皆朱が許にてや明しけん刷毛が宿にてや過しけん兎に角に友達の許に一夜を過せしおらん何とおれば前々月の割附が此勘當の翌日ある三日の日附にて拂はれたるは其間あまりに隔たり過たり、思ふに二日の夜友達にあひて嚴しく催促せられしにやあらんさて僅に十匁壹分五リンといふ些少の割前に苦められるゝに及びて彌々勘當の味を知りそめ、友達の親に似ぬことをも知り明日より後はいかにすべきといふ心配も募りしか懷に一錢の貯おし頭を下げ手をすりて詫ぶれど聽かれざる苦しさにます〳〵勘當のつらみを知り一生人に詫言いひし經驗おき與兵衛おれど爰に詫言の必要を知りて

まづ兄の許へ去ばれゆきて詫言の手初めをや試みし是れを與兵衛が心狀に生せし第一の主觀の變動とす

去かるに實兄河内屋太兵衛は「中の卷」にて見にたる如く頗る義理堅き分別男おり、現に義父を諫めて「じたい親仁さまがいだしてのけさしやれ」死にをらば死に次弟徹塵愛着は殘らぬと如來かけての母の言分からは何の遠慮勘當おされ」と切にすゝめし口もあれば勘當うけて來れる弟を義理にもおとおしく我家には入れざりしおるべし、不義を見て嚇たる君子の怒三分、義父へ對する義理六分、世間へ對する義理壹分、合せて十分の兄の折檻はさすがに無法者の骨身にも忘られぬ程に徹にけんいでや此與兵衛、蒙昧頑愚にて其濁血の沸かへりたる時には、ほど〳〵母をさへに忘るれやさすがに習慣と遺傳とにて母の母たるを知らぬにはあらずされば其兄に對するにも情沈みたる時には母親に對するに似たるものあるべし加ふるに兄は腕力といふ一原素を加へてもてり、與兵衛の心中兄を恐るゝ情もあるべし況んや進退全く谷まりて第一主觀變遷を經たる時に於て「勘當の苦痛を覺りたる時に於て」實兄の折檻にあへるをや、思ふに血涙と鐵拳と雨の如く下れる此友愛の折檻の中に與

兵衛が主觀の第二變動、即ち第二の心狀の變化起りしあるべし第二の變化とは我行ひの非ありしことを覺りて義父に對する義務を意識せる事是也

綿屋小兵衛の言葉の中に「順慶町へゆけば本天滿町親御の所へゆけば追出した爰には居ぬとある」といふ文句ありさすれば五月四日の夜は兄の許諾を得て順慶町を立出たること、幷に親の許へゆくといふ口實にて兄の居る方を立出たること「親御の所へ」とある『へ』の字に明かあるに似たり、蓋し三日より四日へかけての折柄と剛意見とにて悔悟謹愼の色いと著るく見れたるが故に兄もやう〳〵心折れ、與兵衛が叩頭謝罪して『詫言の爲に義父の許へゆきたし』といひいでたるを實とし斯くは許して出し遣けるにや、尤も『詫言の爲に云々』といひ出きとは評者の想像なれど前後の續きより臆測するに若し與兵衛の心中に前にいへる如き二段の主觀的變動ありきとせば、彼れ第一に二百目の負債の將に日限に逼りたるとを思ひいだし、如何にすべきかと煩悶きしあるべし、無形の不孝を悔ゆるよりも、有形の不孝を悔ゆると與兵衛の如き性資の者には最初あるべし、去かれども斯くと打明て兄に語るべきにあらねば表は詫言に托して兄の家をたちいで、兎や角と工面に困み、久しく途中に彷徨し遂に志を決して手島屋を訪ふに及びしならん、此時の與兵衛は一日前の與兵衛にあらず、勘當の苦しきを知り、友達の親に似ぬをも知りたり、兄の剛意見肝に徹えて我行ひの非ありしを覺りたり、義父德兵衛と舊手代德兵衛とは同體異資格なるべきを意識し、義父の慈仁の鴻大あると其恩の高きとを感せり、扨くとも謀判して義父に難義をかけんとの忍びがたき大罪たることを感じたり、恐らくは此有形の不孝の罪を過去の不孝中の最大あるものと思ひしあらん、此に於てや熱血性男兒の癖として一意此負債を濟さゞる可らずと焦心煩悶して、深く前後を思量する遑なく、此不孝の借錢を濟すこと叶はずば死ぬより外に分別無しと譯もなく輕々しく死を決し「一生さゝぬ脇差」さし死ぬか生るか「今霄こしりの詰りの分別」手島屋が返答次第にて定めんと思ひつゝ彼家の門に立寄りけん然るに其門口にて端無くも債主小兵衛に邂逅しいよ〳〵絶体絶命の實を覺りたれば金の必要を感ずることます〳〵切なり「ぬきさしならぬ此二百目有所にはあらうがな世界は廣し二百目あをは誰ぞ落しさうなものの」と徒に天を仰いで僥倖を禱るに至れることと彼れが性情の必然にて遺せし他人の難澁なをは想像するに遑なし偏に我と義父とあるを知りて他人あるとを忘れたり嗚呼與兵衛の如きは憫むべし彼

れは他人あるを知りて他人を虐殘せんとするものにあらず、元より他人あることを知らぬなり、彼れ兄の敎訓によりて漸く義父の敬はざるべからざるを知りたれど未だ人情をも義理をも解せざるあり、畢竟與兵衛の義理とは彼れ未だ夢想せざるあり、畢竟與兵衛の義理のみ世間(人間)に對しての義理は知り得たれど未だ平等の義理あることは一を知りて二を知らず差別の義理を知らず、譬へば愛國の美德たることを知りて只管に保守の策を講じ未だ宇宙を愛するのとの美德たるを認めざるものゝ如し夫れ一を知りて二を知らず差別を知りて平等を知らざるは歸納經驗の乏しきより生ずる自然の果あり豈ひとり與兵衛を咎めんや

德兵衛は平等に拘らひて差別を辨へず、其子は差別を知りて平等を知らず、而して親の失も舊主人といふ一個人に泥みて生じ、子の失も義父といふ一個人に泥みて生ず共に其見る所の狹きより起れり、差別平等を双つながら調理せんとせば眼まづ大宇宙を看破せざる可らず

手島屋にての慈母として義父との問答は人情の極致、一篇の精髓、淨璃理の壓卷、其子ならぬものもこれをきかば

"Turn his color and has tears in's eyes."

若しこれを舞臺に登さば

"Would drown the stage with tears

* * * * * *

Make mad the guilty and appall the free,

Confound the ignorant, and amaze indeed

The very faculties of eyes and ears."

與兵衛無賴なりと雖も已に二段の主觀化を經たり、至慈ある父母の述懷を洩聞きて豈感動せざらんや木偶人と雖も嗚咽すべし況て彼は已に義父の恩を知り悔悟の妙光に照らされたり、豈此慈悲に感動せざらんや、已に感動せば氷の如き眼にも熱湯の涙あかるべしや「さきにから門口に蚊にくはれ長々しい親達の愁歎聞いて涙をこぼせし」とは其言甚だ粗撲なれど其撲にして粗ある所却りて至誠の言葉たる證あり蚊にくはるゝ有形の苦痛を忍びてかゝる無形の苦痛に泣きしは彼れが一生の初經驗あるべし二人の親の詞は其「心魂にしみこみて悲しく」前には此金調はずば「自害して死うと覺悟し」懷に差脇さしはさいて出たれど

も只今兩親の歎き……を聞ては死んで此金親仁の難義にかくることと不孝の塗上身上の破滅思ひ廻せば死ぬるにも死なれず生きてはゐられず」絶体絶命進退維れ谷まり「詮かたなさ」に初志の如くお吉に頼りて二百目の金を借らんとす

其情憐むべし

お吉は頗る人情深き女なれども「年もまだ廿七」とあれば未だ人情の奥を知れるものにあらず兩親があづけゆけるちまき一わ錢八百、これを與兵衛に與へば彼れ案外の場に駭き歡ぶならんと思ひもうけき「こなさまは仕合せな、後ともいはずよい所へござんした是此錢此八百ちまきこな樣へやれと天道からふりましたと勇みていふ聲聽くが如し然るに「與兵衛ちつとも驚かずこれが親達の合力か」と平然と問ひかへすお吉まづ案外を感じたりさる程に與兵衛は膝を進めて一伍一什を洩聞きつと語り「只今より眞人間に成て孝行を盡す合點なれども肝腎のお慈悲の錢が足らぬといふて親兄にはいはれぬ首尾爰には賣溜掛の寄金もある筈新でたッた二百目ばかり勘當のゆる迄貸して下され」と足らぬ理由はいはで實然に賣溜を貸せと云ふお吉二たび案外を感じつ

此時の與其衛の心を分析すれバ彼れ一圖に二百目を得て義父の難義を除かんとす我情懷を詳述するに遑あらし即ち情の爲に理性くらみてこゐいりたる理由を辨ずるに遑あらし萬事獨呑込獨合點の趣あり「孝行盡す合點」といふ言葉と「肝腎お慈悲の錢が足らぬ」といふ詞との間には大矛盾大撞着ありて枘鑿相容れざるを與兵衛みづからは知らずさて又「新でたッた二百目」とは時にとりて尤も不都合の詞にしてこは「心計が廣袖」の肌癖尚ぬけぬ故にて是非あき失言あれどかゝることは彼れが腸を探りて後にこそ知らるれお吉はいかでさ思はん「足らぬ」と「新でたッた」とき丶てまづ呆れ「それ〳〵」奥を聞うより口聞け、那邊に心があをッた僞にも金貸して呉れとはいはれぬ義理、世間の義理を欠いても金借て惡性所の拂ひして跡から段々いかうでおを」と眉つりあげて辱しめたる自然へ想ひいだしいつぞやの野崎參り衣物洗ふて進せたさへ不義したと疑はれ言譯に幾日かゝッたやら喃うとましやゝ〳〵」と憤として背向にありたる姿宛然たりてかして下され」と強談す、是無法の骨頂の骨頂也、但し與兵衛は去か思はず何

とおれば彼れは世に我と義父との難義のいとつらきを意識したれど不義といふ名義の他人といふものにとりていかばかり難澁あるべきかを感せざれば也返る金あらば貸してもよさうなものと思へり

押問答再三に及びてお吉斷々と動く色あく「女おと思ふておぶらしやると聲たてゝわめくぞや」と叱斥す「嚇らしやるか」といふ聲逆上せたる與兵衛の耳にも入りはじめて我言信せられざるかと感じ入要の理由を語らざる可らずとさとり「ハテ與兵衛も男、二人の親の詞が心魂に染込で悲しいもの、嚇るの侮るのといふ所へゆくことか、何を藏しませう跡の月」と子細殘さず打明けたる、おのづからある述懷也「有金たッた二百目で與兵衛が命をついで下さる御仁德黄泉の底まで忘れうかお吉さま何卒貸して下され」といふ、見るべし前に「たッた」といへるも「心計が廣袖」の肌癖のみにはあらで彼れは我命に對していへるあり一人の命の代とせば二百目は「たッた」あるべし彼れに決死の分別ありしや明か也、さすれば此時の彼れが聲と彼れが「目の色」とは悲絶ありしあらん、愛憎つかせしお吉あれをもまた少しく心動き「さうした事もと思ひ」たるまゝに人情の自然あがら「かねての僞計是もまた其手よと思ひかへして、フウまが〳〵しいあの僞わいの……

あらぬといふてはきつうあらぬ」と排撥けしもまた自然の沙汰也、そは與兵衛の述懷金子要求の前に出ずして要求を斷られたる後に出たれば口實とのみ聞にしも當然也、さもあらばあれお吉は性來情深く且は女氣の優しさに僞あるべしと思ひつゝも流石に棄がたき思ひもあれば「油取かへて」といはれてい言葉やさしく諾きて「消ゆる命の燈火は油はかるも夢の間と知らで升取り柄杓取り」與兵衛の只あらぬを認め心元なく思ひしにもよるべし

の述懷金子要求の前に出ずして要求を斷られたる後に出たれば口實とのみ聞にしも當然也、さもあらばあれお吉は性來情深く且は女氣の優しさに僞あるべしと思ひつゝも流石に棄がたき思ひもあれば「油取かへて」といはれてい言葉やさしく諾きて「消ゆる命の燈火は油はかるも夢の間と知らで升取り柄杓取り」與兵衛の只あらぬを認め心元なく思ひしにもよるべし

與兵衛の胸は二百目の必要に塞がり血この爲に上づり心この爲に顛倒す、二百目を得ば五日の旭光を見ることを得べし、得ざれば今霄が生死の瀬戸「與の戸棚に上銀五百目餘り」恐らく尚別に若干の貯へもあるべし其金たッた二百目だけ欲しや、さりとてそを借るべき便は無し、夜は更る、明日に思尺、五日の旭が「によッと出」ば「親仁の難義」身の破滅兄には知らずの女め、貸さずばよし、ぞうせ死おねばおらぬ身此奴殺し金を濟し男を立てゝ後に死おんム、然ぢやと咄嗟の分別、濁血湯の如く沸かへり、心の鏡黯濛々、遂

に殘忍の白刃を揮ひて熱油ほとばしる活地獄の慘劇を演出す、何等の慘狀ぞ、ア王歯をむきいだして笑ひ、サタンとんぼがへりして欣び舞ふ、我と親とが無透明の目かくしとおりて彼れ眼中に毛頭の人情をも見る能はず、即ち曰く「ヲヽ死ともおもい筈尤もこおたの女が可愛い程己もおれを可愛がる親人がいとしい金拂ふて男立ねばおらぬ」と、されど與兵衛も人あれば幾分の同情あきにはあらず「ヲヽ死にともおもい筈尤」とは此の同情の影あり只我と彼とを比べて我を天とし彼れを地とす彼れは他人をもて遙に我よりも劣るものとせり與兵衛がお吉に於ける同情は殆ど常人が犬猫に於ける同情に類す「心で御念佛南無あみだ」とは人を殺す時の言葉にあらず

女已に息絶にたり與兵衛の心局瓢然一變す、作者が絶妙の筆其狀を叙すまた那邊にか分析の筆を着けん、本文に就きて不可分析の妙を默會せよ

日頃の強き(も)死貌見てぞつと我から心もおくれ膝節がたくがたつく胸を押さげくさげたる鍵をおッとッて窺けば蚊屋のうちとけて寢たる子供の貌付さへ我を睨むと身も顫へば伴てがらつく鍵の音頭の上に鳴神の落ちかゝるかと膽にこたへ戸棚にびッたり引出すうちがい、上銀五百八十目宵に聞いたる心當ねぢ込みねぢこみ懷の重さよ足も重くれて薄氷踏む火焔踏む此脇差はせんだの木の橋から川へ、沈む、來世は見にぬ沙汰此世の果報の付時と內をぬけ出一散に足に任せて

嗚呼何等のおそろしき活畫ぞダンカン王を弑して後のマクベスの述懷と頗る相肖たり「がらつく鍵の音」いかに百雷の一時におちかゝるが如く轟き "all the house" に鳴渡りけん殺す時には「心でお念佛南無あみだ」とつぶやきしも已に殺し了へて鍵の音雷と轟き when he "had most need of blessing" how "Amidabutsu' stuck in his throat?" 其薄氷を蹈み嶽を蹈むや how "every noise appalled him?"

たゞし與兵衛とマクベスとを比べば其意識上に大きある相違あり、マクベスは君臣の義を解し人情義理を解し我弑虐の大罪たることを意識して其君を弑殺す故に其怖るゝや意識の中より與兵衛は然らず人情を知らず義理を知らず人を殺すことの大罪たるを知らざるにはあらねど其何故に非あるかは明かに知らず故に彼れの怖るゝや死貌を見たる自然の刺撃あり即ち無意識の中より生じたる恐怖也彼のマクベスは判然怖るべき故を知れり故に現場を離れても心神惱亂し顏色土の如く血に染める我手を見て

"What hands are here? ha! they pluck out mine eyes.
Will all great Neptunes ocean wash this blood
Clean from my hand?"

と戰栗苦叫す、蓋し其怖るゝ所無形の大逆にある故に一滴の鮮血だに此大逆罪の符號とありてマクベスの全身を震蕩するに足るあり、與兵衛は然らず、彼れの怖れは無意識の刺撃あり有形の死貌の怖ろしきを見つる果あり、故に闘の外にいづれば恐怖已に其半を減ず、彼れは無形を怖るゝものにあらず、沈む來世は見ぬ沙汰、此世の果報付時と內をぬけいで一散とあるを見ても知るべし

「さきにも待ながらこちからひたと行通ふ道の犬さへ見しる程うつゝぬかせし河內屋與兵衛、小菊にあふせをたのむの雁よ新町の、花を見すてゝ蜆川茲の花屋にたぞりよる」とあるは何月何日の事にやあらん其次に見にたるお吉が三十五日のたい夜よりは遙くとも一二日前日の事あるべし何れにしても殺しの日より一月餘り經たる事明かあり

與兵衛は金を得て借財を爲せしや否や本文には何の噂もなけれどこれは一定すませしあるべし只義の爲に死あんとまで決心したりし與兵衛が人を殺して

男をたてゝ後尚れめ〳〵と生延び而も新町蜆川と遊び戯れて日を送ることゝ矛盾のやうあれど彼れが性質の上より見ればさもあるべき事あり、前にもいへる如く彼れの義といふは義父一人へ對しての義あれば不義の借財を濟し了ふれば義務の肩はぬけたりと信せんとす一定也、彼れは負債といふ有形の物を濟すと一能はすば死あんとこそ思ひたれ無形の義理の爲に夢にも死あんとは想はざりき元來彼れの悔悟は失望究困により崩し失望究困は錢無きつらさより崩せし故に錢を得ては心また變るべし加ふるに彼もとより法律の怖ろしきを知りてあれば人殺しの事露見すれば命無きことをも知れり忘れてもれ吉を殺せし事をば目貌にはいだすまじと決心して度胸を定めたる趣は花屋の花車が油屋の女房殺しを芝居にするげあと噂しても動せず大へいそらさぬ貌して手島屋の法事に臨み「殺した奴もまだ知れず氣の毒千万、したが追付しれませう」とえらしく、七左衛門が圖星をさし妻の敵と名宜かけても「アゝ七左衛門れうじすまじ」とそらとぼけたる度胸に見にたり、世なれぬ與兵衛に此度胸と見れば不思議あるに似たれど必竟は世あれねばこそ此度胸あるあれ俚諺に謂ふ盲蛇にれぢずとは茲也人情を知り義理を知り良心もあり善

惡の分別も明かにてこそ我も弱れ、意も縮め、我より外を知らぬ者ばかり猛きはおし、與兵衛の如きは此時までも我行ひの何故に大逆あるかを知らず露見せば罰せらるべしとはよく知りたれど何故に惡しきかを明かには云ひらぬ也

終に與兵衛が進退極まり天網の其身を掩ふに及び叔父森右衛門といふ善知識あり此大絶望の瀬戸際に大慈悲の引導をす、無明の暗忽然と散し眞如の月光、明皎々たり彼れ即ち覺悟の大音上一生不孝放埒の我あれども一紙半錢盜みといふこと遂にせず茶屋傾城屋の拂は一年半年れそあはるも苦にあらず新銀一貫目の手がた借り一夜過ぎれば親の難義、不孝の咎勿体無しと思ふ計に目付人を殺せば人の歎き人の難義といふことにふつゝと眼つかざりし思へば二十年來の不孝無法の惡業が戸主とおつて與兵衛が一心の眼をくらまし御吉どの殺し金を取しは河内屋與兵衛仇も敵も一ッ悲願南無阿彌陀佛と叫ぶ憐むべし是は彼れがはじめて人間に我の外に人あるを知り義理人情の止みがたきを知り善惡の流行因果應報の怖るべきを知れる時の言葉也彼れが有形の世界の外に無形の世界あるを見たる時也嗚呼此稚蒙兒、其行ひは惡むべし其情は憫むべし與兵衛は父母に勸當せられて第一の失望を經驗し此時はじめて義父の仁、實母の慈

を認めたりこれ彼れが無形を意識せる初めあり

天網下り命究まり彼れ更に大絶望を經驗す此時はじめて世間の義理、人間の情理を解す是彼れが大無形を意識し人間に幽明二界あるを認めたるの時なり

總評　此作を讀みて感し得たる所は無限の私欲と有限の娑婆（義理人情の浮世）との軋轢あり「旨我（ブランインドセルフ）」と「自然（ユアネチユア）」との衝突也世間を知らぬ我儘者と世間との撞着あり主人公河内屋與兵衛は天上天下我身あることを知りて他人の身あることを知らず眼耳鼻觸の上には他人あることを意識したれど德義上には他人あることとを知らざるものありされば我一身の欲の遣方無きを知りたれど世に義理人情の止みがたきことを知らず又法律といふ形あるもの、怖べきをば知りたれど道德といふ形あるもの、守らざる可らざるを知らず、此故に情火ひとり燻んにて分別の光明は秋の螢よりも薄く熱湯の如き血汐は沸かへれど冷水の如き理性は初めより濁りて澄ることあし、正に是一個の多血的肉塊男兒あり、心猿鎖を斷ちて何れの處にか逸し去り意馬絆を切りて無碍縱橫に狂奔す、されば或は人情と撞着して之を蹂躙し或は義理と衝突して之を蹈碎きゑばらくは狂ひに狂へりといへども竟に「自然」といふ金剛壁に觸れて五体八裂し情火八散し滿身

の濁血瀑下雨瀉し了り始めて浄水的理性の泉逆然と沸のぼり、明月の如き靈光皎々と照射するにあひ、忽然血清み、飜然雲霧散じ、天上天下我一身の外に億萬の他人あることを悟り、我欲の遣方無きと同時に義理人情の止むべからざるを悟り有形の制裁の外に無形の制裁あることを悟り、世に善惡の流行せることを悟り因果應報の止むべからざるを覺悟すること

近松が時代物

嘗て寺山星川君より番ひよしやく束をまさ得遂げぬ心苦しさ此ごろの暑さも我身ばかりの夏かと一歷よおぼゆて一日も早く此のつらさ逃れたく手文庫さかさまよくつがへ〳〵て種々書さーたる草稿をあれかされかと求むるうちふと目よとまりしは去々年の暮よ筑摩川、みろさざい、月の中人百生の爺、奥山人などいふおかしき人達を集へて何如に近松研究會といふ者をわれ〳〵率先して起さばやといひいでける折おのれ例のよくも考へでろが手はしめよとて走り書きー〳〵さる漫評の筋書なり當時の素志よよれバ時代物も世話物も一切詳密に解剖分析ー中にも別きて傑作と思はる〳〵ハいと長々しく評釋すべしとなりき往ぬるころ『日本評論』にいだせし『油地獄』の評又ハ『後の月影』にのせー梅川の評などハ皆其折の遺物なりさてまよさまで秀でもさるとも思ハれぬは只評言の筋書のみを作りて悉しきハ口上にていひ添ふることゝ

して會員よ示しき下に舉ぐるハ件の筋書の二三なり今見れバ餘り大づかみよ言ひ放ちさるところ多くて我ながらかたはらいさくつやく〳〵公にすべきものとは思はれど城南評論社の催促のいと嚴しきを如何にせましさらば近松の落葉掻集めさる此の破籠をさに貢の中に加へられてよとて

（『城南評論』所載）

世話物にてはほゞ性情悲劇の正脈を得たりとも見ゆる巢林子が時代物を作りては殆ど別人のやうなることいぶかしけれ世話物を見れば人物主因となれるが如きに時代物はおしなべて事の變化を主とし人物多くは人形なり世話物の人物は特質の中に普通性をも含みたりさるからに間〻一個人にしてかたはら人間をも兼ねたりと見らるゝに時代物の人物は大概或る無形の性情の權化にして大づかみに謂ふ模型たるに止まれり悪しくいへば時代物の人物は或は短慮一徹の勇、或は未然洞察の智あるといふ質に肉を附け形を與へ假に云爲せさせたりと見えて其が心ざま極めて單純あり然るに世話物の人物は紙治となり茂兵衛となりて忠兵衛となり清十郎與兵衛となりて現いれたる所は特殊あれど其智情意の作用はほゞ人間の普通性に去たがへるものゝ如し拗くとも彼の時代物の人物の譯も無く賢に譯も無く愚なるが如きとは同じからず加之時代物に

ては事變といふ事變大かたは人心以外より來り突如と生じ忽焉と滅し剩へ最も大切なる大慾歎の因緣即ち彼のカタストロヒーの由來すら偶然の災厄に原（もと）けるが多しされば人と事との間に因果の關係甚だ疎にして吉凶禍福幸不幸盛衰榮枯の變化はおしなべて宿世の命運といふものに似たり世話物にも宿命の沙汰と解釋せらるゝ禍福の變あきにあらねど宿命說を離れても解釋の附くところが時代物との相違あり作者の本意はそのいづれにありしかいざ知らねど予は世話物の傑作の宿命說を離れても解し得らるゝことを信ずるものなり玄かるに時代物の作に至りては此解釋の自在無し必竟世話物にては人物も人物の上に見にたる因果も且つ特殊にして且つ普通あるが如きに時代物にては先づ其の人物は或る特性（キユアリチー）若くは特質（カラクテリスチック）の權化あればほゞ其質の普通性だけは備へたれど漠然茫然として廣きばかりにて捕へどころ無し即ち死せる模型（タイプ）たるに止まりて活きたる特殊の智情意なしさて又其の人物の上に見にたる因果は如何にといふにこれはまたいと狹く特殊なり即ち其一人物の上にのみ働く宿世の因果なり

以上は大概をいへるなれば多少の例外はあるべし且や下文にドラマ云々といへるは重にエリザ朝の性情悲劇を標準としていふあり又強ちドラマと非ドラマとの名目によりて近松が作の優劣を定めんとにもあらず且また宿命說の旨に成れる物語は總て非ドラマありといふにもあらず予は只世話物と時代物との間に結搆の相違あることを指示せんと望むのみあり讀者其の心して下の略評を見たまふべし

『最明寺殿百人上臈』を見るに是れは正しく謠曲ある『鉢の木』を臺として『源平盛衰記』の飜案を接（つぎ）木としたるものあり『女鉢の木』と題したる道行（みちゆき）の條は文さへに彼の鉢の木をさながらに移したり只常世に代ふるに其妻を以てし處々（ところ〴〵）に插文して前段との脈絡を通じたると又文情相叶ふやうに女らしく文脈を和（やわら）げて彼の勢揃への一段中に女武者の綺語を作り入れたるとが相異（さうゐ）ありその元（もと）となりし謠曲の『鉢の木』もこれぞといふ波瀾無き物語あればドラマには恰好あらぬをそを曲げて翻案したる『女鉢の木』の一段が只管目の芝居とあれること怪むに及ばざる結果あるべし

さて本篇の前段は殆ど件の鉢の木とは離れたるものあり即ち最明寺時賴が剃髮して名越（なごえ）が谷（やつ）の法華堂に故賴朝の木像を安置してこれを祀り神易（かんやす）と名（な）づけ

たる御くじによりて政の當否を知らんと試みる由をもて發端し其子天女丸時宗と其弟式部時定とが參詣せるを序びらきの事件とせるあり案ずるに此淨瑠璃は三世命鑑といふものゝ旨を骨として作り設けたりと見ゆ何とあれば時宗は義經の後身ありといふ事此序幕の中に木像の靈顯と神易とによりて知られ、そをもて後に至り天女丸と其叔父時定との間に爭戰の起るべき主ある原因としたればあり即ち時宗は義經と化し時定は賴朝と化するあり之と同時に佐野の源藤太經景といふ時宗の侍臣が梶原景時の惡靈に魅せらるゝ事ありて突然逆櫓論と同じさまの爭論を時宗とする事あり是また前世の因果の然らしむる所と釋したり次ぎに時定が兄時賴の坐禪中を機會として甥の天女丸を亡きものにせんと企て天女丸を捕へて押込めしを辛うじて逃いづるに及びて佐々木廣綱といふ者と前にいへる源藤太との間に宇治川の先陣めいたる所作あり一人は天女丸を討取らんとし一人はそを救はんとし到底時定の誅せらるゝに至りて局を結ぶ其間に天女丸を義經の再誕と唱へたる處あり〳〵ありて結末に二階道入道といふを辨慶に見たてたる塲當りもありて文章は例の輕妙を極めて流麗艶美あれど筋は三世相の講釋を聽くが如く彼の希臘悲劇に謂ふニミシスの趣意とも同じからず剩へ最明寺殿といふ表題はありながら其人は全く客とありてところ〴〵に出沒するのみ天女丸主人公のやうあれど其性質の特に著く活きたるところもなく大づかみに評すれば血氣の少年に源九郎狐がつきたらん如し女鉢の木に至りては只一人經景の名あるが爲に前後の連絡あるに似たれど其實は別の譚ありこれにも譚の主人公はあれど因果を生みいだす主人公は無し

『川中島合戰』は前の作に比べて稍や秩序あり物語として見れば前のより優りたるに似たりこれにも因果の主人公は無し或意味にていへば信玄と謙信とが主あるが如く又或意味にては勝賴と衛門姬とが主あるが如く又或意味にては山本勘介が主あるが如し作者は明かに信玄をもて眞將の器を表し謙信をもて勇將の質を表せり即ち二人は智勇二性の權化あり故に信玄は譯もなく明察ある人の如く謙信は晴雲（ヤマクモ）に勇猛短慮あるに似たり二人の間、性の異ある由は明かあれど唯女の鳥羽繪と男の鳥羽繪とを見るがごとく男女の別は明かあれども只漠然と別あるのみ第一章は諏訪明神へ兩將の社參せるをもてはじまり村上義清の私曲と勝賴と衛門姬との私通とをもて兩將開戰の因緣とす勘介の事は第

三章桔梗が原の塲より突然として說起し偶然途中にて亡命せる勝頼と姫とを救ふ事を叙し此際怒猪と戰うて勘介が脚を傷け一眼を失ふ事を叙し次いで第四章に至り信玄が勘介を招かんとして雪中に彼れが茅屋を訪ふ事を叙し勘介の母が信玄の器に服して勘介を奉公せしむる事を叙す、以上總て物語風の結構にして事々皆別々也第七章輝虎本城の塲は輝虎が勘介の智勇を慕ひて之を招かんが爲に彼れが母を招きこれを倆にして勘介を手に入れんとする條也此章ある勘介の老母のみは稍や悲劇ぶりの旨味を含まざるにあらねど其中心とありて進退せるは此章と第八章なる直江山城舘の塲のみなればほと〳〵前後には關係あし其次第九章天目山の塲は又飜りて勝頼と姫とを叙し結局合戰の上塲は彼の兩將の格闘を見せたり話の筋をいへば互ひに相通じたれども性情よりいふ因果の關係は全く支離滅裂せり要するに此作を三裂せば三種の性情劇即ちマアロウ、シエークスピヤ的ドラマを作るに堪へたり勘介若くは其母を主人公として一篇の悲劇を作るに足るべく信玄と諫信とを双主公として一篇の勇壯あるドラマを作るに足るべく勝頼と姫とを主公として更に一種のトラジエ、コメデーを作るに足るべし

『めいどの飛脚』を讀みて梅川を評す

竹のや主人の說によれば近松が世話物をかきはじめしは五十以後なりとあれバ此作も老後の筆あることたしかあり筋は例の痴情を元とし人物は男を富商の世繼とし女を色町の遊女とし舞臺を浪花としたる例の如し上中下三卷のうち下卷は所謂道行の幕(梅川忠兵衛あひやひかご)にて大詰の幕をも兼ねたり案ずるに此作も『天の網島』も雙つながら痴情の悲劇なれど痴情の成立も其發達も同じからぬ所あり隨ひて大破裂の原く所も彼れと此れとは趣を殊にせり『天の網島』にては戀情の成立もつぱら女主人公の意氣地に原づけり即ち純粹の戀情にあらで一種の義理なり此故に通篇義理と人情と相纏り戀の發達も大破裂もほとんど義理を離るゝことあし約言すれバ彼作の本體は義理と情との軋轢あり當篇は然らず先づ戀の成立異あり此差別あらかじめ作者の心にもありしにや『天の網島』の上の卷にては屢々戀情の由來を說きたるに此作にはさる事なし通篇戀情の由來をほのめかしたる所とては下卷「あひやひかご」の中に忠兵衛の言葉あるのみこれとても作者に此心ありてものしたるにあるまじけれど批評

の日より見れば由來を語りたるものと見て不可なかるべし其言に曰く「それ覺にてかいつのことかの初雪の朝ごみに寐巻ながらに送られし大門口の薄雪も今降る雪もかはらねど變り果たる身の行衛我ゆゑ染めていとほしや元の白地をあさぎよりこいは譽田の八幡に起請誓紙の筆の罰」云々と、思ふに此二人の戀中は馴染むにつれて深くおのづからなる因果おらん素より其間に種々の人情くさ〴〵の義理からまりて相思を募らする因緣となりしならんが其因緣の影の殘らざるを見れば假令おりきとするも強大おる主因にはおらで微弱おる客緣おりしこと明けし言葉を換へていへば情は先にて理は後なりしなるべし扨中の卷なる梅川が述懷の段に「夕霧の昔を今にひきかけて」と前置きおりて淨瑠璃の文句を引き其續きに「又はじめより偽の勤ばかりに逢ふ人も絶にず重ぬる色ごろも遂の寄邊となる時は初の偽も皆誠とかく唯戀路にはいつはりも無く誠も爲し緣のおるのが誠ぞや逢ふこと叶はぬ男をばしひ〳〵て思ひが積り思ひ醒にも醒むるもの」云々といはせたるを見れば梅川が戀の水上はかの觴を浮ぶるに足るといふ涓々たる細流にやありけんさすれば是人情の自然の果おり無分別無思量の中におりし戀おり分別思量より募れる小春が戀とは差あり

小春と梅川とは其性を異にせり小春は頗る俠氣あれば義理の繫れる所には泣くまじと張る意地おりて心に泣くも色目には見にじとし目には泣くも口には泣くまじとする張おり梅川には此張見にず「つらき勤をかきのもと島屋を一寸島がくれ」して越後屋に來りあらはに我心の哀を語り「ヲヽし淸さんけふは島屋でかの田舍のうてずにせびらかされて頭が痛い忠さまはまだ見えぬかせめて由緣に貴孃の貌が見たさに貸しに來た」と質樸に懷を吐けるは所謂「思ひの定宿」の事おれば「氣兼せず底意殘さぬ」所おるべければこれは普通の人情とも見做すべきが朋輩女郎に向ひての述懷には梅川に自立の意地乏しく他人にすがりて同感を求むる趣あること見えたり客を待つ間の氣晴に遊女ども酒をのみ拳をうち「こおさまは拳の上手、よひからちよと〳〵せさまにしつけられて無念おゝ敵とつて下さんせ銚子直しや」とさゝめけや氣もあらばこそ此梅川が今の身を少しは泣いて貰ひたや」とうちふさぐ、此詞の身勝手にて傍若無人おる如きに切おる情見にて梅川の本性あらはれたり蓋し梅川は世間を知らぬ程の恍惚兒おらねど切おる痴情に心昏みて時々我の外の

世界を忘れ我と他人とを同じやうに思ひ我苦みを他人も苦みてくれそあるものと思ふ、情に切ある故なり、さてかゝる時意地強くゞ或は他人を怨み他人を薄情と憎まん心もいづべけれど意地弱く張あきものは只打泣きて同感を求むべし梅川の如きは後の亞流なり彼れ又曰ふ「田舎の客が身請の事(云々)腹がたつやら憎いやら」と、是はとんと朋輩を骨肉と同視したる述懐とも評すべし」とはいひあがら此は先忠兵衛さまは後手といひ『宿』の勢力一ッにて手附も渡し約束の日限きれるもいひ延し、けふまではつあがりしが云々」と取越苦勞を述べ「如何なる事が邪魔にあり田舎の客に請けられては我身一つは死んでものけふ」と公言す恍惚娘が乳母の前に泣臥す時の趣に似たり「天神太夫の身でも無しさもしい金に氣がふれた店の女郎の淺ましさと世間の唱へ朋輩の掃部どのをはじめとして格子女郎衆の手前もある」とは愚痴の助太刀にもちだせし理屈にて「忠さまと本意を遂げ右や左人に唱はれし面がぬぎたうござんす」といへるは梅川が誠心の底あるべし必竟梅川の性質には奥底なく心に苦みある時は胸を披いて朋輩に語る小春が斷腸の苦痛悲哀あるも呑んで言はぬとは趣異あるけだし此奥底あき梅川の氣質こそ多くの朋輩を得たりし源あらめそは梅川が述懐をきく「一

坐の女郎身の上に思ひ合せて尤とつれて涙を流せし」とあるを見ても知らる奥底あき心の誠が人皆の同感を呼べるあり要するに梅川は勤の女に稀有ある質樸の本性ありこれを素直ともあどあしともいふべし是まづ小春と異あれる一點なり

且又此折の梅川の苦痛を小春の苦みに比ぶるにこれは切あれど不安心の苦みあり彼れは絶望の淵に臨めり此れには流石に頼あれど彼れには世の義理を棄てざれば望を維ぐべき便無しこれには義理の柵あく彼れは世の義理を大敵とす苦みの度をいはば小春のかた一倍あるべし而も小春は之を口外して同感を呼ばざるに梅川は頻に他人に訴ふ是れは梅川の情の小春のよりも切あるが故かといはんに『天の網島』を讀めるものは小春の情の梅川のに優るとも劣らぬを知るべし所詮二人の差は情の量の上にあらで情の作用の上にあり彼れは情を制し此れは情を抑ねず彼れは意強く此れは意弱し是前にいへる相違より自然に派生せる結果なり

扨又忠兵衛が八右衛門に恥かしめられ一旦の腹立に前後を忘れ郎の金の封切て擲つけやがて喧嘩とあらんとせし時梅川涙にくれて二階よりかけおり「情あ

や忠兵衛さま何故そのやうに逆上らんすそもや廓へ來る人のたとへ持丸長者でも金につまるいわる習ひ此の恥は恥おらず何を當に人の金封を切て撒散らし詮義にわふてろうひつの繩にかゝるのといふ恥とかへらるか」と泣きくどきたるは頗る條理ありて一向にわをけおき本性とも見にす併しながら其次の言葉に「恥かくばかりか梅川は何とおれといふことぞ篤と心をおとしつけ八さまにわびごとし金を束ねて其主へ早う届けて下さんせ妾を人手に遣ともおいそれは此身も同じこと身一つすてると思ふたら皆胸にこめてゐる……氣をしづめて下さんせ淺ましい氣におらんした斯は誰がした妾がした皆梅川がゆゑおれば忝おいやらいとしいやら心を推して下さんせ」といふ、是は理性の言葉おらず理義を說く如く男を諫むる如く我れを責むる如く男を思ふ如く我を思ふ如く男を主とせる如く我れを主とせる如く纏紛錯亂麻糸の風にもつるゝ如く嗚咽歔欷の聲依稀と聞に「小ばんの上にはら〳〵と玉おす涙ほとばしり井手の山吹に置く露」と相競ふさまを見る心地す是眞に至情の言葉おり其いふ所に理義もあれど理は只情の後援おるのみ情は主とおりて理は客とおれり

忠兵衛既に狂憤自棄して咄嗟に梅川の身請をすまし直に相携へて走らんとす梅川が理性に富める女おらば前後の事情より推測しても忠兵衛の本心を察すべき筈なり然るに尙恍惚としてめつたにせく男をみかへり「おんぞいの一代の外聞朋輩衆へも盃事いとまごひも譯ようして徐々と出して下さんせ」と何心なく勇みたる情の女の證なり我心に裏おければ人の言葉をも疑はぬ本性の淸きを見るべし男わつと泣いだし「いとしや何も知らずか」といふ、此無邪氣質撲のうつくしさをこそ忠兵衛ならぬものも値おりと値蹈すべけれ

小春と梅川とを對していはば小春は其表派手にして其裏淋しく梅川は其裏優にて其表哀れなり小春は秋の紅葉の如く絢爛としてまばゆけれど散ゆく時は一葉をもとゞめず梅川は如月の青柳の如し裊々と玄だれたる枝は軟かなる春の風にだに得堪へじ心に小春を畵けば鼻筋通りて眉は蛾翼の如く丹花の唇、きつとしまりて凉しき眼じりの力身楚々動人の姿態髣髴と浮ぶ、心に梅川を畵けば豊なる頰けしきばかり痩せて後髪の一筋二筋花の如き瞼うるさげにかゝりかなり彼なたは雪間の紅梅此なたは雨中の海棠、彼なたは意氣地を命とし又男

を命とすされバ義理を天とあがめ思ふ男を地としたるにこゝたは男を天地と
し神佛とし性命とす、小春は、巖陰にひとり咲ける蘭の如く梅川は松に纏へる蔦
紅葉の如し彼れにはおのづから自立の相あれど此れには絶にてさる相おしさ
れバ男が本意を明し詮義の來ぬうち飛べといへばはつと驚きおきいだし「それ
見さんせ常にいひしはこのこと、おせに命が惜いぞ、ふたり死ぬれば本望今とて
もやすいこと分別すゑて下さんせ」と一だびは胸を据におがら「生らるゝだけ生
きて」といふ男の言葉に心變り「そふぢやいきらるゝだけそはふ」と答へ共に廓を
走りいづるは情の自然といひおがら專ら男に頼ればあり切なる情にこそ主客
は無けれ二人が進退を上をいへば忠兵衛は主にて梅川は從なり此編に見にた
る戀の小春の意地をもて主因とせる『天の網島』のと同じからぬ所以あり
戀の成立已に斯くの如く同じからねば大破裂の原因もまた格別なり『天の網島』
にては戀の成立ちし元をさ〳〵女の意氣地おれば其業因綿々と絶にず最後の
大破裂もをさ〳〵意氣地の作用に基き臨終の期に及ぶまでも意氣地の影を失
ふこと無し然るに此作なる戀の成立ははじめより情のみによれる故情の業因
絶ゆること無し

『底知らずの湖』と題して『讀賣新聞』一廿四年一月の新年附錄に掲げしものをも卷
末に添へんの心おりしが彼の文はあまりに拙劣おるが上に其の旨も獨合
點に類してかたはらいたければ省くことゝしつ『底知らずの湖』は脚本の本
質を比喩をもて說かんと試みたるにてシエークスピヤ(Shake-
sphere)をもぢりギヨオテを驚天の沼に近きものおりと說き万理想を容れて餘あるが眞脚本の本質なりといふ
意をほのめかしたるものなり

小羊漫言　終

17981

明治二十六年六月十六日印刷
明治二十六年六月十九日發行

版權所有

著者　坪内雄藏　東京市牛込市ヶ谷大久保余丁町百十二番地
著者　江草斧太郎　東京神田區一ッ橋通町七番地
發行者　松澤玨三　東京市麹町區下六番町十七番地
印刷者　同勞舍　東京市麹町區下六番町十七番地
印刷所　有斐閣書房　東京市神田區一ッ橋通町七番地三號地
發行所　有斐閣書房　東京市日本橋區通リ四丁目五番地
大賣捌所　春陽堂　東京市神田區一ッ橋通町七番地五號地
大賣捌所　有斐閣雜誌店

定價金貳拾五錢

各府縣賣捌書肆

東京日本橋區通一丁目　大倉書店
東京京橋區南傳馬町　目黑支店
東京日本橋通三丁目　丸善書店
東京日本橋新大阪町　小林喜右工門
東京日本橋室町　杉本七百丸
東京日本橋若松町　榊原友吉
東京神田表神保町　東京堂
東京京橋尾張町　東海堂
東京神田美土代町　武藏屋
東京本郷一丁目　有終閣
大坂東區本町　岡島眞七
大坂心齋橋通り　三木佐助
名古屋本町　川瀨代助
大坂東區備後町　吉岡平助
信州長野　西澤喜太郎
靜岡甲府　五明堂
大坂北久太郎町　柳原喜兵衛
大坂備後町　梅原龜七
大坂安堂寺町　青木嵩山堂
京都寺町　田中治兵衛
肥後熊本　長崎次郎
京都河原町　大黑屋書店
鹿兒島六日町通　吉田幸兵衛

山梨縣甲府　抑正堂
金澤市尾張町　雲根堂
博多　積善舘支店
富山市四十物町　中田支店
靜岡市馬場町　文源堂
東海道沼津町　闡契堂
遠州濱松　齋藤源三郎
出雲　盛春堂
京都南新町　便利堂
神戸相生橋　熊ヶ谷久榮堂
肥後熊本　あやーや新聞舖
岡山市西大寺町　武內彌三郎
岡山市西大寺町　安中半三郎
同京橋區彌左衛門町　室直三郎
同芝區三田一丁目　水琴堂
同京橋區銀座四丁目　山本音四郎
同同區三田同朋町　三輪文次郎
同同區三田一丁目　片野東四郎
同本鄉區元富士町　品川太右工門
同南崔原郡大森南原町　青柳堂
同麹町區三番町　盛春堂
同芝區三田同朋町　巖々堂
同京橋區出雲町　福島書店
同芝區佐久間町一丁目
同麻布區飯倉三丁目
同日本橋區本銀町三丁目
同芝區愛宕下町四丁目
同京橋區銀座二丁目
同神田區小川町
同同區鍛冶町
同京橋區尾張町二丁目
同本鄉區湯島天神町三丁目
同日本橋區小網町
同麹町區阪田町
同神田區裏神保町
同牛込區肴町
同芝區柴井町
同本鄉區本鄉四丁目
同日本橋區濱松町
同牛込區神樂坂上
同同區通寺町
同淺草區北松山町
同本所區相生町五丁目

捌所

岸田書店　信文堂出張店
書彦堂　平林新平
解明堂書店　日成堂
瓦故堂　芳文閣
山田屋甚七　岡田書店
栗原書店　大西書店
飯田書店　新盛堂
山本益二郎　安井文欽堂
大塚書店　庭花堂
吟松堂書店　萬松堂
佐々木書店　小出書店
改進堂　鈴木書店
信文堂　旭堂
洗心堂　齋藤書店
敬業社雜誌部　萬春堂
活神堂　華陽堂
鴻盟社　梅田書店
文壽堂　開進堂
安田書店　河島九右衛門
正導社　愛新軒
深野書店　飯田信文堂
珠水屋　東枝律書店
見珍堂　改進堂

同京橋區銀座四丁目
同同區三田同朋町
同本鄉區元富士町
同神田區錦町二丁目
同京橋區出雲町
同芝區佐久間町一丁目
同芝區愛宕下町四丁目
同京橋區銀座二丁目
同神田區小川町
同同區鍛冶町
同京橋區尾張町二丁目
同本鄉區湯島天神町三丁目
同日本橋區小網町
同麹町區阪田町
同神田區裏神保町
同牛込區肴町
同芝區柴井町
同本鄉區本鄉四丁目
同日本橋區濱松町
同牛込區神樂坂上
同同區通寺町
同淺草區北松山町
同本所區相生町五丁目

BOOK STORE
NANYO
富山縣

ル
コル

賣捌所

同油小路北小路上ル玉本町　興教書院
同東區瓦町四丁目　中村峰雄
同博勞町四丁目　平井新聞店
岡山縣西大寺町　西崎友次郎堂
橫濱辨天通三丁目　神聲堂
同本町　日之出屋
同太田町二丁目　日月堂
同同町三丁目　萬理商會
高知縣京町　小島屋支舖
同元町五丁目　船井新聞舖
同多門通二丁目　島新聞舖
上州新田郡本町　西村鐵藏堂
埼玉縣熊ヶ谷驛本町　近榮堂
埼玉縣浦和宿表門　中村朝二郎
同八王子日町　熊澤傳四郎社
同大宮驛　三育
神奈川縣橫須賀　武田吉次郎
同小田原線町　石壽堂
秋田縣南秋田上通町　鈴木鐵次
同秋田市酒田港　白崎善助
仙臺市大町四丁目　木文商店
富山縣富山市上ノ立町　福田清明堂

福井縣福井
福島縣岩代郡山
同盤城白河天神町
新潟縣新發田
同三條町
栃木縣宇都宮池上町
同栃木萬町
同足利町五丁目
群馬縣前橋連雀町
同高崎田町
千葉縣千葉
石川縣金澤市
同加賀大聖寺
長野縣松本本町二丁目
同同町一丁目
同上諏訪桑原町
同長野吉田本町
同
羽前國鶴岡五日町
同同荒町
愛知縣名古屋市
同同

岡崎佐喜助
櫻井元吉
奥村書店
時事堂
樋口屋
手塚祐次郎
上原興平二
三泉堂
報告堂
文心堂
立眞會社
菁々堂
世舍
醒美書店
高松榮堂
日新堂
長田粂五郎
相場書店
小池藤次郎
活眼堂
耐成堂
金號館